は精神上にも遊惰の氣風を生ぜしむる傾向を有してをると思はれる。此の點からいふと此の地方の人士は大に憐むべきものなのである。

▲一般の氣質

然しながら薩摩、大隅の二國がかく自然の災厄の蒙れるのにも拘はらず、概してその恩惠をうくることが多いからして土着の人士の生活はむしろ安易である。若し消極的に唯その分を守るといふことを以て安んじ得らるゝならば確に此の地方の人は幸福である。常に質素な活計を立てゝその生涯を送れば足るといふ考ならば至極無事である。されば從前の封建制度の時代にはよく此の地方の社會の秩序は整つて居て上下の統一が巧に行れてをつた。領主たる島津氏もつとめて他國との交通を避け外部よりの刺激を與へぬやうにしてそれ〴〵士民の分限を立てその生活に安堵せしめてをつたのである。今日では兎に角維新前後までは、猾智に長けたものだとか、放蕩無頼のものなどは殆ど居らなかつたといつてもよい。實に優遊天命を樂んで自適するのには都合のよい地方である。が、その代りに一般の思想が進取の氣質を缺いてをる。頑固で自信の念に強い。習慣とか規則とかいふ嚴肅で臨機應變に生活に處するといふ敏捷な活氣が無い。此の氣風は今日では尚ほ盛んである。その弊害は時勢の變遷につれて大いに注目すべきものがあると思はれる。

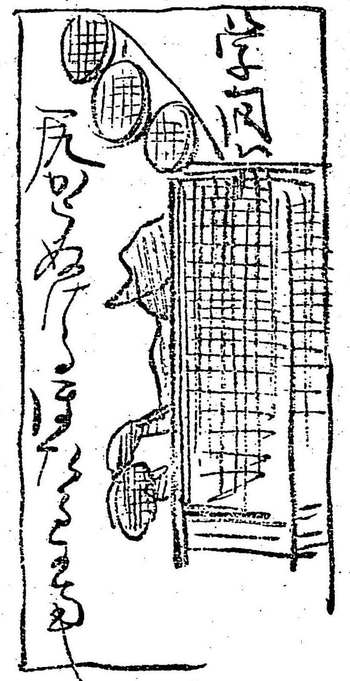
萬事進取の氣象に乏しく消極的滿足に耽つてをるからして古來此の地方は階級制度が嚴重であり、浮華をきらふといふ風からして女色を遠ざけ反つて男色を愛する傾がある。加ふるに地方的觀念が著しく發達して他村他鄉のものを疎んじ殆ど部落的團結に重きを置いてをる。此等は今日の文明と相容れない點でもあらうか。それも封建時代には實質上に此の氣質が盛んであつたが今日では單に形式上にのみ流れるやうになつてをるから他國人から見て甚だ厭はしい風習が多いのである。

無蓋の蔵

無名氏

夏の趣味

九夏三伏、烈々の盛夏。涼を團扇に呼ぶ、甲斐なし。涼を綠陰の釣褥に呼ぶ、甲斐なし。銀盤に氷を碎く、甲斐なし神爽し氣沮む、而して惰氣身邊を襲ひ來る。常には快心の書も今日は更に快ならず。あはれ、苦熱、これを如何にせん。



前栽を臨む。朝顔、花凋み、その葉亦生色なし。水蠆花、つゝばね草、貝細工、萩、桔梗、花のいろ〳〵確かに尚ほ生色を保ち、その色を保てど、既に半ばは死せるが如し。知らず、わが惰氣も半ばは、われを殺せるにあらずや。

無聲の聲は叫やさて曰く、夏の晨を思へ。旭の光を受けし山巓は遙かに望まるれど、これに到る道は尚ほ淺霧にて包まれたり。前栽には露一面に滿ち、土に生氣あり、草木に生氣あり、しかも花僅に笑めり、希望の光、四邊に滿ちつゝて人亦た活氣に滿つ、人生の曉、正にかゝる境なるべきか。あはれ、趣味ある夏の晨かな。自然の惠澤、いかに豐かなることよ。

されども、この曉、人は自ら嚴かに鎧はさるべからず。いかにとなれば、趣味豐かなる夏の晨の二

時三時は、頓て彼の烈々の炎暑を迎ふべければなり。晨に引きしめられざる鎧は、遂に炎暑の晝には引きしめ得べからざればなり。晨に催ほされし惰氣は遂に其の終日を、いかにとも爲すべからざらしむればなり。

建てらるゝ間、鎚の音聞こえずといふ。惰氣の生ずる、不知不識の間に於てすると知らば、人は此の晨、趣味豐かなる自然の景物に醉へる間、大に覺悟せざるべからずや。知らずや、ナザレの天地靜かなるところに、神の宮は聲なくして建てられつゝありしを。夏の晨の、われ等に敎ゆる敎訓は制抑の德なり。靜かに經營さるゝ事は長き後に於いて必ず勝を占むと、日また日、趣味ある晨は、やがて苦熱の白日を來たすべき所以を知りて、常に制抑怠るなくは、苦熱、必ずしも苦熱ならず、剛扇、釣床、氷を用ふるを要せずして、惰氣遂に襲ひ來ること無きを得ん。

無聲の聲は、また呵やきていよ。

東天白み初めて曙の近きを告げ、曙の色は日出の近づけるを告ぐるが如く、日色漸く薄くして鯛の聲諸處に聞ゆるとき夕の近きを告げ、夕の近きは頓て趣味ある夜の來るべきを告ぐると。

些末なる小事、往々綿々たる追懷を惹き起す緒となることあり。一縷の輕香、はしなく有りし昔の花園をしのばしめ、塵土に歸せし人を懷ひ起さしむることあり。青き花紐の一片を見て、恍然として過ぎ去りしわが生涯に立ち返へり、これに伴ふ一塲の畫圖を活現せしむ。かくの如く、われ等、晨には夕を思ひ、夕には晨を思ひ、晨より夕に至るまで、敢て心の武裝を解くことなくば、いかなる炎暑も遂にわれ等に惰氣を生ぜしむることなからん。しかして、かくして勤勉の一日々々を送る時、われ等の心は活潑にして、意氣いよ〳〵昂がるべし。われ等の心かく活潑にして活動的ならば夏の朝、夕、その趣味を感ずることも、いよ〳〵多く、而して苦熱は反つてわれ等の決心を強ふせしむべし。蓋し心活動せざれば、懷ひを行ることと甚だ自由ならざればなり。

暑の趣味は、海水浴にあらず、旅行にあらず、釣床にあらず、團扇にあらずして、その變化多きことにあり。而して此の變化は、吾人に無限の愉快を與ふるとゝもに、一種の敎訓を與ふ。涼しき晨は、われ等をして苦熱の白晝に赴く準備を致さしめ、大なる覺悟を以つて此の心を抑制し、以つて白晝の苦熱に對せるわが心は、涼しき夕に慰められ、しかして、明日の覺悟をして今日よりも更に大ならしむればなり。

故正岡子規氏歌ふて曰はく。

學問は尻から拔ける螢かな。

と、句短かく意微妙なりと雖も、深く之れを味はゞ自ら捨てがたき興味を生ずべし。われ等敢えてこゝに云はじ。

成功と自殺

『成功』と『自殺』この二語は、刻下の諸新聞雜誌に於いて繰り返さるゝ二語なり。これを網の目に譬ふ。千感萬想は糸口相牽き、相連りて意識の一點に歸着す。この結び目は即ちわれ自我の安宅なり。帝座なり。されど、此の結び目や、緊きに過ぐるも不可、緩きに失するも不可、弛張宜しく自在にして、決して一方に偏倚すべからず、人の一念に凝る時、件の自在則はち廢して繫結固澁、漸く意識の平均を破らんとするに至るとは、嘗て島村抱月氏が屈原を論ぜし一節なり。自殺はまことに斯くして來る。悲觀もまことに斯くして來る、心また斯くの如くして漸く倦怠す。われ人ともに覺悟するところ無かるべからざるは此の一念なり。

成功と云ふ字の唱へらるることしきりにして、坊間多く『成功』の字を冠せし冊子顯はる。しかして未だ學に在る青年は、先を爭ひて、これを購ひ求

む。購ひ求めて彼等は、それ或は多少の得ることあらむ。これ等の書冊は、青年の劣情を呼ぶべき小冊子に勝ること千萬ならん。されども、彼等は遂に能く成功することを得じ。

成功の要は、まことに此の一念に在り、わが意識の結び目緊ければ、その人即はち成功するに近かるべく、その結び目緩ければ、何等の成功なかるべく、而して、その結び目にして、あまり緊しかちば、遂に其の心平均を失ひ、倨傲遂に自殺に終るか、さなくば 墮落、そのところを失ふに至らん。

要するに、この一念の結び目の如何によりて、こゝに成功あるべく、自殺の心も生ずべく、倦怠の心も生ずべし。諸子、希くは、此の刹那、此の心より生じ來る無聲の聲に、絶えず其の耳を傾けよこれ唯一成功の秘訣にして、同時に亦た、諸子が自らの意識に聽き、而して能く自ら抑制し得べき唯一の方便なればなり。

生死の戰

二〇

往昔、戰ありし地を過ぎるに萬軍の猛り狂ひ、喘ぎ苦しめる痕跡尋ぬべからず、鮮血流れ、人僵れ臥したる地、今は黄麥の浪を捲きて雲雀謠へり。唯だ勝ちしものゝ建て置きし墓碑、紀念標の殘るありて、忘れたる昔を物語るのみ、その如く「われ勝てり」との紀念碑的一語は、永へに聳えて此の靜かなる終生の苦戰の形見を萬世に遺すなり。とはニコール氏が『基督傳』の一節なり。

人には常に種々の誘惑あり。人間の一生は此の誘惑と、生死を決すべき戰なり。しかして此の戰は往々凄烈なる靜默のうちに戰はる。されば、三たび重ねて云ふ。われ等諸子とともに、宜しく此の無聲の聲に心耳を傾くべきなりと。

海上の交通

（十九世紀に於ける交通機關の發達の三）

二 秋生

海洋上の交通機關には從來さして甚だしい變遷も無かつたので、或は終始殆ど同じ所に彷徨して居るのではないかと思はれたる位であるから、ふ話も頗る簡單で濟む筈である。詰り特筆大書すべき發達は既往に在らずして寧ろ未來の事に屬して居ると謂ふて妨げない。

古の人は樣々なる形の小舟を使用し矢張り櫂又は帆に依りて之を操つるを今日と少しも異る所が無い。そして書契以前も書契以後も亦變りが無かつた樣である。其れは、鐵器時代の前即ち青銅の時代に瑞西の湖邊に棲息した人種の遺物の中に獨木舟の發見せられたものがあり、又「クライド」の堆砂地にて海面二十呎餘の所で無數の獨木舟が發見されたが是れは前のに比して更に古く石器時代に屬するものであると云ふをで、是等に依て大凡そ證據立てることが出來やう。

フィニシヤ人、カーセーヂ人、波斯人、若くは希臘人のやうな古の大民族は何れも皆艦隊を持つて居たもので、大海戰なぞは其頃今日に於けるよりは寧ろ普通であつた位である。斯かる艦隊はホーマーの時代にも亦珍らしくなかつた所から見れば既に紀元前三千年以上の頃にも確に存在して居つた樣に思はれるが、如何にも進歩の捗らなかつたものではある。さて此の船艦の最も大きなものになると數百の士隷を使役し大櫂を以て三四隊交互相代つて漕がしめた。是れが即ち彼等の所謂「ガレイ」と云ふものであつて、恰も昔の蒸氣船の如く風潮に逆つて進行するとが出來たものである。若し風向の好いときは帆を用ふるのであるが、其の使用法も今日吾々が爲す所とさして變りは無い。此に可笑しきは「ガレイ」の漕手は場所に繋れたまゝ安に動くとも出來ないので、其れには監視者が附いて居つて、「ヘビー」を要する場合には鞭を擧げて

遠慮會釋も無く叱咤したものである。

紀元前五百年の頃、ハンノと云ふカーセーヂ人が一隊の船を率いて地中海を出で亞弗利加の西海岸に沿て赤道附近に達した事がある。蓋し是が土地發見の第一着たる航海であつて、多少記錄などの存するのがある。司令官ハンノ自身の書いたものゝ中に「有毛の人民」と云ふ語が有るが、是れは彼が「ゴリラ」の名の下に出逢つた人種であるが、此「ゴリラ」と云ふ語は竟に熱帶亞弗利加に產する大猩々の特稱とせらるゝやうになつた。元來亞弗利加には有毛の人民と云ふものが無い筈であるから、ハンノが見たと稱するのは其實右の大猩々か又は黑猩々であつて、彼は之を有毛の人類でゝもあるかと考へたものであらう。其れは兎も角ハンノの亞弗利加行に次で航海上の大なる紀念は今より凡そ九百年前ノルスメンが亞米利加の北海岸、南方遙に新英吉利（ニューイングランド）に達する迄を發見した事實である。即ち亞米利加第一着の發見はコロンバスの時代に先だつこと約五百年以前に於て既に爲されたのである。コロンバスは一四九二年西班牙から西印度諸島まで、詰り太西洋の最も廣い部分を横つたものと云ふに過ぎないので、但だコロンバスの航海は確に從來行はれた航海の中で最も大膽だと云ふ紀念を止めた者と謂ふをは出來る。一四九七年になつて葡萄牙の船長ヴアスコ、ダ、ガマが喜望峰を周つて「カルカッタ」に達し初めて印度に至る航路を發見した。此の時分からして帆走船は漸次改良を加へられた。帆走船は竟に進んで英國の壯麗なる中軍艦（フリゲート）の如きとなり、又清埃兩國間の貿易に使用せられたる快船（スクリツパー）の如きとなり、何れも十八世紀の半頃まで行はれた。併し此間を通じて原則に於ては矢張何等の變化も無く唯だ太古の粗野なる帆走船が次第に幾多の小修正小改良を加へられた結果大三層船又は快船を現ずるに至つただけの直接の發達があつた計りである。

而して蒸氣機關を以て橈輪（パツドル、ホイール）を動かすと云ふ新原理

が初めて行はるゝに至つたのは、實に第十九世紀の發端に在り。最初は先づ經驗的に普通の河川や運河湖水などで行つて見たのだが、數多の失敗を重ねた後竟に一八一五年頃に及んでは沿岸航海用の小形蒸氣船が寧ろ普通に行はるゝやうになつた斯くして漸次急激なる改良が加へらるゝに至つた。けれども併し噸數一三四〇、馬力四〇〇を有する滊船グレート、ウエスタン號が十四日間に於て「ブリストル」から紐育（ニューヨーク）に到着して以て其後今日の盛況に達した蒸氣船遠洋航海の端緒を開いたのは漸く一八三八年以後の事である。滊船の速力は其頃平均一時間に約十哩の上を出なかつた。が、今日は既に其の二倍以上に達し、尙は更に增加しつゝある。是れは、一には橈輪（パツドル、ホイール）の代りに暗輪（スクリユー）を使用するやうになつたのと、又一には蒸氣機關の構造に大改良が施されたのとに因るであらうが、其の主要なる原因は殊に船形が非常に大きくなつたと云ふ事に在りて存するのであらう。馬力は更に甚大なる比例を以て增加した。要するに前述の樣な大速力を有するに至らしめたのと、多量の石炭を有利的に消費するをが出來る樣にならしめたのは一に大なる船形と且乘客及び貨物の澤山を運ぶに足るだけの能力とのお蔭であるのだ。

滊船航海上の最近の進步は蒸氣機關の至極簡單にして又經濟的なる一形式、即ち水平車輪（ステイームウヒル）の發明と、及び大速力を以て廻輪する若干の暗輪を使用したとに在る。是れに依つて構造せられた或種の水雷艇並に水雷驅逐艇は一時間三十哩から四十哩程の速力で奔るをが出來たが、尙は此上の速力に達せんとをも敢て難くはない樣である。又かの煙草形ボート若くは「ローラー、ボート」等の如き幾多の端艇は疇昔には決して見るをを得なかつたものである。が更に堅固にして迅速なる船は續々發明せられんとしつゝあるので、即ち一般に海上の交通機關は是れからが眞の發達の幕に入らうと云ふ時に際して居るのである。

實業問答

解答擔任　伊藤秋南

予は本誌第一學期へ實業用語案内を連載しましたが、これは或る用語を掲げ其意義を解説したものであるが、實際この實業の用語なるものは唯だ其意義はかく〳〵でありますと謂ふだけであれば、説明は簡單であるけれどそれだけでは少しも利益がない。矢張其用ひらる〻場合及びそれに關係する經濟上の制度又は原理を述べなければならぬのであります。然るに一々掲げたる用語毎にこれ等のことを詳細に説明するときは同一のことを幾度となく繰返してお話しなければならぬ。これを避けんとせば常に不滿足なる説明になる譯で甚だ困難したのであります。そこでこれは寧ろ實業問答として或る實際上の問題を掲げその中に用語の説明をも附する方が諸君の爲めに有益ならんと考へこの二學期よりかく改めることに致したのであります。問題は可成讀者諸君の御問を掲ける積りであるから實業上の疑義は随意にお質問あつて差支はないのであります。以上は一寸前置として申上て置きます。

●産業組合の組織及び其設立の手續如何

解答　我國現行産業組合法に據ると産業組合と謂ふ名稱に包含さる〻組合の種類は信用組合、販賣組合、購買組合、生産組合の四つであるけれども其組織とか設立の手續は何れも同じである。先づ其組織よりお話致さんに、この組合は七名以上の人を以て組織しなければ設立すること出來ません。又各其組合員の出し合ふ出資一口の金額は均一でなくてはならないことにしてあるのである。それから各組合員の責任は如何であるかと謂ふに無限のものもあり、有限のものもあれば又保證責任のものもあるのである。責任の無限であるものは無限責任組合と謂ひ、有限なものは有限責任組合と謂ふのである。無限責任の組織であるときには若し其組合が自己の財産を以て其負債を償ふことが出來得ないことが起つた場合に其組合員連帶で之を負擔しなければならない。有限責任組合の組

織であれはこの場合に其組合員は各自の出資額以上の負擔を爲すことはないのである。保證責任組合の組織の場合には其出資額の外各組合員が保證して居る額迄は負擔しなくてはならぬのである。それから組合の業務は如何して之を行ふかと謂ふにこれは其組合員全躰より理事及び監事何名かを選擧しこの役員か主として之を行ふのである。勿論この役員の外に多くの傭人は使つて居るか、それは唯だこの役員に使はれるに過ぎない。

次にこの組合を設立する手續は先づ其設立者が協議して定款を作り之を添へて地方長官に設立の許可を申請するのである。それで地方長官の許可を受けたときは直ちに其組合員をして各自の出資に就いて第一回の拂込を爲さしめるのである。これと同時に組合は所轄の登記所に於て登記を經、そこで始めて組合が成立するのであります。

●銀行の主要なる業務を問ふ

解答　銀行の主要なる業務は一預金、二貸付、三爲替の三つである。預金とは銀行が一般公衆の爲めに金を預ることであつて普通は銀行が其金に對して相當の利子を預金主へ拂ふことになつて居る。この預金には定期預り、通知預り、當座預り、保護預りの四種があります。定期預りと謂ふは三ヶ月とか六ヶ月とか豫め一定の期限を約束して預かるものを謂ひ、通知預りと謂ふは豫め其期限を定めずに預り、預金主が引出すときは或期日前に其金額を前以て銀行に通知し、以て引出す契約にて預かるものを謂ひ、當座預りは矢張り其期限を豫め約束せずに預かり預金主は何時にても隨時に之を引出すことの出來るものを謂ふのである。保護預りと謂ふのは銀行が封印の儘預かり之を少しも融通することの出來ないことにしてあるものを謂ふのである。

貸附とは謂ふまでもなく銀行が一般公衆に對して貸金を貸すことである。これは大別すれは貸附と手形割引の二になる。貸附には一抵當貸附、二保

證貸附、三信用貸附の三つの方法があります。抵當貸附とは銀行が借主より相當の抵當物件を提供せしめ之れに對して資金を貸すことである。この抵當物件は通例公債、株券、社債等確實なる有價證券であつて、土地の如きものはあまり多く銀行が取りません。保證貸附とは借主の外に他人が債務の保證を爲し、それで銀行が資金を貸出すものであります。又信用貸附と謂ふは全く借主の人物を信用して銀行が資金を融通するものであつて、これは餘程危險の多いものであるから普通の銀行では餘り多くこの種の貸附は致しません。抵當貸附は以上の如くであるが其方法は正式の證文を借主より取り又相當の利子を採るとは勿論のことである。次に手形割引と謂ふのは如何と謂ふに是は銀行が商業手形を割引して買ふとである。故に手形割引の場合には銀行と其割引を請求する人との間には必ずしも貸借の關係を生するものではない。即ち自分の振出した約束手形か若しくは自分に宛

てられた爲替手形を割引して貰ふ場合でなければ直接に貸借の關係を生する筈はないのである。併し銀行の側から見れはこの手形割引は常に銀行の資金を貸附することになるのである。それは何故であるかと謂ふに銀行が手形を割引する、精しく謂へは銀行が手形を其額面の金高より幾分か割引して買ふと謂ふことは即ち銀行が其手形の取立を爲すまで其代價だけを他に貸付たことになり其割引した丈は恰もテン引利子になるからである。次に爲替と謂ふのは銀行が遠隔の地に送金する人の爲めに送金爲替の業務を行ひ又は爲替手形の賣買を爲すことである。銀行の主要なる業務は先づ大躰この三者である。この外附隨して居る業務は尚は多くあるがそれは略します。

●大銀行に於て預金に利子を附せざるものありと謂ふがこれは如何なる理由なるか

解答　これは我國の如き資本の充分に豊でない國には容易にないことであるけれども英國の如く資

本の有餘れる國には左程に目新しいことではない畢竟國に資本が充實して居り國民が貯蓄心に富んで居る時には一般の金利は安くなるから預金利子は益々低下して來るものである。そこで一方預金者の方から見ればこの金を銀行に預け入れると謂ふのは利子を得ると謂ふことばかりではなく安全に金を保存したいと謂ふ意に出づるものである。故に可成確實なる銀行を選んで預けたいと謂ふことになる。一人のみでない預金者は概してかく考へるのである。その爲めに大銀行は利子を非常に安くして全く無利子にしても尚は預入が澤山あることになるので自然無利子の預金が出來るのである。

●會社營業の箇人營業に勝る點如何。

解答　會社營業の箇人營業に勝る重なる點は第一に大規模生產を爲し得ることである。大規模生產は必ず會社營業でなくては出來ないと謂ふ譯ではない。假令箇人であつても會社と同じ大資本を有

するものでさへあれば矢張り大規模生產を爲すことは出來る。それ故に大資本を有する箇人營業であれば會社營業と殆んど異ることはありません。併しかく一箇人にて大資本を有し大會社と同一の營業を爲すことの出來るものは極めて少ないもので大抵箇人營業は小規模である。然るに會社營業は大資本を集めることが會社を組織する唯一の目的であるから常に箇人よりは大規模の生產を爲すことが出來るのであります。

大規模の生產を爲すときは如何なる利益があるかと謂ふに、第一最新最良の機械を自由に應用し得ることである。最新最良の機械を充分に使用するときは短い時間に精巧なる生產物を澤山に送り出すことが出來る。隨つて善良な物品を低廉に供給することが出來る。第二は分業を充分に爲すことが出來ることである。會社營業で大きい仕掛で企業を營むときには必ず澤山の人を使用する。そこでこの人々を各自其獨得の技能を振ふことの出來

る操業に就かしめ專らそれのみに從事せしむることが出來る、かくの如く分業を充分に行ふ時には勞働者の生產力は大に增加する。何となれど何人と雖も自分に不得手なる操業に從事するより得意の仕事に從事する方が其生產力の大なることは勿論であるし且つ專ら一の仕事にのみ從事して居るときは益〻其仕事に熟練するから他の仕事に移つる必要がないから其時間を省くをも出來るからである。この二つは全く大規模生產の場合に於て始めて出來ることであつて小規模では到底なし得られぬことである。かくの如く最新最良の機械を充分に應用して以て資本の產出力を增大し又一方には分業を充分に行つて勞働者の產出力を增すときは自然に低廉にして精良なる物品を造ることになる。この事は一般公衆に取つて利益であるのみでない。營業者に取つても利益である。何故に營業者に利益であるかと謂ふに低廉であつて且つ精良なる物品は何人でも之を買はんと欲するものである故に華客は自然とこゝに集まるからである。次に會社營業の箇人營業に勝る點は信用の點であるこれも矢張一概には謂はれない事であつて箇人であつても却つて會社よりも信用の厚いこともないではないが併し先づ大抵の場合には會社は多くの人が集まつて資本を持奇つて組織する法人であるから其營業振は箇人よりも一層明瞭に一般公衆に知れるものであるから自然確實である。それに資本も多いから一般公衆の信用を得ることが箇人營業よりは一層勝さつて居ると謂ふことが出來るのである。これ等は會社營業が箇人營業に比較して企業上に於て勝る點の最も著大なるものであります。一層精しく述べるときは猶は澤山あるがそれまでは述べる必要もなからんと思ひますから略すことにします。

無盡藏

根岸里人

本邦に於ける陶器の種類は極めて多いが、今其主要なるものを擧ぐれば

瀨戶燒（尾張）　東山燒（播磨）
志野燒（同上）　太田燒（武藏）
織部燒（同上）　備前燒（備前）
元燒燒（同上）　信樂燒（近江）
瀨戶助燒（同上）　伊賀燒（伊賀）
丸郎燒（同上）　丹波燒（丹波）
犬山燒（同上）　朝日燒（山城）
薩摩燒（薩摩）　萩燒（長門）
淡路燒（淡路）　高取燒（筑前）
八代燒（肥後）　松本燒（長門）
相馬燒（磐城）　出雲燒（出雲）
紀州燒（紀伊）　姥志名燒（同上）
九谷燒（加賀）　赤膚燒（大和）
萬古燒（東京）　淺燒（和泉）
肥前燒（肥前）　柳川燒（筑後）
樂燒（京都等）　今戶燒（東京）
大樋燒（加賀）　西京燒（京都）
壹樂燒（尾張）　永樂燒（同上）
伏見燒（山城）　尾戶燒（土佐）
壹湖燒（長門）

實業問答

以上列擧したものについて見れば、東京を中心として之れを東西に分つて、東方は殆んど製陶地に於て皆無といつてもよい、唯僅に磐城に相馬燒といつて馬を描きてあるもののみで、實に微々たるものである。けれども四部諸國、殊に西方に行くに從つて、その製陶地の頗る多きを見るは、實に異觀と云つても宜い位である、これといふも、全く我邦の製陶術は、元來は支那より朝鮮、朝鮮より本邦へ傳はり、則ち西方は朝鮮に近きを以て、かゝる現象を呈したことを明にしてゐるのである。殊に豐公の朝鮮征伐は、我邦製陶事業に大進步大開發を與へたもので、即ち征討當時に從軍した諸侯は、多くは西方特に九州の大名であつたので、是等の諸侯が凱旋する時、彼の國の製陶に巧みなるものを從へて來て、各々其の封土について、製陶の業を起さしめたのである〔即ち島津侯は薩摩に薩摩燒を造らしめ、加藤侯は肥後に八代燒を製せしめたが如く各侯其領地に於て、此の業を奬勵したのである。然るに東國の諸侯はこの征討の軍に從ふたものも少なかつたので、自然に東國には製陶の業起らないのも强ち不思議なことでもないのである。さてそれはおいて、以上列擧した種類の中で、其有名なるもの二つ三つを記して、其一斑を知らしめうと思ふ。

▲肥前燒　肥前の國中には數ケ所の竈がある。即ち唐津、有田、大河內、三河、白石、志田、小田志、吉田、松ケ谷、及び長崎の彼山等の竈であつて、其中有田の分竈の泉山山麓にあるもの數ケ所ある、而して唐津の竈は最も古いものである。此の唐津の陶繼

は肥前の國松浦郡唐津港の山の麓にあつて、その起源は、遠く人皇三十六代孝徳天皇三十七代齊明天皇の朝に創始されたので、即ち我國の陶器業の始祖といつてもよい。そして、此時分に出來た製品を、古唐津と唱へて、考古家の特に珍重する所のものである。其後時代を經るに從ひ、則けて徳川時代に至つて、瓦工多く、點茶器等には、隨分精巧なるものを作り出したが、後は只その舊套を脫せざる故であらうか、現今は衰頽に歸したのである。

けれども、有田窯は非常に優勢なもので、我邦製陶の一大鼻祖ともいふべき伊勢の人五郎太夫といふのが、支那に往つて製陶術を習つて來た。そして、此人が前達の如く磁器の法を傳へて、諸々各所に築き、瓦土を發見して、青華磁器、即ち所謂染付を創製したのである。諸君が日常見らるゝ所の藍を以て繪畫を描いたのは、即ち此の時代に始まつたもので、現今絆端の作品といつたら、それは非常に珍品さるゝもので、即ち五郎太夫の作つたものゝことである。かくてそれより種々の進歩發達を來たして、今日も益々盛んに斯業に從事してゐるのである。

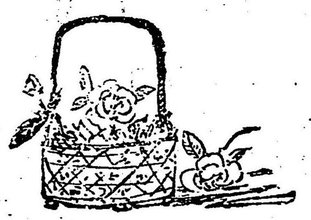
さて又伊萬里の住人にて、東島德右衛門といへる人が、曾て長崎來泊の支那人につきて、彩畫製色の法を習ひ、多年の經驗によつて種々の着色及び金色銀色泥を有田磁器に焼き付くることを發明し、長崎に往きて清商に賣つた。これ即ち我邦の陶器輸出の始めである。所謂伊萬里焼の錦手とはこれである。

▲瀬戸焼　瀬戸窯は尾州春日井郡瀬戸村にある、この始祖は瀬戸の住人加藤四郎左衛門といふ人で、後堀河天皇の貞應二年（今より六百八十一年前）に宋に渡りて、製陶の術を學び、後歸朝して、大に製陶の業に從事せしも、瓦土を得ずして、その意を遂せざりしが、後瀬戸村に於て始めて瓦土を發見して製出した。この時代のものは唐物、古瀬戸など、唱へて珍重さるゝものである。その後、豊臣時代に至りて、いよ〳〵隆盛の域に達し居りしが、初代より以下藤四郎と稱するものは、頗る貴重されてゐる、其後いよ〳〵精巧を極め、益々美妙なものも製出し、實に滔々として竭きず、陶工には半助、柳吉などといふのがなか〳〵有名である。其他尾張には處々に窯があつて、各處爭ふて意匠を凝らしてゐる製出額も亦非常に多いのである。

▲西京焼　正保慶安の比に、播磨の陶工藤原藤政といふ人があつた。この人西京の御室に住して陶窯を開き、洛東粟田口其他の土を用ゐて製陶を始めましたが、頗る精瓦なものである。即ち仁清と和子のは此人のことで、今古の作品を貴重するとは、實に非常なものである。又暗流で作つたものは、蠹工尾形光琳の弟で、乾山深省といふ人の製出したものも亦珍重されてゐる。それよりして、粟田口の末葉に至りて、瓦工續々輩出して、製品も亦種々變化し、極めて多趣多彩なるものも出來て、京焼の名、盛々として高くなつた。陶工の中でも和氣道八、幹山傳七、亀屋文平、清水七兵衛、清水六兵衛、清風與兵衛など何れも有名であつて、少しく陶器を好む人の知つてゐる所である。

▲九谷焼　時寛永年加賀の國大聖寺の城主前田利治、其臣田村權左衛門に命じて窯を江沼郡九谷村に開かしめた、が、その陶質が如何にも瀬戸焼に似て居つた。その時代に出來た茶壺水指などは擧に點茶家の間に、今尚ほ藏せられて、珍重されてゐる。で、利治の男利明といふのが、これも亦父の遺志を繼き、萬治年間に家臣後藤才次郎といへる人を肥前の有田に遣し、（或は對馬な）磁器彩畫の製法を學ばしめ、歸國の後、九谷村に於て之に製陶せしめた。此時丁度京都で有名な畫工久隅守景といふ者が加賀へ來て居たので、之に畫を描かした。これは即ち守景下畫といつて、世人の珍重する所である。是より後其業大に進歩し盛に製出した。其質白土に彩釉を施し。一見支那交趾或は有田に似て居つたものがあつた。錦様と稱するものは最も佳良なもので、到底他國の陶器の及ばぬもので、これを通常古九谷といつてゐるが、やがて斯業が頓に衰へ、この後藤才次郎の九谷焼は殆と絶へて了つたのである。

其後文化七年に國人、吉田屋傳右衛門といふ人が、九谷村に斯業を再興し、青緑の彩畫を描して、交趾に模造した。後同く七年に、同郡山代村に九谷の土石を運搬してこれを製した、俗に吉田屋窯といふのはこれである。又同國人陶畫工飯田屋八郎右衛門といふ人、支那の陶畫譜を得て發明する所があつた、即ちそれは從前の青色釉を一變して赤色釉としたのである。其技絶妙、稱して八郎赤金襴といつて、赤地に金泥を附着したものがある。其發該芸



辛八大藏落七といふ人が相謀りて、大に其業に改良を施したといふことである。

其他薩摩焼、楽家の好む信樂焼等についてざつと述べたいと思ふけれども、餘り長くなるから略する事とした。（「陶器の話」にはり）

世界日記

第一期第十五號の世界日記より つづく

露國キシネッフの排猶太人騒、僧侶に導かれて同地の猶太人の居宅を襲ひ、家屋を破壊し、財貨を掠奪し、婦女を辱しめ、小兒を斃殺し、抵抗する者を虐殺してあらゆる亂暴狼藉を逞うす。此の暴行三日に亘り、猶太人の居宅の破壊せられしもの七百戸、商店六百戸。家具財産を失ひて路頭に迷ふに至りし者一萬人、虐殺されし者四十五人、重傷を負ひし者八十餘人、輕傷を負ひし者五百餘人、生死不明の者二百餘人に及べり。露人は此の實行の原因を辨解して、猶太人が宗教上の犧牲に供する爲め基督教徒の小兒を捕へるが爲めなりといへど、是れ全く虚構にして、實は暴徒は猶太人を嫉ふ餘り久しき以前より之れを企て當局者も之れを認めながら默許したるなりと云ふ。

内藤恥叟氏

▲明治三十六年四月十九日　それより在露國の猶太人は皆其の途に安んぜずして人心恟々たり。事はやがて文明諸邦の問題となり、米國先づ之れに關して露國政府に注意したれど、露國は唯だキシネッフの 知事を免じたる外殆んと何等の施す所なしと云ふ。

▲四月二十四日　發のロイテル電報によればサハラ沙漠の蟹民は佛國に對して開戰を宣言しクライデルに在る佛軍はサハラに出發を命ぜられりたりと云ふ。

▲四月二十九日　北海道小樽及び秋田縣横手町大火の惨狀天聽に達し、横手町へ千圓小樽へ八百圓の救恤金を下賜せらる。

▲四月三十日　大坂博覽會見物の爲めに我が國に來遊せし蒙古王喀喇沁（カラチン）王の一行横濱を解纜して歸國の途に就く△此の頃露國の清國に對する態度、（滿州問題）に不穩なるものあり、列國大いに警戒す。

▲五月一日　去月末英國皇帝は羅馬法王を訪問せられしが此の頃獨逸皇帝亦羅馬法王を訪はれたり。

▲五月八日　第十八回帝國議會召集せらる。

▲五月十一日　天皇皇后兩陛下　京坂より還幸啓あらせらる。

▲五月二十日　さきに西藏を探險せし僧侶河口慧海氏歸朝の途に在りしが、此の日神戸に著せり。慧海は泉洲堺の人。

▲五月二十二日　石阪周造氏逝く。享年七十三。日本石油業の創始者にして石油の二字は實に此の人の命名にかゝると云ふ。△第一高等學校生徒藤村操日光山華嚴瀑布に投じて死す。年十八。哲學研究の結果宇宙人生の意義を解し得ざるに絶望してなりと云ふ。嘲る者、憫れむ者。同情を寄する者、其の因緣の解釋に懸命なる者交〻出づ。爾來七月下旬に至る迄之れに擬して同じき瀑布に投して自殺を遂ぐる者十幾人。

▲五月二十三日　檢校山登萬和氏逝く。享年五十一。山田派琴曲の名家。△先きに我が國に來遊されし清國の載振殿下及び鎭遠寡族ゲオルグ親王殿下東京 新橋を發して歐洲の途に就かるる。

▲五月三十一日　北海道小樽拓殖銀行頭取曾根靜夫氏逝く。千葉縣の人。

▲六月一日　東京日比谷公園は開園式を擧行し、一般公衆の縱覽を許す。△此の日發のロイテル電報によれば、西印度マルチニーク島のペリー山は又々噴火したり。燒死者少なくとも二百餘人あるべしと云ふ。△又此の日發の電報によれば、此の頃米國の諸州に大洪水あり、爲めに家を失へる者二萬人に及べりと云ふ。

露國陸相クロパトキン氏

▲六月五日　貴族院に於いて第十八議會閉院式を行ふ。△勅旨岡山藩主侯爵池田章政氏逝く。享年六十八。

▲六月六日　發のロイテル電報によれば此の頃フイリッピンに大暴風あり、被害少なからざりきと云ふ。

▲六月七日　内藤恥叟氏逝く。享年七十七。水戸藩の學者にして德川時代の歷史に通じ、極端なる尊皇攘夷論者の一人なりき。著書には『安政紀事』、『紅戸文學志略』、『德川十五代史』、『德

川制度」、『徳川施政大意』、『徳川氏貨幣制度』、『碧海叢話』等あり。

▲六月十日　露國陸軍大臣クロパトキン氏陸軍中將ソルコルフ氏等九名の隨行員を從へて我が國に來遊す。是れより對露の問題に關して物議朝野に沸騰す。

▲六月十二日　發のロイテル電報によればセルビア王アレキサンダー一世及び王妃は宮中に於いて弑せられたり。而して軍隊は直ちに競覩者カラゲオルギツチを國王と宣言せり。セルビアは土耳古の北向牙利の南に在り、ブルガリア及びルーマニアと境を接し、土、墺、露三國の權力消長に重大なる關係ある國なり。今度の革命は露國の敎唆にゝれるが如しと云ふ。

▲六月十四日　露國陸相クロパトキン氏來朝に就き青山練兵場に於いて特に臨時觀兵式を行ふ。

▲六月二十五日　露國陸相は其の後京都神戸間に滯在中なりしが、此の日露艦に歸りて歸國の途に就けり。

四國艦隊採險者

▲七月三日　我が國に來遊中の獨逸皇族ルプレヒト殿下横濱を解纜し米國に向かはる。

▲七月十一日　京都大學敎授醫學博士坪井次郎氏逝く。

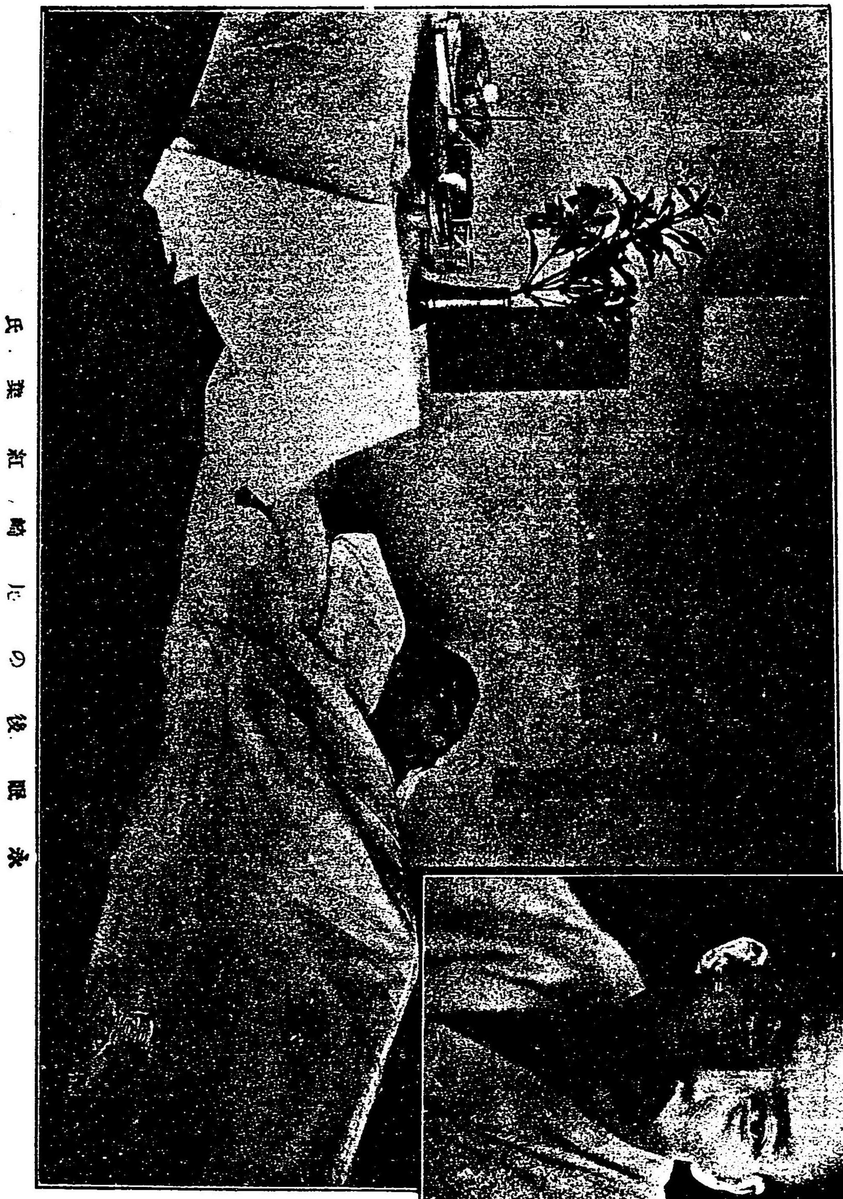
▲七月十二日　伊藤博文氏樞密院議長に任ぜられ、山縣有朋氏松方正義氏樞密顧問官に任ぜらる。

▲七月十四日　政友會總裁伊藤博文氏樞密院に入りたるを以て政友會は西園寺公望氏を總裁に推したり。

▲七月十五日　發のロイテル電報によれば、此の度英國皇帝愛蘭に來遊せらるゝにつき、愛蘭のダブリン公會は英皇歡迎の事に關し四時間に亘る烈しき討議を爲したるが、遂に多數を以て歡迎の辭を呈せざることに決せりと云ふ。

▲七月二十日　羅馬法王レオ十三世逝く。享年九十二。二百五十七代の羅馬法王にして在位二十五年に亙りき。

▲八月一日　大阪博覽會閉會式を擧行す。



（軍艦金剛出雲巡洋艦）

（巡洋艦浪速出雲艦）

川創造と、ニ
鐘川臨政大意、ニ徳川成良精制度意、教海關關意あり。

▲八月三日　我が國に來海中の獨逸皇族ルアンヒト殿下

▲六月十日　露國陸軍大臣クロパトキン氏、非次部氏逝く。

▲六月十一日　露國陸軍中將ソルコ

ルフ氏淳九名の國行月を從へて我が國に來遊す。是れより朝野の歡迎

▲七月二日　伊藤博文氏樞密院議長に任ぜらる。

▲七月十三日　京都大學教授法學博士岸本辰雄氏逝く。

▲七月十四日　朗氏松五郎氏樞密顧問官に任ぜらる。

▲七月十五日　裁判所構成法實施

▲七月二十日　羅馬法王レオ十三世逝く。享年九十二

▲七月二十一日　羅馬法王ピオ十世の戴冠式を擧行す。

▲八月二十五日　露國陸相

露國陸相は其の後京都神戸間に滯在中

▲八月十四日　露國陸相

露國陸相は清國の軍艦に於いて特に謁見式を行ふ。

クロパトキン兵衛に就き青山練兵場に於いて特に謁見式を行ふ。

▲八月二十五日　露國陸相

露國陸相は其の後京都に赴き、神戸に於いて露國の途に赴けり。

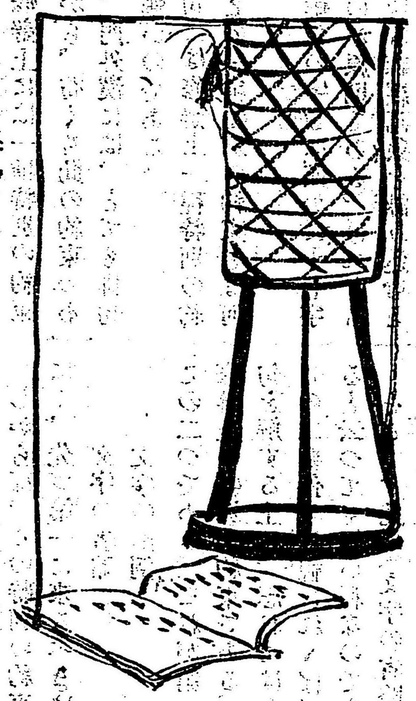
花ひらき、此の日發艦に就き

▲六月十一日　ルアン、サルバドル、ニカラグア、ホンデュラス、ペルー、ベネズエラ、ボリビア、チリ、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、ブラジル、メキシコ、ハワイ、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、オーストリア、ハンガリー、ベルギー、オランダ、スペイン、ポルトガル、スイス、デンマーク、スエーデン、ノルウェー、ルーマニア、セルビア、ブルガリア、ギリシア、トルコ、シャム、清國、朝鮮の國王、王妃、王太子、王太后、王族、大臣、公使、領事、軍艦、軍隊、國旗、國歌、國花、國鳥、國獸、國體、政體、國會、憲法、國債、貨幣、國民、人口、宗教、學校、新聞、雜誌、鐵道、電信、電話、郵便、港灣、運河、都會、市街、人情、風俗、氣候、風土、地勢、山岳、河海、湖沼、動物、植物、鑛物、農業、工業、商業、貿易、陸軍、海軍、陸軍大臣、海軍大臣、外務大臣、內務大臣、大藏大臣、文部大臣、農商務大臣、逓信大臣、司法大臣、內閣總理大臣、樞密院議長、樞密院顧問官、貴族院議員、衆議院議員、府縣知事、府縣會議員、市長、市會議員、區長、區會議員、町長、町會議員、村長、村會議員、警視總監、警視廳、警部長、警部、巡査、憲兵、憲兵隊、裁判所、檢事、辯護士、代言人、代言人組合、監獄、囚徒、罪人、死刑、懲役、罰金、科料、拘留、重罪、輕罪、違警罪、刑法、治罪法、民法、商法、訴訟、裁判、判決、上告、控訴、公判、豫審、證人、證據、辯論、辯護、檢事局、警察、探偵、密偵、巡査、憲兵、憲兵隊

MISSING

俳句の價値

森 おつか



面白い俳句――修辭上一種の約束――十七字詩と三十一字詩――約束とは何ぞ――文字の省略――その一例――文字の顚倒――その一例

「俳句の存在が、既に俳句の價値をある」と、このように說く人がある。成るほど、それは一理であるには相違ない。何故となれば、價値のないものが、そのように長い命脈を保つて居るべき筈が無いから。

この意味での「俳句の價値」は、おほよそ一面先づ何人にも解るといふものである、けれども、俳句の眞の價値を解する――即ち充分に或る俳句の意味を解し、それから其の眞價を標定するまでの經路は、仲々容易なことでは無い。

或る人曰はく「俳句を作るの要は、面白い句を作るに在る」と。成る程、それに相違ない。が、その面白いといふことは容易に解ることでない。初心の人々には、總べての句がつまらなくも感ぜられるかも知れぬ。何故なれば、その人の胸

中、俳句の意味と、その價値を解すべき、一定の尺度を保つて居ないから、云ひ換へれば、かゝる初心者は、未だ俳句の修辭上には一種特別の約束のあることを知らないから、苟くも此の約束のあることを知らないから、門外漢には、とても俳句の解かり得よう道理が無いのである。

扨て、このように俳句には修辭上一種特別の約束があると云つたが、この一種特別の約束とは何であらうか。

諸子御存知の通り、俳句の字數は僅かに十七字である。十七字であるのが原則である。けれども十七字のうちに、あらゆる森羅萬象を詠み込ひとは仲々容易なことではない。三十一字の歌ですらも自分の思ふ通りのことを云ひ著はすのは仲々容易でなく、字數の不足を感ずる場合は屢々ある。まして、三十一字の、先づ半分しか無い俳句であるから、この十七字詩を構成する上に、少し位の無理は許されねばならぬ。それを許されば、殆んど十七字詩は成立たぬと云つても好い。この無理が、即ち修辭上特別の約束を設けられた所以である。

しからば、この特別の約束とは何であるか。曰はく、先づ第一に來るべきは

文字の省略

文字の顚倒

この二つである。これが第一に來るべき、俳句の修辭上の特別の約束である。しかして、これが俳句を解する上に、忘れてはならぬ二要件である。この二要件を無視されゝば、俳句の價値は零となると云つても好い程なのである。

そこで、此の『文字の省略』とは、何のようなことであるか。例へば

朝霧や書に書く夢の人通　　蕪村

といふ句がある。この句の如き、鳥渡解釋を施して見れば

『朝霧が、そこら一面にこめられて居る。その朝霧の中を、人が往來して居る。けれども一面

に濃く籠めし朝霧の中のことであるから、その人影が、まことにおぼろげならでは見えぬのである。そのおぼろげなる樣は、ちようど好く書にある夢の中の人のようである。』

と、このように複雜して居る。かく複雜して居る有樣を十七字に詠んで見ようとするのであるから不知このように省略されて來るのである。

夕立や筆も乾かず一千言　　蕪村

世やうつりかはらの院の蚊遣哉　　召波

振り上げた我手眺めつ秋の蠅　　桃喬

物程がれになりけり雪の暉　　涼菟

以上は、いづれも、この文字の省略の例である。これ等を詠み味はゝれたならば、諸子も恐らく思ひ半ばに過ぐることであらうと思はれるから、こゝには說明せぬ。

それから次ぎは『文字の顚倒』された俳句のことである。例へば

吹かれけり水をはなれて草の月　　蘭更

と、そういふ句がある。これは鳥渡は恐らく分かり難くからう。それは其の筈である。文字が顚倒されて居るから。

何ういふ樣に顚倒されて居るかを明瞭にする爲めには、この句を說明して置かねばならぬ。

『河でも海でも宜しい、とにも角にも、月が水上へさし上つて、茫々たる草原を照した。すると風は草原に吹き渡つて、さながら月まで風に吹かるゝかと思はるゝようである。』

さうと說明すれば、先づこのようである。ところで俳句に在つて省略さるゝ文字はと云へば、八品詞のうちで

てには　　副詞　　動詞

この三つである、と、この邊にして多忙なる讀者は今回は御免蒙る。

それから次ぎは『文字の顚倒』された俳句のことである。例へば

吹かれけり水をはなれて草の月　　蘭更

旅行の友

函嶺紀行

小川直熙

明治廿六年六月廿日、早稲田大學史學科三年生、横山石川兩先生の指導の下に、三日の豫定を以て、箱根より熱海にかけて修學旅行を擧行す、左に掲ぐるは其の日記なり。

六月廿日。

梅雨と云へば氣象學上面白き現象なれど、實際降られては、あまり面白きものにもあらず。されば、朝來の曇天に氣は痛めども、神ならぬ身のせんかたなく、空しく、怨を三等列車に載せて、午前八時三十分と云ふに、新橋を發す。品川に三人の同行を併せて、一行凡て十三名、談は多岐に渡りて、哲學、文學、科學の高きより、市井日常の雜談に移り、甲唱へ乙和して又天候の如何を顧みる暇なかりしが、神奈川停車場を過ぐる頃より、

形勢甚だ宜しからず、しかも、一行の氣焰は愈〻揚り石川先生が、なかば体を車窓より出して、頻に赤土（ローム）粘土（クレー）砂岩（サンドストーン）の狀勢を說けば、A生は私かにバロメートルをひねくりて土地の高低を觀測す。戸塚大船を戲笑論難の間に過ぎ行けば、藤澤の砂丘も徒に看過でして、茅ヶ崎平塚を經、やがて大磯に着く。去年の大火に、全市大方は燒かれて、新築の假屋にふりそゝぐ雨の風情さたなくわはれなり。一分二分の停車に、思は徒に殘れども、めぐる車の容赦無く、午前十一時九分終に國府津驛に達し、こゝに汽車を降る。此地は、古へ名だゝる國府の津（港）なれど、今はわづか百噸內外の小蒸汽に名殘を留めて、わりし昔の繁榮を忍ぶに由無し。停車場前の茶亭に憩ふこと數分にして、湯本行の電車に乘る。海岸を左に見て進めば、やがて津浪わりし跡に出づ。右の方遠く丘陵に至るまで、凡て災にかゝれるなりとぞ。田園荒蕪の地に馬を追ふ農夫の

業、やれ果てたる茅屋、根もあらはなる磯馴松を目にすれば、そゝろに、大磯の火災の跡と思ひ合はされて、あはれはいやまさり、海嘯と津浪の相違をあげつらふ一行の談話に口を交へん勇氣も出でず。

さるほどに、雨は愈〻ふりまさりて、眼を遮るの景物、凡て沈靜の色を帶び、車輪轆々、轡を長く殘してはゆるが如く、警鈴時に之に和して、一層のさびしさを添ゆ。なかば密雲に鎖されたる函嶺を前に望みて、小田原の町を過ぎ行けば、地は漸く登りて、轉々湯本に近づき、やがて早川の岸に達す。激流急湍、磊砢たる安山岩に觸れて白雪を噴く所、早川の名に背かず。左岸に石垣山あり甚だ、不恰好の山なれども、全山、堅石熔岩より成りて箱根外輪山の一なり。登ること十餘町なれば、天正年中、秀吉が松田秀憲の內通に應じ、一夜にして此山頂に築き、一擧、小田原を拔けりと云ふ其の城址に達し、直ちに小田原城を瞰下し得べし。電車は猶進みて湯本の停車場に着けば、一行暫く茶亭に憩いて晝飯をしたゝめ、乏より徒歩雨を衝て程に上る。各〻雨具の出でたちして、先づ二三丁を離れたる石切場に到る。雜草をふみしだき、少しく丘を登れば、丈餘の岩層凡て凝灰岩より成りて、建築石材を截り出せる跡あり。頭を擡ぐれば、砂礫の層其の上にありて、洪積期時代の河底を示し火山噴出物の層を截く、嗚呼、無情の岩石猶能く潺湲たる河川の趣、火山裂の偉觀を說く。無情に似たる科學の中、亦如何ぞ、吟咏に値する詩材に乏しからんや。

こゝを出でゝ早川を渡り、箱根古道を進むこと一二丁にして早雲寺に至る。左甚五郎の作と唱ふるあやうげなる寺門には、韓人の筆にて金湯山と書ける扁額を掲ぐ。早雲庵宗瑞（氏）の開基にして、其子氏綱遺志によりて元此地にありたる眞閑寺を改めて、臨濟宗の寺を建立し早雲寺と名づけしとなり。然るに上杉謙信小田原亂入の時兵火にか

ハり、後、氏政再興して、堂塔の壯嚴は以前にも勝りしが、北條氏亡びてより大に衰頽を極め、久しく廢地となりしを、慶安年間、今の佛殿に改築したりと云ふ。しかも春風秋雨已に二百餘年を經て老松古杉、僅にありし昔の面影を止むるのみ、軒傾きては、修法の烟洩る月影に映じ、壁破れては、不斷讀經の聲泉石に咽ぶ。御堂の前を過ぎて道を右に取ること十數歩にして北條五代の墓に達す。石燈を踏むこと二十有餘、方三間計の地に石垣をめぐらし前面五基の墓と傍に一碑あり。時正に初夏、老柏亭々としてふりしきる雨に綠愈〻濃やかに、滴々色を含んで墓石にそゝぎ、四面木と云はず石と云はず、蒼苔深く鎖して、おのづから閑寂の趣を存し、幽韻かすかに心絃にふるゝを覺ゆ。思ふ昔、早雲、流寓漂泊の身を以て蹶然伊豆に興り、子孫五代、足柄箱根の險を擁して關八州に號令し、能く東方の重鎭たるを得しを、一朝猿面郎太兵を提げて、其功を拉し去りしも、偉業如何ぞ亡滅に歸せんや、古老尙は北條の盛時を說きて其惠澤の厚かりしを傳ふと云ふ。我れ此地に來りて山川に俯仰し、遠く思を千戈交戰の跡に馳すれば、雨聲雨に和して、鯨聲叫喚の聲を宿し、惘惘として竟に今昔の感に堪へず。寺を出づれば前は湯坂に續く箱根の古道なり。長槍肥馬長くつゞきし大名の行列を思ひ、更に一杖一笠、かよわき女の身に、子を思ふやさしき親心より、墨染の衣を風に翻へし、やつれし顏に愁の雲を宿して、行く手を急ぐ阿佛尼の風情を偲べば、雨こそはなかなかに昔をしのぶよすがなりけれ。

湯本に歸り一行更に勢揃へして、直ちに芦の湯に到る行程に就けば、數丁にして塔の澤あり。谿谷深くして偉大なる水の浸蝕力を示し、早川の奔流激して玉を吐き碎けて雪を生ずる樣、奇觀名狀す可からず。殊に翠綠したゝるが如き樹林を縫ふて老鶯時に嬌音を弄するに至りては、初夏の風物何物も加ふるなきを覺ゆ。塔の澤を過ぎ少頃にして常磐の瀧に到る。素練高く常磐木の間を綴り、水量多からずと雖ども、遠く之を望めば、幽邃の景又捨てがたきものあり。之より進むこと里餘、山を繞り谷を廻り、峰巒深密、或は兀立突出の狀或は、險奇怪絶の趣送迎に暇なく、漸くにして宮の下に到れば、此地、外人の遊ぶもの多きが故に旅舘多くは輪奐の美を極め、湯本細工賣る家毎に、ローマ字にて綴れる看板を揭げたるなど、所柄とておかし。

宮の下を過きて數丁を來りしと思ふ頃、一茶亭に憩ひ、老婆のもてなしに澁茶一杯をすゝり、試みに上衣を脫すれば、雨は襯衣をも潤はすばかりに、惡寒全身に渡りて、不快言ふ可らず、しかも一行固より覺悟の上なれば、すこしもわるびれず愈々勇を皷して前途を急ぐ。二三丁にして小さき流あり、硅化ありと云へば降りて之を拾ふ。蓋し水流に硅質の成分を含めるが故に、硅質沈澱して之を生ずるなり。尙行くこと十町あまりにして、小涌谷に行く道に出でしも、雨烈しく道亦險惡なれば到底之を見るに由なく、終に憂を割きつ。尙篠つく雨を冒し矮草の間をふみ分けて登り行けば烈風、雨を帶びて面を打ち、呼吸漸く急がはじく足は、屢〻泥濘に奪はれんとして、危きこと限なかりしも、とかうして午後四時頃終に芦の湯に着きぬ紀の國屋と云ふに投ず。この地の温泉は硫黃質にして、ことごとしき功能書も、病なき身にありがたくはなけれど只勞を慰せんとて浴す。

浴を終りて檻角に倚れば山氣襟端に迫りて快極まりなし。高さ八百五十米突、氣壓六七二粍

箱根火山彙は、地質時代に謂ふ所の第三期の末、年數で云へば二三十万年も以前に活動を始めたので、此時代の海陸の形勢を察するに、伊豆半島は尙全く構成せられず、關東平原の如きは、筑波山の絶頂が遠海の一孤島として頭を出して居たに過ぎない。偖箱根火山は全山悉くアッグロメレート(集塊岩)と言つて火山噴出物が灰

や熔岩と一所になつて固まつた岩石より成つて居る。そして度々熔岩を流出した故、兩子山熔岩とか堅石熔岩とか色々の名はあるが、要するに安山岩の名を以て一括することが出來る。明神明星金時三國鞍掛要害の諸山、環狀をなして相連なつて居るが、之を外輪山と稱し、箱根火山大破裂以前の火口壁なのである。箱根火山は屢活動したもので、外輪山の中に神山兩子山の如き火山を生じ更に其後駒ケ岳を噴起し、神山の一部を破つて大涌谷なる爆裂火口を生じ、又芦の湖の一部を埋めて仙石ケ原を生じたのだ。芦の湖よりは早川を出し、更に須雲川蛇骨川の如き支流を併せ、外輪山の一部を破つて海に注ぐが凡て、斯の如く火口原を經外輪山の一部を破つて出づる谷を火口瀨と呼ぶのだ。

六月廿一日。

朝靄晴に乘じて消し、晩雲雨を迎へて合するは深山の常なれば、朝に夕を謀りがたきも、起き出づれば好晴、又昨雨の面影をも止めず、所々啼鳥を聞きて、午前八時宿を立ち出づ。仰ぎ見る山又山、綠深く染めなして、青嵐徐ろに征衣を拂へばわくまで、水の如きオゾーン瓦斯を吸ひて、勇氣舊に倍し、わらじ踏みしめて程に上る。羊腸迂廻せる坂道を越え、左に駒ケ岳を望み右に神山を仰ぎて、進み行くこと七八丁、湯の花澤に至る。此地亦芦の湯とおなじく硫黄泉の出づる所なり。數多の水槽を設けて溪流を受け、藁を容れて湯の花(硫黄)を沈澱せしむ。水は微溫を帶びて硫化水素の奇臭微かに鼻を衝く。こゝに始めて一行の寫眞を撮影し、小憩の後歩を神山に進むれば、火口原の一部を過ぎて勾配漸く急に、雜草生ひ茂る間に一徑蜒蜒として山頂に向ふ。登ること十余町、おもむろに來し方を顧みれば、近く小涌谷宮の下を瞰下し、遠く笹べり取れるが如き小田原の海岸を望み、朝靄模糊たる相摸の灘に、漕ぎ入る小舟の實に見飽かぬ景色なり。更に歩を移すに、行く手

の道は胸つく計にて、日は漸く昇り、暑熱亦漸く加はらんとすれば、一行汗ふきあへず相呼應して魚貫攀躋す。やがて、かんば、さるた、ぶななどの矮さが生ひ茂れる間をわけ行けば、木毎に苦むしてあたり薄暗く、土打ちしめりて踏む足もと定まらず。兎角して山頂に到れば、光景忽ち前に開け、芙蓉屹として天外に聳へ、雲裏山腰を繞りて愛鷹を掩ふ。正に之箱格連山の第一峰にして、駒ケ岳兩子の如きも亦遂に高さを競ふべからざるなり。乃ちバロメートルを出して覘測すれば、氣壓六二八粍、高サ一四〇〇米突を示す。叅謀本部三角測量の基石に踞して四邊の風景を寫生すれば、連山は波濤の如く、右の方金時山より左乙女長尾の險に至るまで、逶迤として脚底に連なり、遠く後方を顧みれば、薄靄海面をこめて、雲烟杳渺の中、大島影の如くに横はり、初島は青螺疊の如き上にちりて、白波岸を嚙む樣明かに指點し得べく實朝が「箱根路をわがこえくれば伊豆の海や岸の小島に波のよる見ゆ」の歌も思ひ出されて、暫くはその雄大崇重なるに、嘆賞のことばも出でさりきされど行く手の道の尙遠ければ、かくてあるべきにあらず。即又今登りし道を降り、惰力の驅るまゝに馳突縱橫、道なき道をかけまわり、先登と殿後と相距る數丁に渡りて、一行の統一を失ひしが、一旦山麓に相集りて、更に案內者を先立てゝ谷間を下り強羅に向ふ。かくて強羅に着きしは十時半頃なりしが外國人三名已に先にありて眺望を恣にせしが、我等の到るに會ひてやがて山を降りぬ。此地背後の山を早雲地獄と稱し、常に瓦斯蒸騰すれども、奇雲恰かも山頂を呑み山腹を擁して又見る可からず。しかも前面、明星明神の二峰連亘して、宮城野の火口原、其脚底に續く所、風光他奇あるにあらざれども、亦勞を慰するにはあまりあれば、澁茶に喉をうるほしながら、共に山野の形勢を論評す。蓋し宮城野は、北條氏政が野戰の老手家康を防ぎて一敗地に塗れし古戰場なり。

矮草白露に晞び、野蟲夕陽に悲むも、已に數百の星霜を重ねて、山川風土幾變遷を經たれば、劒戟の音、鐘鼓の聲、鬼哭啾々の怨を聞くに由なきも、亦當年激戰の跡を思へば感慨止む能はざるものあり、猶時早けれども、午食をすまして大涌谷へと登り行くに、冠ヶ岳の裏手に出づれば、磊々たる大礫山腹に横はりて、恰も古城の廢址を見るが如し、蓋し水の浸蝕に會ふて堅き部分のみ殘り、其の頂を露出せるものなる可し、行くこと二十町餘にして始めて大涌谷に至れば、方十町あまりが間は、或は白く或は黄に、一望すべて硫黄と噴氣余土とを以て掩はれ、所々沸々として瓦斯を噴出し、一抱にもある可き岩石も一度杖を以て衝けば、忽ち解体するに、生平岩石を以て頑健なりと信せしことの一朝にして謬なるを悟りて面白き事に思ひぬ茲に慈狀分解、硫黄の結晶、噴氣余土の標本を採集し、一茅屋の冷水と茶とを供するものに憩ふて更に歩を進めて姥子に向ふ。かんば、さるなど

神山のと相似なる矮林の間を過ぎ行けば、偶外人の男は徒歩し女は椅子に坐し人夫の肩によりて登山するものに遭ひ、姥子温泉に至り更に二三丁にして湖尻に出づ。こゝにも多くの外人あり。舟より降りて皆大湧谷に向ふ。此地高さ凡七百二十米突。

渡し船の岸につなげるもの白帆を掲けて其の影を水に投ぜる様、一幅の好畫圖、水彩畫にして見ればしき程の景色なれば　森林を後景として寫眞一葉を撮影す。湖面平滑油の如く、實にも平和を代表する火口湖の面影を存し、爆聲轟々天日を焼き流煙空を衝きし太古の活動と思合はされて、湖光澤影更に幽邃なるを覺ゆ。石嘴氷心に突出し飛巖潭外に錯峙する所謂火口湖の特色を見ざるも氣象万千雨に宜しく最も晴に宜し。即ち月白く風清きの夕、舩を叩いて長嘯すれば、三國風波面を亘りて鬚髪を拂ひ、鯉魚潑剌として水上に躍る「若夫れ天晴れ雲無きの時、芙蓉八朶の雄姿、倒さまに

湖心に映し、山を見て湖を見ざるの奇景に至りては、壯麗又何物も加ふる無し。惜むらくは、此日午を過ぐる頃より、層雲累積して岳容を見ざるを驚師久しく待ちて先づ茲にあれば、即舟を艤して元箱根に向ふ。水深くして深藍色を帶び、沿岸の樹木直ちに水面を掩ひ、濃綠裝成りて奇景万狀、舟其の下を過ぐれば、舟中の人皆綠を帶びて快云ふ可からず。顧みれば仙石原低く連なりて、或は黒く或は白き牧馬、遠く蠢爾として野草に嬉戲するを見る可く、三國山は近く指呼の間に迫りて湖面に臨む。舟は已に湖心に進みて道を左に取れば、光景俄に開けて前に離宮を望み、櫓聲水拍と和して興竟に盡きず。而も天候漸く怪しく、雲疾く馳せて文庫山を包み、霧雲冥合塔ヶ島に下降し四邊、暗瞻として暮色亦之に加はれば、倉皇船を降り、草萊を排き老杉の下をくゞりて箱根權現に詣づ。社は元、高麗人の歸化せるもの、其祖先を祭る道教の社なりと云ふ。歴朝の崇敬極めて厚く、大に繁

二九

榮を極めしが、今や蒼苔徒に石階を封じて、又嘗昔を語るに由なし。考古癖のともがらは、狗實物など見んとひしめけど、雨漸くふりしきらんとすればそこそこに出で立つ。數丁を經たる頃、芦の湯より宿のもの、雨具持ち來りしかば各、裝して小徑を辿り行く。道に精進ヶ池、聲池あり。又曾我兄弟及び虎御前の墓あり、時恰も舊暦五月　細雨霢霂々として所謂虎の涙雨なるものなり。即ち「佛山虎を咏するの詩を微吟すれば「名妓於菟」の容姿歴々として眼前に浮ぶが如く、ローマンチックの感想轉た禁ずる能はず。詩に曰く、

霏々漠々滿天墜。云是名妓於菟淚。於菟曾在犬磯里。玉貌華顔技於李。」一夜奇緣呢十郎。傭向他人進杯觴。豈圖孤負鴛鴦枕。提劍去赴復讐場。」黄泉報父死何烈。翠閨棄妾恨何滅。富士山下獨躊躇。湧淚方行滴不絕。」淚能化花竟凋萎。淚能染竹有枯時。妾淚好作滿天雨。長灑富士山下祠。

箱根及熱海所近要圖

宿に着き浴を終りて後、同級會を開きしが、海拔八百米突の地に浴衣一枚の身を以て、膝を交へて歡語せしことなれば、感興大に湧きて盡くる所なかりしが、殊に横山先生が壯時の健脚、能く半日にして箱根八里の險を越せしことや、單身富士大井を遡りて地質を調査せし苦心談の如き、大に我等後進を啓發し裨益する所多かりき。

湖の成因は種々樣々あると云ふことのみは知り得るが、實際、某の湖は如何なる成因により生ぜしかと云ふ事に至ては、中々の難問題に屬するので、湖のことに就ては、湖沼學と稱する特別の科學があつて、諸般の研究を爲して居る位だが、先づ湖の成因を分ちて次の六種とするのが穩當だらうと思はるゝ。

第一。構造湖とか斷層湖とか稱し、地面の屈曲收縮斷層等により生ずるものがある。死海タイベリユース湖の如きは、其の好適例だ。

第二。水の溶解力により、地中に洞穴を生じて上部の岩石の重みで陷落し、其後に水の溜つて生ずるもので陷落湖と稱する。餘程、第一の者と紛れ易く、兩者を區分するは、非常に困難である。

第三。河水の浸蝕によりて凹所を生じ、河の位置を變したる後に殘さるゝものをいふので、利根川の近傍に多い。浸蝕湖の名を有するものはこだ。

第四。噴火の爲に、天然に堤防を生じ河水を防ぎ止めて湖水を生ずることがある。之を築堤湖と稱し、磐梯山の三湖や富士の河口湖の如きはこの好適例である。

第五。海岸の入江や河口などが、洲の爲に斷ち切られて生ずるもので遺跡湖と稱せらる。羽後の八郎潟、出雲の宍道湖、遠江の濱名湖の如きは、最も著るしい例だが、驚ろく可き事には琵琶湖も、古い遺跡湖であらうとの事で、有力なる地質學者は、數多の證跡によりて此說に左袒

して居るらしい。

第六。昔の噴火口の跡で火口湖と稱し、多くの舊新火山に見出さるゝ湖で、蘆の湖の如きは即ち之である。此種の湖の特色は、多く深山の中にあるので、風景に富み、又沼瓦斯（マッシュガス）が發生したり、じたじた濕つてマラリヤ熱の媒介も爲し兼ねぬと云ふ樣な、不健康の湖とは違つて、病を養ひ、氣を高潔にするには、最も恰當な湖である、殊に芦の湖の如きは、風景絶佳と云つても決して溢美ではない。

六月廿二日。

雨晴る。午前八時、宿を立ち出で、謬り傳はる多田滿仲の墓、精進ヶ池、薺ヶ池などの側を過ぎて、芦の湖畔に出つれば、山靄深く湖面を鎖して恰も其眠より覺めんとするもの〻如く、微風、鏡の如き水面を亘りて、おもむろに面を吹き、舊知に似たる此湖も亦我等と別るゝに惡びざるもの〻如し。箱根の前を進みて、箱根の古關に出づれば雜草離々として四面を封じ、石垣の跡は、流石に尚殘れども、一行十三人、難なく談笑の間に過ぎ行けば、其の昔、通行を難んぜし、所謂、お關所の面影、亦、偲ふに由なきを如何にせん。箱根宿を過ぎて、道を左に取れば十國峠（じっこく）なり。左、要害山を望みて鞍掛山を登ること十餘丁、絶頂に到れば、谿谷、放射狀をなして三島に向ひ、平地に似たる連山は、恰も、長揖し來るが如く、意氣高邁胸宇、俄かに恢宏するを覺ゆ、悲ふこと數分、更に勇を皷して降路に就けば、山霧急に襲い來りて咫尺を辨ぜず。相呼び相應へて小徑を辿るに、老鶯、嬌音を弄して勵ます如く、箱根草、裝を凝らして慰むる所あるが如し、偶々杜鵑一二聲、一望海の如き霧底に鳴けば、ほと〻ぎすと云ふもの、始めて耳にせし我れには、身にひしと答へて、尚一聲をと思へど甲斐なし。かくて、十一時半、湯河原（ゆがわら）に着き、激流に面し、巖嚴に踞して、晝飯を喫し、更に熱海に向へば、柿秩時正に酣に、老幼

男女相集まりて苗を挿し行く様、所變ればしなの變る、我が故郷のそれと思ひくらべて、趣味愈深きを覺えぬ。近く、伊豆の海を前に眺めて、二日が間山にありし身には、うれしさ限なく、足もおのづから早く運び、門川と云ふ所に着きて、少憩し人車鐵道のレールに沿ふて進み行くに、海岸の風景、殊に佳絶、巉巖突立の間を、波濤、文をなして泡沫を生ずる所、孤松、悄然として奇岩に倚る所、奇景、變幻の妙を極め、右側の絶壁は高く聳へて、著しく、片狀節理、岩脈等を呈露して地質を學ぶ我等には、こよなき避籍を與へらる思ひす。伊豆山に到る頃より、急雨俄に襲ひ來りて、雷鳴亦之に加はれば、暫く茶亭に憩ふ。窓に倚りて望めば、海面、晴瞻として凄絶を極め、夢よりも淡き大島は、秒毎に集まり來る暗雲に掩はれて終に其影を沒し、初島亦漸く消え去らんとするに漁船漁舟、雨の天地を縫ふて、行を急ぐが如く、階段を作りて海に至る水田には、雨を厭はざる傭

夫体を露はして、頻に塲を追ふ様忙はしげなり。暫く、晴れ間を待ちしも、何時果つべくも見えねば、終にこゝを出で立つ。此地は元、走湯ありしと言ひ傳ふれば、熱海と仝じく、ガイザありしは覺し。三面、亂山を繞らし、東方海に面して、今尚、海岸に温泉を湧出す。又、伊豆權現あり、古へ、箱根山と相並稱して、二所權現と云ひ鎌倉殿の崇敬極めて厚かりしと云ふ。伊豆山を出でゝ二十町許にして熱海に着き、富士屋に泊す。夕飯を終りて噴瀛館とて例のガイサーある所に行けば、恰かも噴出を始めし所にして、沸烟、四面をこめて近づきがたく、熱湯と蒸瀛と交々小噴出を爲すこと屢々にして、之に亞ぐに、轟鳴と熱湯とを以てし、更に其の勢を增すや、熱湯噴出すると共に直ちに蒸瀛に變じ、丈餘を距る石壁を衝き、四面に擴布して奇雲を描く様、凄じさ言はん方なく、噴出口に大石を置かざりせば、尚ほ其の偉觀測り難きものあらんと、今更ながら遺憾に思はれぬ。

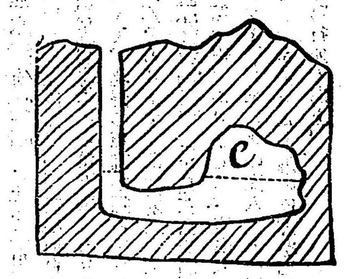
大噴出を爲すこと約十分、屢々之を繰り返して凡そ一時間半に及ぶと云ふ。

六月廿三日。

或者は直ちに三島に赴きて、歸郷の途に就き、多分は、午前八時の船にて國府津に到り、更に瀛車にて京に歸り、全く此行を終ゆ。

因に云ふ、熱海の富士屋と云ふは、此土地にても第一等の旅館なるが、客を遇すること、他にも勝りて厚く、茶代室代をも取らず、宿泊料も亦割合に廉にして、我等の滿足を覺えしこと、全く他に見ざる所なりき。

ガイサーとは、略ゝ時を計つて、蒸瀛や熱湯の柱を作つて噴出する、特別の構造を持つた、温泉を稱するのだが、其源因に就きて、マッケンジーと云ふ人は、圖の如きものが地中にあると想像して、此管中の湯が熱を受くる愈ゝ烈しきに至り、Cなる空所に、蒸瀛充滿して、其壓力を以て蒸騰するものだと説明したが、ブンゼンと云ふ人は、種々研究の結果、長い眞直な管が地中にあると想像し、偖次の如く説明した。



即、管中の湯は表面より底に至るほど、漸次階段の狀をなして、温度を增して居るが、噴出の前には、底の温度は已に沸騰點以上に及ぶも尚、上部の湯の壓力によりて沸騰することが出來ぬが、地底より熱湯益ゝ流出すると共に非常に温度を高めて、終に上部の水壓に打ち勝ちて澎張し、熱湯を空中に迸出し、更に蒸瀛に變じて奇觀を呈するのだ。かくて管中に湯を留めぬに至れば、更に湯の滿つるを待ちて後又蒸騰を始むる。と此様に説明して居る。マッケンジーの説をブンゼンのと比すれば、説明に

過ぎて、却て窮屈であるが、ブンゼンのは、マッケンジーの説くが如き捧造の場合に於ても亦應用が出來るのみならず、實際、ガイサーを見れば、其説明の自然でおつて如何にもそうかと肯かれる。

一体、ガイサーと云ふアイスランドの原語は英語のガッシャー、即ち噴出するものと云ふ程の意味である。アイスランドに最も多く此温泉を見る所より、終に此名を得たのだが、米國にも、隨分大きなのが二つ三つある。日本では熱海のと、陸前鬼頭村大字轟小字吹上と云ふ所にある。轟と云ひ吹上と云ふは、皆此温泉の狀態より名づけたのだらうが、殊に吹上と云ふのは、ガイサーの原意と似て甚だ面白い。六ッかしく間歇温泉などゝ言はずと、吹上温泉とでも言つたら、簡にして明、しかも原意に適ふと云ふ三拍子揃つた名を得可きものを、まだ此二個所の温泉の外に、北海道厚振國登別と云ふ所にもあるそうだが、尚研究が行き届いて居ないから詳しいことは云ふことが出來ぬ。（完）

新刊紹介

▲水滸傳物語（上下二册、高須梅溪氏編）これは彼の有名な支那の「水滸傳」の梗概を面白く、極く簡單に書き綴つたもので『通俗世界文學』の第五編であります。上下二册各百二十頁ばかりづゝで、北齋の原畫を縮めて寫眞版にしたものが、卷中の處々に挿んであります。（定價各金二十錢、神田裏神保町富山房）

▲沙翁物語（中島孤島氏編）これも『通俗世界文學』のうちの第六編でありまして、有名なシークスピアの戯曲のうち『ハムレット』と『ベニスの商人』との梗概を面白く書き綴つたもので、ジョン、キルパルト筆の原畫を寫眞版にして添へてあります。定價も發行所も同上。

會員葉書帖

▲▲質▲▲問

▲三伏の候、貴會いよ〳〵御隆盛大賀奉り候、陳者目下御募集中なる懸賞作文の義は、一人にて御添削を願ひ候作文と共に一時に二葉さし出し候ても差支へこれ無く候や御伺申上候早々（横濵門松理之助）△さしつかへこれなく候▲記者諸君に伺ひます、例の講語會を催される折、例の案内狀を持參すれば會員外（會員より興ふ）でも傍聽に行けますか、また人數は二人で宜しきか（神商生）△會員外でもよろしい、案内狀一枚あれば二人で傍聽出來るのです、尚は來る十月中旬講話會を開きます、今のところで出席を承諾された講師は、法學博士天野爲之、漸老名譽正、理學博士石川千代松、理學博士大幸勇吉の諸氏です、場所や詳しい日取りはいづれ次號で……▲（前略）迂生は常に通信教授にて修學致し居候へども、未だ完全なる好册子を得ず、就ては貴地の國語漢文の通信教授學會にて適當なるものを次號誌上にて御教授下され度候（福井縣遠萊谷生）△殘念ながら記者も未だ完全なるものを發見不致候▲早稻田大學講義錄に依つて政治、經濟を自修しようと思ふのですが、高等小學卒業程度の學力では不充分でしょうか（第一期會員某K生）△不充分です▲今圖小生漢和文典を求めんと欲しつゝあり何卒最も良きものをお教へ下され（兵庫田中孝二郎）△東京神田裏神保町三省堂で發行した「漢和大字典」が好からうと思ひます、定價はたしか三圓五十錢ほどだと思ひます▲現今邦文のものにて西洋史及び同歷史地圖の學生の爲めに好參考となるべきものは何人の著にて何といふ書物最もよろしきか、御教授を乞ふ（伊藤酒井宗太郎）△西洋史は文學博士坪井九馬三氏の著はされた西洋史教科書がよろしからん、また地圖は文學士高桑駒吉氏の著はされたのが好からん、共に大日本圖書株式會社の發行、詳しくは同社に就いて問はれたし▲日本歷史の詳しいのと日本地理の詳しいのが欲しいのですが、何が好いでしょう、但し雜字には假名が付かつて、容易に事柄を了解することの出來るもので、代價が三圓位ので宜しいのです（山形縣阿部）△坂本健一（文學士）氏の著はした日本歷史といふのがありまず、また近日農學士佐藤傳藏氏等の著はされた「日本地理」？　といふのが出る筈です、いづれも東京日本橋の博文館、但し只今代價と詳しい書名は分りかねます▲御講話中に英語あり、不學の僕には折々發音に苦しみますが、願くは其の發音を正確に知り應用に便ある書籍を示し給（越後大谷生）△最も良いのは一寸解りかねますが、東京日本橋の鐘美堂から出版された「英語六ケ月速成」なぞは先づ宜しからうと思ひます

▲▲▲▲▲▲

▲記者より會員へ▲久保田君、本田哲君、直木芳之助君、伊藤貞雄

君等諸君の質問は、それ〳〵講師の方へ廻はして置きました、いづれ廻答の價値あるものは諸講師から廻答があるか、若しくは廻答のあり次第本紙へ掲げらるゝことゝ思はれます、尚ほ本田哲君からお手紙でしたが、いづれ講師からも何とか挨拶があらうと思はれます。何卒あしからず▲秋田の伊藤君へも、また▲それから又島根縣の船田君の質問も既に講師の手許へさし出して置きました▲現今邦文にて倫理と論理とを精しく好くわかるように述べた本はありませんが(群馬久保田)△倫理と論理は早稻田大學出版部から出た波部龍聖氏譯「倫理學綱要」及び桑木博士譯「論理學綱要」が亟簡でよからうと思ひます、心理は島波見當たらず)

▲希　望▲

▲中等教育中英語で書いてある所がありますけれど、拙者は英語を知りませんから困ります、茂望、英語に讀み方と講義を付けて下さい(島根船田台年)△承知しました、勉めて御希望に添ふように致しましょう▲歷史講話も今少し平易に願いたいものです(會員)それがし△これも出來得る限り勉めましょう▲一、ボエニ戰爭も第二期第三號で完結ですから、何卒浮田先生のナポレオンの續稿を御掲載下さい、これは愚生のみの望みでもありますまいから二、島根君の提議に大賛成であります。それから坪内先生御全快次第修身講話を澤山願ひます神田OK生△添田氏には既に御願ひ申してあります。が、先生は目下非常の御多忙ですから、いづれ近日載することになりましょう。

▲會員より記者へ▲七月十日發行中等教育第一期第十七號に於いて圖らずも小生等「中學月記」十二ケ月悉皆送附者として、その名譽を表彰され、且つ其の勞を謝するとて「早稻田大學紀念錄」一部御惠み下さる由承り小生は唯だ「感謝」の二字を貴下の机上に呈するより外なく候、先は取り敢ず御挨拶まで(秋田宮三郎)▲とかく『中等教育』の發行が後れがちで困ります。記者閣下何卒、以來は成るべく後れぬように願ひたし(ZY生)

新刊紹介

▲學校生活(嘉悦孝子著)　世評判高かりし、『教育家庭小說』の第一編は、『學校生活』と題し今回公にせられたり。著者の教育主義が產みたる可憐の少女澄子を主人公とし、無邪氣に愉快なる學校生活を描きたるもの也。小說として見ればやゝ波瀾に乏しき缺點あるも、純倹の材、滿紙一點浮華の氣なきは、之を補うて餘りある可し。且つ其の文章の流麗にして流暢なるは稀に看る所也。余輩は著者が教育家として高き地位名望あるを知れるも、文伎の卓越斯くの如きものあるを知らざりし也。教育的小說と云へば、徒らに理屈に走りて無味乾燥なるを常とするに、興趣深きこと斯くの如きものを得たるは大に喜ばざるを得ず。我青年學生諸君は須らく一本を求めて可也。(價三十錢、神田錦町新聲社)

英文解釋の栞

喜安生

may.

May every blessing attend you !
(ありとあらゆる天福があなたに添ふやうにと祈ります)

此文章に於ける樣に may が主格の前にありてしかも其の終りには疑問符ではなく感歎符がある時は願望祈りを表はすもので I wish every blessing may attend you ! の意味である。

May heaven protect you !
(天があなたを守りて下さる樣にと祈ります)

に於ても may はやはり祈りを表はして居る。

God grant that I may be found worthy of the kingdom of Heaven.
(庶幾くは余れ天國の人たるに恥づるなからんことを)

此の文章をチョット見た所では God が單數であるに働詞は複數の grant で何だか變なやうではあるが、こは may God grant とよべばを may の省かれたものと心得てれば解釋に苦しまない。

God bless our good city !
(神が吾が善い町に幸福を下されんことを祈る)

此文章を解して「神が吾が善い町を惠むよ」といふは誤りで、やはり God bless の前に may を省ぶきて居るのである。

Devil take the hindmost !
(惡魔が最後に在るものを捕へてくれればよい)

God preseve me from ever being without debts !
(余は常に負債せずに居ないやうにして居たいものだ。常に負債して居たいものだ)

Clumsy as they were.

The boy bought the books, *clumsy as they were*, and has worn them up to this time.

(其長靴は不恰好であつたけれど子供は此れを買ひ今日まで穿いて居た)

此の文章に於けるやうに、語勢を強むる爲め最初に轉置した動詞の補足語の次にある as は however の意味で「……なれど」と譯すべきである

Rich as he is, he is not happy.

(彼れは富んで居るけれど幸福ではない)

divided as the Greeks were politically, they were, nevertheless, united by a certain national feeling.

(希臘人は政治上では別々にわかれて居たけれど、又た或る國家的感情で結合して居た)

Hero as he was, a tremor passed through him.

(彼れは英雄であつたけれどギョクトした)

Brave as he was, he could not help feeling some fear.

(彼れは勇敢であつたけれど幾分か恐怖の情を感ぜずに居られなかつた)

大過去

One morning when Frank went out to feed the rabbits, he found they were not in their house. He felt very sorry. He *had made* a bed-room, *as he called it*, in one corner of the house, and *had put* plenty of hay in it for a bed.

(或る朝フランクが兎に餌を遣らうと思ふて出て行て見たら、兎は其の巣に居なかつた。そこで彼れはいたく悲しく感じた。之れより先き彼は其の巣の一隅に彼れの所謂寢室をこしらへて置いて、又寢床とせん爲に其の中に乾草を澤山入れて置いたのであつた。

此の文章に於て注意すべきことが二つある。一は此の文章の動詞は上半部にあるのは過去であるに下半部にあるのが大過去(プラパーフェクト)になりて居ることと、又その様な as 即ち called it の譯し方である。先づ第一に此の文章の後半の動詞が had made 或は had put といふやうに大過去になりて居るのは如何なるわけであるかといふに、これはフランクが、兎の爲に寢室を作り乾草を入れてやつたことが、兎に餌をやりに行て兎が巣に居なかつたのを見て實に悲しみた事より以前に在りた事件であるからである。故に此の如き大過去は「是れより先き……」と譯せば其本意を表はすことができる。

又た此の大過去は過去の動詞の現はして居る事件より先きであることの外に、過去の動詞が現はして居る主要なる出來事に對する原因或は說明的の關係を表はして居るやうに解釋せねばならぬことがある。例へば

The boy would not drink. He *had been told* by his mother never to taste strong drink.

(其の子供は酒を飲まうとしなかつた、蓋しそれより先き彼れは酒を口にしてはならないと母に言はれて居たからである) 此の文章に於て後文の大過去の動詞は前文の現はして居る事件の原因を說明して兩文章の關係を表はして居る。

Oh, what agony filled the heart of the gunner! A boat *had put off*, but he knew that it could not reach the boys in season.

(嗚呼かの砲手の憂悶は如何であつたらう、蓋し之より先き舟は出帆して居たのであつたが彼は其舟が間に合ふやうに子供等に達することはできないと知つて居る)

At this moment, a cry reached the ship, that pierced every heart, the boys *had discove-*

the enemy.

(此時子供の發した叫び聲が舟に達して船中の人々の心をギョットさせた蓋し子供等は已に敵を見つけたのであつた。)

又已に敵を見つけたので叫び聲を發しそれが舟に達したので、つまり敵を發見したことが叫び聲の舟に達したことより先きで且つ叫び聲を發したことの原因を説明して居るのである。

次に冒頭に掲げてある文章中の "he called it" は "boy-room" という語を用ゐることの説明であるから「彼れの所謂」と譯したら善からう。其他次の例の "you style it" もやはり「汝の所謂」と譯せばよいのである。

you style it, and that forthwith.

(余は汝の所謂「不條理」な事を試みにやつて見やうと決心して居るしかも即時にそれをやりて見やうと決心して居る)。

the+時に普通名詞

He felt *the* patriot rise within his heart.

(彼れは愛國の情が其心中に湧くを感じた)

此の文章に於て定冠詞と patriot (愛國者) と合したものは patriotic spirit or feeling (愛國の情) と解すべきである。定冠詞と普通名詞と合したものは抽象名詞の意味に解釋せねばならないことが多い。これは美辭學に所謂換喩 (Metonymy) の例で何等かの隨伴物を以て本名に代つて想像を一層いきいきとさせる形容である。

He acted *the lord* wherever he went.

(彼れは至る處で偉人の擧動をした。the lord = the lordly or overbearing character)

He allowed *the father* to be overruled by

the judge, and declared his own son to be guilty.

(彼れは裁判官たるの職分の念で父たるの情を壓して我子を有罪と宣告した。the father = the fatherly feeling. the judge = his sence of duty as a judge.)

Forgetting *the judge* in *the man* and *father*, he sprang from his chair.

(人間として動物を憐れむの情と父としての子のオラキを喜ぶの情との爲めに裁判官たるの職責の念を忘れて彼れは椅子より飛び立つた。)

The pen is mightier than *the sword*.

(文筆の力は武力よりも強し)

When promises have been made, fulfill *the letter*, but the spirit of that which they agreed to, performed.

(一旦約束を結んだらば其實行せんと約した誓の文面のみでなく其の精神をも實行せねばならない。the letter は「文字通りの意義」「文面通りの意味」の義にして眞意本意の反對をいふのである)

The head can not understand any work of art, unless it be in company with *the heart*.

(智力は情と伴ふのでなければ如何なる美術の製作をも理會することは出來ない)

He gave up *the sword* for *the plough*.

(彼れは軍職を辭して農業に就いた)

The paths of glory lead but to *the grave*

(榮光の路も向ふ所は唯だ死のみである)

Man for *the field* and woman for *the hearth*.

(男子は活動に婦人は家事に向く)

修學と衛生

（遊學に志す諸子の爲めに）

遥　幼　生

健全なる思想は健全なる身体に宿る——不生産的人物——流星光底逸長蛇の恨——東京の空氣と田舍の空氣——遊學生に對する注意——傳染病と東京——肺病と脚氣——衛生と運動——府下の名勝と攝生——精神的修養

修學と衛生。是れ實に立志一度發を東京に負はんとする青年學生の先づ思ひ至るべき問題にして、系講師ならざるも、特に四號活字のモットーを要する所なりとす。

古語に、健全なる志想は健全なる身体に宿るといひけんも道理なり。學あり、智あり、一代の識見ある人も、雖も、身体の不健全なる人は勢ひ其の思想は病的にして妙に滅入つた考のみ抱くものにして、する事なす事悉く消極的に流るゝはまた止むを得ざる所なりとす。

人生五十年、幸ひに男子と生れて世に爲すあらむと志すの人は、つとめて此の病的思想を脫して一代の風潮に魁け、大いに健全なる精神を皷吹して天下万年の計を定めざるべからず。たとひ其の學識は万人に超越するも、日夜藥用にのみ追はるるやうにては、まこと國家に取りて不生産的の人にして、個人としてもまた極めて不生産的の人といはざるべからず。

故に、將來に對する多大の希望を抱負とを齎らして上京せむとするの諸子は、よく〳〵此の點に留意して、花のあじた月の夕、學びの窓に信々として勵むかたはら、息らず攝生の道を講じてよく身体の健全をはかり、他日世に立ちて思ふ存分、根氣のつゞく限に活動し得るの土臺をつくらざるべからず。さもなきに於いては、いよ〳〵の間際に至りて思はざる不覺を取り、遺恨十年一劍を磨いても、流星光底長蛇を逸するの恨に接するは至るべし。千丈の堤も蟻の穴より破るとの譬の如く、一旦かゝる悲境に陷りては、天下を併呑せむ

の大志も何かせむ、もう〳〵いかに悶えても、いかにもがいても、駟馬も及ばざる悔に陷るべき也。

倫敦は世界の富の半面を示しつゝあると共に、また最も憐れむべき貧の半面を示しつゝある也。東京は帝國の首府也。大厦高樓甍を並べて殿堂の莊嚴目を驚かすものあれども、また賑はしき銀座の街かげには新網町、万年町の慘狀も目睹せらるゝ也。名だたる國手博士は皆東京に集り居ると共に、また東京は恐るべき病魔の巢窟たる事を忘るべからず。東西四里南北四里、百六十万の人口を包括する東京の空氣は、迚も山みどりに河とこしへに清く、野には綠の波そよ〳〵として人はさながら大古の面影を帶べる田園の、新鮮なる空氣に比ぶべくもあらず。實に黃塵万丈とは東京の街頭を言ひ盡したる形容詞ともいふべき也。

されば、今までは無限に廣き田園の間に、遠慮なしに新鮮なる空氣を吸ひ來れる青年學生の、俄かに塵埃八分ともいふべき黃塵の中にもぐりこみては、其の健康の著しく害せらるゝは當然の事といふべし。此の間にありて、學生青年はよく衛生を重んじ、適宜の運動と細心なる攝生とによりて、忌はしき病魔に犯されざるやう、注意の上にも注意せざるべからず。

東京の學生間に於いて最も怖るべきは呼吸器の病にして、此の病の爲めにあたら有爲の大才を抱いて死の運命に捉へらるゝもの、肺病のみにても年々一万人以上にも上るといふに非ずや。其の他各種の傳染病は一度勢を逞しふしては殆んど底止する處を知らず。腸窒扶斯、實布垤里亞、赤痢等の病毒は年中絕ゆる時なく、甚だしき時には一月の間に死者三四百人に上る事さへあり。現に昨年末より府下に蔓延し來れる黑死病の如きは、橫濱あたりにてはさまで害毒を流し得ざりしにも拘らず、一度東京に入り來りては殆んど滿都百六十萬の人民を戰慄せしめたるに非ずや。而して是等傳染病の最も勢力を張るは、六、七、八、九、十

の五ヶ月にして、此の間にありては特に注意せざるべからずとなす。

肺病は過度の勉強より來るもあれど、多くは他より傳染するが普通にして、怖ろしき此のバチルスは、屢々談笑の間に唾と交りて飛び來るものなれば、人いかに親しき朋友間と雖も、此の病に罹り居る人と接しては、必らず適度の巨離を保ちて談話するをよしとす。これは東京の書生間によくある事實にして、且つ最も忌むべく、怖るべき病なれば也。

其の他、諸子も知る如く東京は飲料水の極めて不良なる所なり。多摩川上水の水道はあれども、是れとて昨年の如きは蛭の爲めに滿都を騷がせたる程なれば、仲々もつて油斷もならず。加之、かの日本の風土病ともいふべき脚氣は、多く此の飲料水より起るものゝ由にて、是れまた東京の名物のひとつなれば、夏期は勿論、一旦煮沸せざる水は決して口にせざるをよしとす。冬期、初春、初秋などの氣候の變り目には殊に發作(おこり)やすく、往々衝心して死に至るものさへあるなり。

さはれ元來、凡べての病氣は不攝生より發作(おこ)るものなれば、はじめにも言ひたる如く、よく体育を重んじ、適宜の運動を怠らざれば、決して病の襲ひ來るべき餘地なかるべし。柔術もよし、擊劍もよし、ボートよし、水泳よし、ロンテニス可なり、キャッチボール可なり。小石川金富町の嘉納塾の弘道館、神田今川小路の有信館は有名なる擊劍柔術の道場にして、麹町區九段坂下に日本体育會ありて、内外運動の器具殆んど完備し、いづれも諸子の肥腕を練るに足るべし。

よしかゝる特種なる運動法を取らずとも、踏みとゞろかす八百八町に鳴り響く足駄の音に、近傍の遊園地に杖を曳かば、優に一日の鬱を散ずるに足るべし。不忍池畔の夏のあさげ、雨細き向島の花の夕、月しづかなる日比谷原頭の清夜や、江の字踏む芝公園の雪景色は、詩人ならずも天來の妙

[illegible]するを得べし。たまには遠く飛鳥山、道灌山、王子、大森、高輪あたりに同好の士と行を共にせば、其の得る所や思ひ半に、一夏の日記を埋むるだけの材のみにはあらず。況んや汽笛一聲新橋を發し、僅か三時間位にして鎌倉、江の島は鼻の先にあり。浦賀久里濱は開國のガイド提督ペルリの像あり」之れを北にしては滿山の紅葉燃ゆるが如き日光あり。かの藤村少年の、青春の夢あはく醒めて低唱微吟優々として百丈の飛瀑に投じたる華嚴の瀧は之れにあるに非らずや。

もしそれ肉体の攝生と共に、精神的修養の道場としては、毎日曜日、若しくは特殊の日に於いて、堅實なる所の會堂寺院はいづれも道高き先達の口を通して精神的パンを諸子に供すべし。所謂食はず嫌ひの、耳を蔽ふて逃ぐるが如き挾量なる襟度は諸子の爲めに取らざる所にして、彼の下宿屋の二階に楯籠りて日がな日長がるたや圍碁に暮らし、娘義太夫の後を追ひまはすが如きは、正に是れ書生界の一大ペストにして、士君子の[illegible]潔しとせざる所、況んや寄席や劇場は斷々乎として修養時代にある青年學生の足踏みすべき所には非ざる也。

新刊紹介

▲法制讀本 (工藤法學士著) 『二十世紀國民叢書』中の一卷として發行されたものである。梅法學博士の序文に「本書は所說[illegible]簡にして能く要領を摘示し、眞に普通教育の教科書たるに適す」とある。この書の内容は「根本の基礎」「帝國公法大意」及び「帝國私法大意」の三大部に分かたれ、それぞれ一々詳しく說かれてある。有益な書物である。(定價三十錢、東京神田表神保町六番地光風館發行)

人と說話

[illegible]山生

片岡健吉氏の宗教談

これは筆者が、片岡健吉氏について親しく聞くことの出來ました同氏の宗教談でありますが、會員諸子の何ぞの參考にもと思ひましてこゝに其の大要を紹介いたしまする。同氏が信仰心を起こされた遠因は、明治の初年、その郷里なる土佐でのことで御座いましたそうで、その遠因からして同氏は遂に日本基督教會の會員となり、高知教會の創設者となつたそうなので御座います。

片岡健吉氏

片岡氏の信仰の曙光

片岡氏が米國を經てエウロッパに赴かれたのは、明治四年のことで、土佐藩から海外の形勢視察の爲めに派遣されたのだそうです。ところで鳥渡、お話しが前後いたしますようですが、同氏が元來武士の家庭に生ひたゝれたのは云ふまでも無いことでありまして、

此の武士形氣の家庭は申すまでも無く、禮儀は極めて嚴正なものではありますが、自然また甚だ窮屈なところがあります。そこでかく窮屈なる嚴正なる武士の家庭に生ひそだつた同氏が、この米國に滯在して居らるゝ間、つくづく此の米國の家庭、取り分けて牧師の家庭の樣子などを視つて見たところ、かゝる家庭には禮義よりも愛の分子の方が餘計に在つて、これが米國全社會の風潮に

中流よりも愛の分子

まで引き及ぼし居るのを發見されたのでありります。そこで氏も成る程と少しく打ちうなづかるゝところが有つて、それから船でエウロッパへ渡り英吉利のロンドンへ來て見ると、馬場辰猪氏が既に此の地に留學して居られ、同氏は切りに羅馬の法律と基督教の關係などを講究して居られたのでありまして、同氏はしきりに片岡氏に宗教上のことなぞを物語り、また日曜日には相携へて會堂へ行かれた。かくて會堂へ屢行く內に宗教のことは大分わかる。それとともに英國の事情も大分解つて來る。それと共に今迄は馬場氏も亦た熱心な信者であることが漸く解かつたので、成る程、これは信者とて輕蔑すべきものでないといふようなことが解つて來たといふことで、

英國基督教徒の人物

尚ほ英國の基督教徒にして、眞の信仰を持つて居るものは、その人物の確實にして、その信仰も厚く、細かに親切なことが解つて來たのであります。

が、しかも未だ曾て基督教に就いて研究らしい研究をしたことがその當時無かつたのでも有りましたから片岡氏はしきりに馬場氏と議論を進め、時には口角泡を飛ばすこともあつたそうで、その頃、片岡氏二十八九歲、馬場氏は未だ漸く廿二三歲であつたそうです。

『天道溯源』の信仰

それで、つまりは片岡氏、未だ充分信仰心を持つに至らずして歸朝したのであつたが、かくて明治十年、征韓論の端なくも氏は遂に獄裡の辱めを受けたのであります。それで此の獄裡で讀んだのが漢文の『天道溯源』で、これは[illegible]と云ふ人の原著で、有名な書物なのであります。此の書物を熟讀した結果、氏の心は大分信仰に傾いて來たのが原因とのことであります。氏の基督教徒に成られたのも先づ此の邊の原因からだといふことでありますが、詳しくは其のうち紹介する折もありませう。又これは少し舊聞に屬しますが、又嘗て週刊帝國

澤柳政太郎氏の歐米觀察談

教育會の席上にて述べられた、文部普通學務局長柳澤文學士の歐米觀察談を紹介したいと思ひます。

氏の談話に「私も隨分、國自慢なり、また日本の國柄といふものは餘程宜い國柄である、三十六年來の進歩は非常なものであつて、旁々日本は餘程立派な國である、日本の富も左程彼れに劣るまいといふ己惚れた考へを持つて居たのでありました。

日本は實に貧乏國なり

しかるに歐米へ參りまして實に我が國の貧乏であることを深く感じたのであります。即ち彼れの富んで居るといふ事は、見るもの聞くものに現はれて、港について申しますればその港灣の完全を極めて居ることはその規模の高大なることに現はれて居るのでありました。云々」と。更らに談話の歩を進めて「日本が彼れと同一の富力を得るに至るには、どうしたら好いかと云ふことは、何人も抱く事であらうと思ひます。譬へて私共の如き人間の立場から見ると、その根本問題を知りたく思ふのが、當然の事であらうと思はれる。そこで、この根本に就いてだん／＼觀察して見るに、「彼の國民は概して勤勉であることは事實であつて、而かもその職務

澤柳政太郎氏

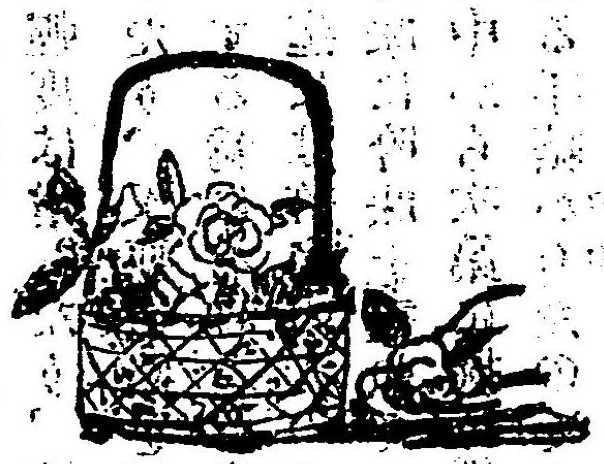
歐米人士は概して勤勉なり

を執る工合は誠に眞面目であつてか、眞面目であるからして、自己の責任自己の職務を忽にしないのでありますといふことが解りました」。そこで思ひ起す「彼の道德といふものは、明かに強固なる基礎を持つて居る。彼の國民といふものは誠にシッカリした健全なる性格を備へて居る。」これは確かに疑ひの無いことであります。「成る程、外國人で樣子の分からぬものは、最も繁華なる街を往つて見ますと風俗壞亂と目すべき現象を往々見るのでありますが、それは私が思ふに一部分のことで、これを我が身体に喩えて云うたならば、足の先きか出或は腕か、或は手の掌に一つの腫物が出來て居る、或は出物がして居るといふのであつて、彼の全身といふものは極めて健全である。しかして、それが骨を腐らし肉を爛らして居る次第ではないのであつて、それ故に彼の道德といふものは僅かに我が國一般の道德に較べて見たならば健全である、堅固であると、いふ事を申すことは出來ようと思ふのであります。云々」

「獨逸の中學教員の授業に巧みであることは、實に見て居ても面白いようであります。殆んど敎場といふものは、先づ生徒も教員も一生懸命に、その事業に熱心になつて、戰爭でもして居るかといふ

一寸のすき間もなし

ような工合に、一寸の透間も無いと申して宜敷からうと思ふのであります。それで「決して日本の如く、生徒は後ろの方で私語き、或は新聞紙を出して讀む、或は私に惡戲をして居るといふようなことは、殆んど見ることが出來ないのであります。云々」



自轉車と自動車

二　秋生

馬車に働器を附すると云ふ觀念は一七七六年佛蘭西で車の後輪を廻轉させる踏磨の樣な物を用ひてから實行されたのに至つた。併し今日の二輪自轉車の前身とも謂つ可きは是れではなく寧ろ十七世紀の頃に流行した一種の木馬であつて即ち其の乘手は足を地面に附けて我と我が身體を運んで歩行つたものである。而して眞の二輪自轉車の起原は一八三六年ダルゼルと名くる一蘇格蘭人の造り出したものが是れである。此の自轉車は木及び鐵を以て構造し、極めて拙惡なるものではあつたが、方今の低い安全二輪自轉車と甚だ能く似て居る。そして發明者たるダルゼルは之を以て一時間の競走で「メール、コーチ」に勝つたと云ふから少くとも彼は此の自轉車に依つて毎時二十哩を疾走し得たものに相違ない。最初斯くの如くであつた自轉車も其後幾多の星霜を經て段々と進歩するに至つた。先づ働輪に脚力を利用する方法は樣々に修正されたり、輕度は增したり、機械的の搆造は愈々完きに至つたり、又惡道路を行くに際して磨擦や動搖を少くする爲に有ゆる改良は施され了つた併し斯くなる迄には許多の人の頭腦を搾り凡ての考案を盡し吟味に吟味を重ねられる上最良の効果を奏したもの、中から次第に選擇採用すると云ふ樣な苦心慘憺たる手續が有たのである。

其の第一の改良は護謨「タイヤ」の使用である。初め「タイヤ」は細い帶革たるに過ぎなかつたが、（一八六八年）其後二吋の廣さを有するやうになり一八八八年に至て漸く今日の如く脹んだる氣學的の「タイヤ」が發明せられた。又從來自轉車の車軸も普通の車の軸の樣に太く不器用なものであつたが一八七〇年の頃には電線を以て緊張した精妙なる車軸の發明あり、次で一八七七年には磨擦を防ぐべき「ボール、ベヤリング」（俗稱お椀）の發明が

あつた。其後間も無く諸種の齒輪（ギヤリング）を使用するが初まるに及んで從來よりの小形の車輪にて却て大きな速力を以て廻轉するが出來るやうになつた。之と時に男女の差別なく乘用するを得べき安全二輪自轉車の基を開くをになつた。要するに二輪自轉車又は三輪自轉車が當世の如く安全に便利に且つ速迅の能力を有する樣になつたと云ふのは全く右述べた四個の改良發明に之を負ふと云ふのも不可なしである。一八八四年外國の市場にあつた三輪自轉車の數ばかりでも三百五十種の上に出でたと云ふ事であるから、當時に於てすら二輪自轉車及び三輪自轉車の兩方を合算したら自轉車構造法の種類は恐らく一千以上になつて居たに違なく、今日は固より將來に於ては如何に其の種類の增加すべきか殆ど想像するが出來ぬであらう。而して斯の如き事實は一に前述の吟味と失敗との結果に外ならぬ。

全く同樣に極度の速力に達して居る。是は頗る興味の有る事實であるが、實際競走馬と蒸氣船及び二輪自轉車とを較ぶれば各一時二十哩の速力を持つて居るものがある、併し馬が一時間に三十哩を行かうと云ふのは一般に先づ難いと謂つた方が宜いので、其れ以上の速力に達するなどは勿論思ひも寄らぬ。長距離にかけても短距離にかけても馬は二輪自轉車に敵すをが出來ぬ。蒸氣船も飛馬以上にあらうが比較して何れ程迄に早いものか未だ知るをが出來ぬ。自轉車の速力が從前に比して昇進したをも亦驚くばかりで、嘗昔はどれ程訓練な競走者でも一時間に二十哩を駈るといふのが、先づ關の山であつたが、今日では少し脚の良く永大な人であらば誰れでも其位な速力に達するとが出來る。達者な自轉車乘になると道路さへ相善良であるなら一日に百哩の途を旅行しても、さしたる疲勞を覺えずと云ふのが今日の有樣である。二以前は一日僅に五十哩の旅行するのも一通りや一

遠りの困難では出來なかつたのである。自轉車の發達は之を他の交通機關の發達に比して一層劇甚にして且一種の特質を帶びて居ると謂はねばならぬ。

自轉車は勿論の事であるが、近頃に至りて蒸氣、瓦斯、石腦油を初め電氣などを利用して車を運轉させる樣々の方式が發明せられた所謂自動車（モーターカー）と云ふのは即ち是等の事である。併し其の原則に至つては聊かも普通の蒸氣機關と異つた事がないから詳しく申上げる必要は無いと思ふ。但し是等の交通機關は市街に住する人民にとりては衞生上並に快樂の問題上少からぬ關係を持つて居ると云ふのは、若し馬力の改良が遺憾なく行はるゝならば市街の道路は都合よく地瀝青を敷くことが出來やうし又護謨「タイヤ」が一般に使用せらるゝ樣になれば第一機關其ものが堅固にして破壞の恐無きに至るのみならず、かの喧々囂々たる騷々敷い響を市民は聞かなくても濟み、全時に市街は毎日々々撒水により洗はれ一個清潔にして安靜なる邸宅を見るが如きものとならうからである。勿論是れは二十世紀の事業である。即ち西洋に在りてすら二十世紀に對つて殘された問題であるから、日本などは、何時左樣なるものか頗る覺束ないような話ではあるが、併し何とも知れず、讀者諸君の中のお若い方でなくとも案外早く東京などで右の光景を目擊せらるゝことが出來るやうにならうかも知れぬ望むらくは幸に左樣あつて欲しいものである。

* * * * *

以上述べ來つた所に依つて、第十九世紀の間に於て三通りの交通機關——即ち汽車、汽船、及び自轉車並に自動車が發明せられ、而して何れも驚して殆ど完全の域に達したと云ふ事は大略ぶ分りになつたであらうと思ふ。此の三通りの交通機關ばかりは原則からして十九世紀以前に行はれたなのと全じでない。今日生存して居る老人中の老人と云はれる人々が生れた頃迄と云ふものは、如何

なる交通機關も皆數千年の昔から用ひ來つた舊式のものたるを免れず、其間多少の改良は有つたとしても大體の方法や効力には殆と何等の變化も進歩も無かつたと謂つても可い位なのだ。然るに僅に一世紀經つか經たぬかの中に突如として一足飛の發達を遂げ、見る〳〵今日の盛況を呈するに至つたと云ふのは、殆と虛構ではないかと思はれる位だから、勿論十九世紀以前數千年間同一水平線に彷徨して居つたと云ふのも既に不可思議であるが其不可思議は却てお釣を取られても可い位で、實際十九世紀に於ける急激なる進歩は以前の失体を一時に償つて而も餘あるものであつたと謂はねばならぬ。特に驚くべきは交通機關の斯かる一足飛の發達は立どころにして全世界に普及し、樣々な點から見て各文明國々民の風習を一變せしめたるばかりで無く、甚しきに至つては國民の言語に迄も影響を及ぼした事である。實に奇大な勢力を持つて居るものではあるまいか。

之を要するに開明の今日、交通機關として重要なるものは凡て第十九世紀に至りて初めて發明せられ、第十九世紀の中に改良せられ、而して又第十九世紀の去ると全時に其の發達を完了したと謂つても妨げない。即ち第十九世紀はおのづから斯かる時代に該當して居つたのである。或人が之を稱して「ワンダフル、センチュリー」（驚くべき世紀）と云つたのも、蓋し過當ではないのである。

（「十九世紀に於ける交通機關の發達」——大尾）

雜錄

新刊紹介

▲今昔物語（藤岡文學士校訂）「今昔物語」は源隆國卿の著、中に載する所のものすべて三十一卷ある中のうちから趣味ある談話四十五篇を拔萃したものがこれである。すべて文學士藤岡作太郎氏の校訂に成れるものであつて、卷頭には「今昔物語」古寫本を寫眞版にして挿んである。

▲近江縣物語（關根正直氏校訂）これは石川雅望氏が著はしたもので、上品な雅文で下ざまの猥雜な有樣を寫したところに興味があるのである。尚ほ此の卷のはじめには作者の小照、その挿畫が挿まれ、卷の終りには關根氏の註釋が附いて居る。

▲狂言三十番（芳賀文學士校訂）これは數百番の能狂言のうちに就いて、最も面白きもの二十番を文學士芳賀矢一氏が選んで校訂されたものであつて、卷頭には狂言原本の挿畫を縮圖したものが掲げられてある。

▲山家集（幸田露伴氏校訂）「山家集」は西行法師の家の集である。西行法師の歌は淡泊幽清、高致逸響、後人の及び易からぬところに價値がある。この書は其の歌集であつて、幸田露伴氏の校訂に成り、卷頭には原本の寫圖（木片）が挿んである。

▲風流志道軒傳（饗庭篁村氏校訂）風來山人平賀源内の著はしたもので、最も滑稽なものであつて、實に達者な書き振である。文章の手本としても確かに一讀の値がある。尚ほ附錄に「風來假名文選」といふ同じ人の書を添へてある。以上五種は、「名著文庫」の第五から第九まで、何れも有益な小冊子である（定價各二十錢、東京神田[illegible]合資會社富山房）

▲國語作文（小杉文學博士監修）古今の國語作文の中に就き其の粹をぬき、四季、天象、人事、雜の合部に分ちて編錄し、尚ほ一々類語數十句を各に添へた深切な作文の書物である。國語作文に志す人は是非一本を座右に備へて宜からうと思はれる。（定價五十錢、東京神田鍛冶町四番地誠之堂書店）

會告

△本誌は都合に依つて、懸賞作文を掲げぬ。その代り次號には二冊分の作文を一緒に披露する筈であるから、會員諸子は、何卒次號を樂みに待たれんことを、唯今から願つて置く。

『中等教育』作文の選者しるす

雜錄

雜錄

英文解釋の栞

喜安生

結果を表はすto

Many a father has learned *to his sorrow*, what it is to have a boy idle.

（子供を遊ばして置くのは如何ほど傷ましきことであるかといふことを悟つて悲しめる父親は澤山ある。）

此の文章に於ての to his sorrow の to は結果を表はすもので「……の事を知るの悲しみとなる」、「……の事を知りてこれが爲めに悲しむ」のである。次に掲ぐる二三の例の中にある to もやはり結果を表はすものと解釋せねばならぬ。

I found *to my joy* that he was still alive.

（余は彼れがまだ生存して居ることを見て喜ばしかった。嬉しいことには彼れはまだ生きて居た）

To their own great misfortune, they can not recognize, *much less reverence*, great men and great things.

（彼等が、偉人や偉大な事物を認めることも出來ず、まして此等を尊敬することの尚更できないのは彼等の非常な不運である）

而して此の文章に於て更に注意すべきは much less reverence の解釋法である、先づ reverence は名詞であるかはた動詞であるかと言ふに名詞と見ては解釋ができぬから動詞と見ねばならぬ、動詞とすれば其の主格は they で they can reverence と續き、其の目的語は great men and great things であらねばならない。次に much less を如何に解釋すべきかと言ふに、偉人や偉大な事物を尊敬する

とは是等を見認むるよりは更少ない、換言すれば偉人などを尊敬することのできないのは是等を見認めることのできないより尚更ひどい、約言してまして「偉人や偉大な事物を尊敬することは尚更できない」と解すればよい。

Not to say

He is weak-minded, *not to say* foolish.

（痴愚なりと言はぬまでも彼は優柔である）

此の文章に於て not to say は「……とは勿論いふことを得べきも」、「假に一歩を讓りて……と言はないとしても」、「……といふことはさておき」、「……どころではなく」などといふ意味である。

又た Not to mention も to say nothing of も not to speak of も之れと同じ意味である。

The teacher has a superior faculty of instructing youth, *not to mention* his fine scholarship.

（あの先生にはエライ學力のあることはさておいても少年を敎育するには卓絶して居る能力がある）

Nothing can be so silly and unmeaning *not to say* shocking, repulsive, and sinful as the oaths so common in the mouth of vulgar swearers.

かの卑俗な誓言者のよく口にする誓言ほど〔忌はしく厭はしく且つ罪深きものはなしといふことをさておきても〕愚にして無意味なものはあるまい。

此の文章に於ける如く Nothing can be……といふ否定句は not to say の次の shocking, repulsive and sinful も打消して「……はないといふことを得べきもでは別にして」の意となる。

He is so poor that he can not afford ordinary comforts, *not to speak of* luxuries.

（彼れは非常に貧乏で贅澤どころか日常

の普通の慰樂を得るの資を供することもできない）

He has a large income from land, *to say nothing of* the bank stock which his uncle left him.

（彼れは伯父の遺產たる銀行株の〔事は算用に入れなくても〕外に地面からあがる莫大の收入がある）

By one's self.

There were Delays, and Tardys, and Putoffs, with *ever so* many more; and in a corner *by themselves*, and looking more unhappy than all the rest, were the poor little fellows whose name were "Too late".

（チーレーとターヂーとプットオフ及びモット澤山のものが居つた、而して一隅には他のものと離れて獨りで且つ凡て其の他の者よりも一層不幸な風をして居るツーレートといふ憐れな小い者が居つた。）

此の文章に於て ever so は in whatever degree; to whatever extent（いかにも）又は exceedingly; very（非常に、大小）の意味で、之れに伴ふ形容詞や副詞の意味を強むるものである、されば ever so many は「非常に澤山の者」と解すればよい。而して more は、チーレーやダーヂーなどよりももつと多くである、

This is *ever so* long.

（此れは如何にも長い）

He is *ever so* bold.

（彼れは非常に大膽である）

There he heard *ever so* many more voices.

（其處で彼れはもつと如何にも澤山の聲を聞いた）

の如き皆此例である。次に by themselves の themselves を上のチーレーやターヂーなどが受ければ

のと見て「彼等の側に」と譯すのは大きな誤である、此の themselves は下の poor little fellows を受くべきもので by themselves は「他の者共と離れて、己等のみで一群をなして」と云ふ意味である。抑も by one's self には二つの意味がある、第一は apart; separated from others; alone（外の者に離れて、獨り）の意味で、第二は without aid; by individual action exclusively（人の助けを借らなくて、專ら自分の働きで）と云ふ意味である。

When I am in a serious humor, I very often walk *by myself* in Westminster Abbey.

（私は氣分のふさ〳〵せぬ時は屢〻ウエストミンスターアッベイ内を獨りで散歩します）

I took Cocker's book on Arithmetic, and went through the whole *by myself* with the greatest ease.

（余はコッカー氏の算術書を取り人の助を借らずに自分獨りで餘程容易に全体を終つた）

The whole of the household regulation are, taken *by themselves*, but trifles; treating to an important result.

（家事を整理することは全体みなそれ丈で見れば些細なることである、しかし此の些細な事も甚だ緊要な結果を來すの用を爲すものである）

此の文章に於ては are, taken by themselves, trifles は are trifles と續き、by themselves は括弧内に入れてあるべき句で「其の他の點を離れて、それのみで考ふれば」と云ふことである。而してその themselves は多數名詞と見るべき the whole を受けたものである。

接續法の were 及 had.

I waited on the Govenor, and should have taken Collins with me*had he been sober.*

（余が酒を飲まずまじめであつたなら連れて行くのであつたに「酒に醉うて居たから連れて行かなかつた）

此の文章に於て should have taken の主格は「I」である。而して take……with me は「連れて行く」と譯せばよい。

I *have* some money *with* me

（余は少し金を持て來て居る）

He *brought* his dog *with him.*

（彼れは犬を連れて來た）

の如き皆此の例である。次に had he been sober という句に於て疑問文にあらざるに主格の前に助動詞の had と入り代りて居るは何故かというに、凡て had に限らず be や did や were や should 等の接續法の助動詞が主格の前にあると接續法の意味となるものなれば「Had he been sober」は「If he had been sober」の意となるのである

（余は知事の邸に伺候した、而してゴリンスが酒を飲まずまじめであつたなら連れて行くのであつたに「酒に醉うて居たから連れて行かなかつた）

此の文章に於て should have taken の主格は「I」である。而して take……with me は「連れて行く」と譯せばよい。

I *have* some money *with* me

（余は少し金を持て來て居る）

He *brought* his dog *with him.*

（彼れは犬を連れて來た）

の如き皆此の例である。次に had he been sober という句に於て疑問文にあらざるに主格の前に助動詞の had と入り代りて居るは何故かというに、凡て had に限らず be や did や were や should 等の接續法の助動詞が主格の前にあると接續法の意味となるものなれば「Had he been sober」は「If he had been sober」の意となるのである

英文解釋の巢

Had I but a single blanket, it should have been their bed.

（余に唯一枚の毛布でもあつたらそれを彼等の臥床としてやるのであつた）

They would have felt that they were on holy ground, *had the landscape been devoid* of natural charms.

（よし此の風景が天然の美趣を欠いて居たとしても彼等は尚は聖地に在ると感せしならん）

These wounds were less severe than they would have been, *had not a heavy jacket* which I had on, *cleansed* the teeth of the lion in their passage.

（余の着て居た厚き上衣が獅子の歯の通りた時に其の歯を磨かなかつたならば此等の疵は隨分烈しかつたであらうが厚き上衣が獅子の歯を磨つたので疵は存外に

輕かつた。)

此の文章に於て they would have been の次に were を補ふて解するがよく、而して they は wounds を受けたものである。had not は cleansed に接するのである。had not a heavy jacket cleansed は if a heavy jacket had not cleansed の意味である。次に their passage の their は teeth を指し、had on は「着て居た」と譯すべきで「着る」と譯してはいけない。(put on なれば着たと譯すべきも)、元來 have on は續いて着て居ることで put on は單に着るといふ一時の働きである。

Should anybody call, say I shall not be at home till evening.

(若し誰か尋ねて來たら晩までは留守だと言つて下さい。)

The mass being made up of individuals, it is clear that *were each to improve himself*, the result would be the improvement of

大

(社會は個人から出來て居るものであるから、各人が己れを改善すると其結果は全體の改良となることは明かである。)

(『英文解釋の栞』おはり)

童話

そんやう生

(二) 八郎さむ

そは寒き〳〵朝月の金曜日なりき。八郎さむの御母樣は永き〳〵寢めざるの眠につき給へり。八郎さむ四つになれるが、元より何事とも知るよしなく、人々の珍らしくより集ひて立ち騷ぐが寧ろ嬉しく、ぴん〳〵と元氣なもの。

『八ちやんお母樣は?』

『えゝ、御母樣はねえ、お座敷に寢て居るの。』

其の面は輝くばかり。祖母君まづ喜びおほひ給ふ。

花瓶に飾る御柩の前には百五十番の聖歌の響かすかに、聖壇の斷りの灯ゆら〳〵とゆらぐ事三度。

小塚空谷

▲伊太利と丁抹

伊太利の旗は綠、白、赤の等分三色の縱線條である。柄杖の處が綠で、中央が白である、白き部分には軍隊と王冠の紋章が附着して在る。

アルフレッド大帝がデン種族を征服せしとき、彼等の奇異なる軍隊をも多く分捕したりしが、其の軍旗には鳩が描かれてあつた。蓋しデン人種は、戰鬪にして、味方の勝利近く時には必ず此の鳩が羽撲ちをして、其の前兆を知らせるものであるといふことを迷信して居たさうだ。

デンマークの國旗は赤色にして燕の尾形をして居る。而して白の十字が描いて有る。

▲スペイン

スペインの或る精舍に於いて、十一世紀時代のカスチリアン軍旗が保存して有る。其の柄は大なる銀の十字の上に、立派なる救世主が彫刻して在つて、甚だ見事なものである。著名なるシドの國旗は綠でおつた、旬にも斯ふ云ふてある。

"There were knights five hundred went armed before, And Bermudez the Cid's green standerd bore"

アラゴンとカスチイルの兩勢が、曾つて兵鋒を交へて、激戰を開いたことがある。此の際カンデスピナの伯爵は最後まで奮鬪を續けたれど、遂に運命拙くして其の戰場の露と消え去つた。當時オルア家の大膽なる旗手は、最も忠實に且つ勇敢に働を爲したものであるが、最初に其の馬を倒され、更に續いて其の手を切落されたから、遂にまた主人の傍に同じく倒れざるを得ざるに到つた。が、此の時此の旗手は尙は其の大膽なる勇氣を毫も失墜するをなく、我が高貴なる尊き國旗を、確乎として其の腕に抱へ込みて、最後までもオレルの道

令した。赤の横平二條線は各〻全廣の四分の一の巾である。

▲ベルザウム

ベルヂウムの國旗はフランス、伊太利、ベルユー、及び和蘭ジユ等と同一樣式であつて、縱に排列された樣である。一千八百三十一年に國定となつたものであるが、其の三色は黑、黃及び赤であつて、其の染分は全く等分である。一千八百八十年其の首府ブルッセル即ち小巴里に於て、博覽會が開設されたときに、此の國旗を以て、非常に立派な飾りを爲して、天下の人目を驚もたをがあつた。

ネザーランドの旗は赤、白及び青の三條の横平等分線である、此の三色旗となつたのは近年の事に屬して居るが、多年の間、尤もオランダ國の愛好して用ゐた旗樣は、橙黃色であつたのである。

▲葡萄牙

葡萄牙國の國旗には中々歷史的說明がある。一千一百三十九年、アルフオンソ、ヘンリックが三千の兵と數人の英佛勳爵士とを率ゐて、五人の王に依つて命令せられて居る、二十万のムール兵と戰端を開いたことがある、其の際アルフオンソは、神の示顯を行ふといふある隱者に依つて、其の軍勢の行動を導かれて、遂に大勝利を得たさうだ。而して大膽なるヘンリックは、白き馬に打跨りて、意氣揚々と花々しき戰場を往來し、遂に多勢の敵を打破つたのである。即ち旗の地に顯表してある、白き楯の中にある五個の小き楯は、此時王が受けし五ヶ所の傷口の紀念であつて、各又楯を圍包して居る五箇の印は、五人のムール王を紀念する爲めである、是れ實に勇敢なる旗章である、而して此の上げた、名譽の敢爲なる旗章である、而して此の敢爲なるポルトガル人は、愈〻益〻此の勇ましき旗を振舞して、或は遠くアフリカの海岸を航し、或は遠く喜望峯を周ぐりて、更に東印度邊までも遠征するに至つたのである。現今の奇麗なる旗は、實に勇敢なる航海者ヘンリー王の、榮光高き旗よ

行軍歌を繰返へしつゝあつたといふことである。彼の喇叭手白神源次郎と好一對の美談である、

"They hewed the standerk from his breast,
The helmet from his head.
They hewed the hands from off his limbs,
From every vein he bled.
Clasping the standard to his heart,
He raised one dying peal
That rang as if a trumpet blew,
'Olea for Castile!"

一千五百十三年九月七日にバルボアは始めて大平洋の大海を發見したり、同日彼れが來つて該海濱に佇みしときは、折りしも海潮はまさに干いて居つた。依つて暫く其の模樣を眺めて居つたが、大洋の潮滿は時々彼れの足を洗つて、徐に寄せては返へしつゝ、實に大海の干潮は得も云はれぬ靜けさものであつた、時に彼れは、カスタイル及びレオン兩併びたアラゴンの國旗を打ち振り、今日彼れが發見した海も、島嶼も、濱灣も、皆な我が所有であると、彼等の名に依つて之れを取つて了つた。其の後バルボアと其の從臣等は三身一体でふ聖傳より、木を切りて三個の十字を作つた。ムール戰爭の時、フエルヂナンドはポープ、シキスタス四世の賚物なる重大の銀十字を毎は使用して居た千八百二十二年に、大將サン、マルチインガリヤに於ける自己の權利を放棄せしときに、彼れは自ら「予はピザロガインカス帝國を攘つたとき、彼れが使用せし所の國旗を記錄として保存せん」と云つて居つた。其の元質や粗にして、其の命運や果敢なき、此の軍旗は、最後にはベルユー國に望まれて、遂に同國のものとなつたが、一千八百六十五年其の皇室が一旦敵に掠攻せらるゝに至り更に窃盜されて其の行方は全く不明となつた。

一千八百七十五年一月六日、スペイン王アルフオンソ第十二世は一千七百八十五年の赤旗に對し、黃及び赤の二色を以て、其の旗章と定むる旨を命

り變化して傳つたものだ。

▲那威（ノールヰー）と瑞典（スヰーデン）

那威及び瑞典の旗はオランダの旗に能く似て居つて、其の色どりを互に交叉したる點が異つて居るのみだ。那威の國旗は赤地に青の十字を抽いたものであるが、瑞典のは青地に黄の十字が書いて有る。大ブリテンが合一旗と同樣に、那威及び瑞典は各國旗の一隅に於て、等しく合一をしめす所の合一徽號を顯はして居る。蓋し瑞典は曾てヨーロッパの歷史上に在つて誠に重要なる一部分を占領して居りし國なりしが、一千八百十七年、遂に那威に合一せられて、今は一王の下に管轄せられて居るのである。故に兩國の旗には、ヤハリ合一の旗幟が附して有るのだ。

實疑應答

▲植物▼

問 中等教育」○植物學（花と實の部）九七頁にある「ゴナシ」「ヨシヤ」といふのは一名雄蕊雌蕊といふのと全じでせう。

答 御說の通りです。

問 顯花植物でも實を結ばない山吹の如きは何植物と言ひますか又、何故に結實しませぬか、其他顯花植物で實を結ばないのは何ですか。

答 八重の山吹が場合により實を結びませんが、一重ならば必ず結實します。△則に何植物とて名あるものに非ず、科名をいへば薔薇科です。

▲衛生生理▼

問 中等教育第拾貳號生理衛生の部百貳拾貳頁に「拾壹對副行神經は頸部の筋即ち喉頭及び聲帶の運動を整理するものである」もありますが　故醫科大學助教授今田東先生著の實用解剖學によつて見ると胸鎖乳嘴筋の內面を穿通し鎖骨上窩の上部を經て僧帽筋に分佈し僧帽筋を運動せしむる樣に記してありますが何れが信なるか御垂教を乞ふ

答 中等教育第拾貳號には中學生程度を目的として書いたから、唯單に迷走神經と副行する部分だけに止めておいたのである、其の副行しない部は、今田氏のと同じいことである。さうして此の神經は其の起點には、一定の則なく、兩側相對したる點に於てせず、それで其の運動のみを主るものか、或は智覺運動混合であるか等、學者間に本當に知られぬのである。其等に就いて詳しく言はうとするには、數頁を費さねばならぬ、これは此の講義錄の主意ではあるまい

問 第貳期第參號生理講話の八頁にあるニコチンとは如何なるものか

答 ニコチン $C_{10}H_{14}N_2$ は、煙草の葉の中に在る劇毒性のアルカロイドであつて其の純粹なのは、無色の液體であるが大氣中には褐色に變じ、煙草と同じい臭氣がある、水には溶け易いものである尙詳しきは化學の範圍內である。

注意＝封書親展を以て中には實につまらぬ質問をなす人がある。例へば「人の耳と目とを容易に役に立めようにする方法なきかお禮は何程にでも差上ます」などいふようなのである今後の質問は編輯者に開封されても差支へ無きものにして貰ひたいものである

▲歷史▼

問 中等教育第貳號歷史講話源賴家は北條政子の實子なりや、又賴家は千幡と同腹なりや。

答 賴家は政子の實子なり政子の所生は左の四人なり

大姫君清水冠者義高の室　賴家　實朝坊名千幡　女子早世

問 初號歷史科波賴朝の話中一眞七行の百官の首座を占めてより同十行の太守と稱す迄活字不明に付御教授を迄ふ

答 百官の首座を占めてより藤原氏より入內したる皇后宮の御所生ならぬ皇子は悉く疎外さるゝ勢ひとなりて既に百官の中の國守にも太宰帥之は筑前にて又常陸上總上野の太守は皆皇族を以て任ずる例天皇に右の三國に限りては單に守と稱せずに太守と稱す」なり又此講話は源家義家とあるは賴義の誤にて候

○久保田君へ

一、ボエニ戰爭の近因につきては少し略した爲めに或は明了を欠いたかと存じますから更に說明します。

(一)サイラキロースは希臘の殖民地でボエニ戰爭の時の王をヒエロといひました暴主といふのはタイラントの譯語で民主政治の極端になると野心家が巧みに人心を得て王の位を僭するに至る者で暗に主は啓主の誤りです一言にいへば位を僭した主といふことで實際は王と全しですこれがシチリア島內でカルタゴと常に勢力の爭をして居つたのです

(二)カルタゴの叛兵マメルチニーはマメルチニーといふのはもとイタリアのカンパニアの海賊で勇猛にして戰に上手であつたから傭兵として諸國に傭われたもので自らマルス神の子といふとあるが

らマメルチコーといふのですカルタゴにも傭兵として用ゐられた者ですが賃金の不拂により叛したのです、これがメッシーナを占領したからヒエロは之を圍むこと五年の長きに及んでマメルチニーは救を外に求めざるを得なくなつた、それでローマに賴むかカルタゴに賴むかと考へた後遂にローマに請ふたのですそこでヒエロはカルタゴの助けを求むるに至つたのですローマはさきにサイラキユースと同盟して居たのですがその約を破つたのです、ローマが援はねばカルタゴが救ふことになるさすればカルタゴの勢がシチリアに大となるからです

(三)七頁三行のヒエロが羅馬と同盟したのはローマの優勢を見ても敵し難くカルタゴに從ふよりはローマに從ふのを得と考へたから一變してローマと同盟したのです利害關係でどうでもなるのです、外交上の事多くは皆これです、

二、二號の正誤は御說の通り入れ違ひです

尙御解りにならぬ所は遠慮なく質問して頂きたい（和田）

新刊紹介

▲昆虫生態學（矢澤米三郎、澤田細藏兩氏合著）

池沼篇、溪流篇、果園篇、森林篇、路傍篇等に分かちて所謂昆蟲の生態學を詳述したるものにして、著者が其の序文に言へるが如く、『かの青年諸君の研究家をして此の深遠なる天功を闚窺する指針を得せしむるの』侶伴としては、必ずや多大のたすけとなるべきを信ず。『其の生態の幽玄なる所以を了得』せんとするの階子は宜しく一本を左右に供へて可なり。製本完美、紙質また良好にして、加ふるに美くしき挿畫もあり書架に飾るに適せり。（定價八十錢、發行所、東京神田區神保町六光風館書店）

▲數學問題答案のかゝみ（山下、白井、上野三氏合著）

『著者等が久しく中等教育に從事して、數學を教授せる經驗によれば、學生の答案の書き方甚だ不完全なるは多く見る所にして、諸學校入學試驗答案に至りては更に甚だしきもある』を慨し、其欠をおぎなはんが爲めに其の答案を解題其他の手本となるべきを集めたるもの也。（定價廿五錢、光風館書店）

▲人類界の現象（大島居辨三氏著）

『已れ人間にてありながら、其の人間の何たるかを知らず、已れ生を人類界に享けながら其の人類界の如何なるかを察せざるは迂濶の甚だしきものといふべし』とて、緒論、人間の身體、人間の精神、人間の活動、人間の種類、人類の起源及び發達、人間社會人類と自然と等の數章に大別し更に幾多の章に別かつて專門的に綿密に詳述せるもの。學界此等の書を得て、益する所極めて多かるべきを信ず（定價壹圓廿錢、光風館）

旅行の友

薩隅視察談

古城生

（風俗、習慣）——男尊女卑の弊——內外の相違——一種の迷信——葬式は夜間——太鼓おどり——女子の勞働——飮酒の惡風

（準生の狀態）——見かけと實際——柔順で調鋭——感情的——發達の不十分——非論理的頭腦

（將來の傾向）——昔日の形骸——實修の傾——觀念的教育と形式的文明——恐るべき將來の傾向

▲風俗、習慣

薩隅人の氣質は風俗、習慣の上に現はれてをるが、その中にも特に著しきは男尊女卑の弊である。元來婦女は汚らはしきものといふ觀念が此の地方人の頭腦に染み込んでゐるようであるが、今日ではその實質よりも單に形式に泥んでをる方が多いので、理論と實際とが矛盾してをつて頗る奇怪なことがある。此の地方ではすべて男子用のものと女子用のものとを區別してをる。朝起きて顏面を洗ふ盥が別々である、衣類を洗濯する盥も別々である。その洗濯したものを干す竿も別々である、衣類を縫ふ針も別々である。男子が女子の衣類などを干掛けてある下を通れば幸運が得られないとか、女子の用具を誤つて男子に用ふれば汚れがうつるとかいふ。又、自宅で拂す浴湯などでもその家族中の男子が悉く濟んだ上でなければ（十二三までの女兒は例外であるが）一切婦人は入浴せぬことになつてをる。下男とか雇男とかい入つて後でなければ奥樣でも令孃でもその湯に入ることが出來ないのである。これを見ても如何に女子を蔑視することの甚しいかい明かであらう。

そこで女子は汚らはしいといふ觀念から、すべて女子に觸るゝことは又汚らはしいと考へられ、女色を制して男色を流行せしめるやうに到つたのである。が當今の實情は表面かく女子を卑めてをる

にもがゝはらず、内部に立入つて觀察すれば善惡密通、其他あらゆる非行の盛んに行はれて居るには驚かざるを得ない。これがその單に形式上に過ぎない例證とするに足る。

それから此の地方では一般に迷信があつて、佛教思想はあまり傳はつてはをらぬが兎に角一種の信仰が深く根してをるから、或は衣類の前襟を日に向けて干せば爵が當るとか或は毎日初水は神に捧げねばならぬとかいふ事柄が甚だ多い。又、死靈を祀ることは極めて嚴格で且つ餘程鄭重なものであるが、中に不思儀なのは、葬式は必ず夜間に行ふことである。炬火、提灯に道を照して太鼓を打鳴らし、行列徐ろに埋葬場に赴く光景などは頗る奇觀である。其他祭禮の儀式なども全く異樣であつて過津氏が朝鮮征伐の時代に始めたといふ太鼓踊の如きは此の地方以外に決して見ることが出來ぬ。

女子を卑しむといふ風は一方に又た女子の勞働を

して盛ならしめた傾があるので、家婦は勿論、下女等の日々の働きは他國の男子も及ばぬところが尠くない。士族や農家などでは、米を搗いたり、水を汲んだり、田の草を取つたり、繩を結んだりなどするのは通常女子の職となつてをる。凡て下女が洗足で勞働しないものはない。禮儀だとか作法だとかは彼等の社會に於ては殆ど見られぬ。それに反して男子は却つて惰眠を貪つてをる氣味がある。全體がさうでも無いが、此の地方の飲酒の風は甚しいもので、普通の酒よりは皆燒酎を嗜み夜深くまで飲放歌して樂んでをる。或者はよく働きよく遊ぶが、少し資産あり門戸を構へてをるやうなものは樂天的且つ主我的で、酒色を愛し肩をいからし肱を張つて囃いてをるといふ姿である。

學生の狀態

薩摩、大隅邊の學生は體格が頗る立派に見える。

にも頑丈さうである。一體に背も高く骨骼も大い方ではあるが、然しながら彼等は概して健全でない、活潑でない。見かけと實際とは大違ひである。彼等が健全でない證據は高等の諸專門學校や海陸軍の諸學校の入學志願者の體格檢査の成蹟によつても明白で、その平均は其の他の地方よりも常に多少劣つてをる。又、肉体の活動が活潑でない事實は我等が平生目擊してをつた所で、殆ど疑ふを要せぬ。或人は彼等の體質の不活潑なのを惡評して牛の如しだといつた。これは甚だ酷な形容であるが、兎に角、輕捷だとか、敏活だとかいふ點は容易に見られないのである。外見の立派なとて、豪放若くは亂暴な風はないかと實際を知らない人は思ふかも知れぬが、むしろそれと反對で、一般に粗剛な割合には柔順で且つ遲鈍である。非常に大人らしいやうであるが、其の實案外稚氣な小兒らしい樣子がある。決して憎むべき點はなくして憐むべき點が多いといはなければならぬ。

勿論、これは精神上から影響するところなので彼等の氣風は思想の發達の上にも亦同樣の傾向を帶びてをる。彼等は了解力が鈍い。感情に動いて論理に迂である。しかも刺激を感することが乏しく多くはその遺傳性、習慣性、乃至は各自一己の信仰によつて活動してをるらしく思はれる。畢竟かくの如きは此の地方の風習及び社會の狀態の然らしむる所で、一言以て評せば思想が幼稚なのである。或意味からいへば感情的であつて其の實は常識が不足してをり、或意味からいへば實際的であつて事實はむしろ實着である。されば大に進歩した眼を以て彼等を公平に觀察すると、如何しても比較的にその發達が不十分であることを認められる。而して彼等が發達の不十分なのは、又それだけ此の地方の開明の度が後れてをることを斷言し得られる。

今、彼等が平素の擧動に就て注意すべき二三を擧

げて見ると、彼等は一般に不規律である。又、彼等はよく居睡を催す。此の不規律とか居睡を催すとかいふのは、その幾分は彼等の罪ではないので此の地方の飲酒と男色などの流行との弊害が遺傳して父祖の肉體より彼等が先天的に譲受けて居るのであらう。彼等自身も所謂美少年を追ひまはすともあれば燒酎を飲むこともあり、不品行や不修養のためにかゝる結果を來してをるものもあらうが、多くは彼等の父祖の遺傳の方が却つて重きをなしてをると信ぜられる。

それから、彼等は一般に上に述べた如く精神上に刺激を感じるのが鈍いが、それを感じた時には概ねそれを感情に現はし易い。怒る、泣く、つぶやく、あせる。けれども多くの場合は無頓着である、不注意である。それと同じく又了解力や論理的思考に乏しいから、よく人の説を聞分けたり、事物の眞趣を玩味することも拙であるが、一旦彼等が理解し信仰したときは其の念慮は深く頭腦に浸染して決して輕々しく他の信仰に移るといふやうなことは無い。これは頗る愛すべき事柄でもあるが、彼等のためには矢張非難せざるを得ないことゝ思はれる。

▲將來の傾向

以上は實地予が此の地方を視察して、その事實を忌憚なく述べたのである。想ふに此の地方の人の性質として、これを讀まれたならば、忽ち怒られるであらう。然しながら予は何處までも虚心坦平に觀察したのである。恰も他人が兒童に向つてその行爲の缺點を指摘した時に彼が怒る如く、此の文を讀んだ鹿兒島地方の人は大に予輩を攻撃せらるゝかも知れぬ。が、予は非難せんがために非難するのでは無くして、改善せしめんがために非難するのである。阿諛、詭辯は予の到底口にせられない所であつて、病氣で惱みせがむ兒童には飴よりも藥を與へんとするのが予の本意であるを悟つてもらいたい。

さて、然らばかゝる地方よりして、如何なれば彼の西郷や大久保の如き人物が出たらうかといふ疑問が生ずる。けれども予はこれに對して次の二つの語を以て答へたらば足りると思ふ。第一は時代の比較が違ふといふこと、第二には世に例外の事柄は乏しからぬといふこと、即ちこれである。

そこで予は又此の地方が將來現狀のまゝで進んだらば如何に成行くであらうかと心配してをる。上に述べた所の氣質や風習は向後十年乃至二十年で容易に改まらうとは思へぬ。のみならず斯る氣質や風習の因で生じた精神や又はその實質といふものは全く失せて、今日では最早その形骸のみを存して居るばかりであるが、其の上近來他國と交通が幾分か頻繁になつたから、形式上の文明、例へば服裝だとか、宴會だとか、すべて表面の華美を競ふことに流れ易い事柄が漸次盛んに行はるゝやうになり、加ふるに淫猥、奢侈の氣風いよ〳〵甚しからんとする狀態である。曖國的の弊害に添ふるは形式的文明を以てせば恐らく宜い結果はあるまい。此の地方の治政者その當を得ざれば、或は今後極めて卑俗、醜陋な風儀が竟りはしまいか。懦弱にしてしかも粗暴、輕卒な氣風が行はれはしまいか。いづれにしても將來の傾向は甚だ憂慮、寒心の至りに耐へぬ。どうかこれが杞憂に止まりたいのである。

此の最後の一節は特に同地出身の人士、並びに政治教育等の事業にたづさはれる人々の注意、省慮を促すために態と附加へたものと承知せられた否、ひろく我國民全体もそれに多少心を寄せられんことを希望して聊か理論に趨つたのである。

鑄金雜話

木郵芳雨

唯美術と一口に申しますと譯はないようですが純正美術とか工藝美術とか種々と細かく申しますれは隨分種類の多いもので從つて多くの階級もございますが其内で一番多く皆樣の御承知になつて居りますのが繪畫でございます、これは大概の家には床と云ふものがありまして夫には夫々雪舟の山水がかけてあるとか或は狩野家の龍とか應擧の花鳥とか云つたように又は襖にもいろ〳〵と描いてありますし今日では洋畫の額などもございますし又之れは普に家々の住居ばかりでなく一寸茶屋小屋へ參りましても相應に僞物ながらも文晁の掛物とか抱一の軸とかがありまして皆樣の御眼にふれる事が多うございます夫れでありますから普通常識のある人は繪の趣味の凡は御承知でございますが、たとへば此繪は位置どうとか或は着色どうであるとか直に批評を始めます之は美術院無聲會などの展覽會にはしば〳〵見かけます事でございます夫れが同じ美術でも彫塑の方になりますと中々そうは參りません。

彫刻の展覽會は春一回秋一回と都合二回づゝ年々開きまするがめつたに批評する人がございませんこれは彫刻の趣味が能くわからぬからです、夫れと、ふだんめにふれる事が繪のやうに多くないからと、もう一つには繪のように綺麗でないから自然注意せぬとの二つではあるまいか。併し或は彫刻には繪畫程の能い作が少いからかも知れません夫れもそうでありませうある自稱美術通の紳士が洋行せぬ前に日本では彫刻はだめだ否美術は繪畫に限ると斷言して居りました然るに其人が伊太利亞へ參りまして彼の國の多くの彫刻を見まして殆ど腰を拔かさんばかりに驚きまして夫れからと云ふものは美術は彫塑に限ると云ひだしました、しかし見まするとまだ日本で繪畫のみが多く行はれて彫刻の進歩して參りました、さてこうやつて昔の事を考へて見ましたり希臘の裸躰彫刻の發達しました事や近くは佛國の美術が盛になりましたのを見ると國民の意向に左右されるより仕方ないようです。併しながら現今では帝國議會とか或は大學の大講堂とか大停車場とか演說會場とか何會社とか何銀行とか追々に大建築ができるようになりましたから

の迫へられたのは觀者の多くを寄せ付けるだけの腕のないのではあるまいか實際製作のよしあしは引力に大なる關係あるに相違ありません、して見ますると彫刻を解する人の少いのは世人のわるいのでなく、作家の手腕の拙いからであると云ふより外はありません併し此彫刻が何故に繪畫と伴なつて進歩しなかつたのではありませうか、夫れは以前より進まなかつたのでは決してありません昔佛敎の盛であつた奈良朝又は鎌倉時代などには今日よりも却つて進んで居りました其頃には繪よりも能かつたと私は信じて居ります夫れは奈良に殘つて居りまする彫刻を御覽になつても分ります夫れが何故に今日の樣に退いたのでありませうか、彼の頃には佛敎が盛でありましたから新に寺を建立する事が多うございましたし夫れには一々佛像がなくてはならぬ、欄間の飾も彫れと云ふ風で又堂か大きうございますから大きな像でなければならぬ大いから日子もかゝるから研究も出來る又拙い

やうでは人が畏敬せぬ禮拜せぬのであるから幾つでも作らせる作家は苦心する僧は厳しく督勵する自からも作つて見ると云ふ風で彼頃の彫刻は佛敎の盛であつた爲めに作家も彫刻も彼のように生み出した夫れが足利氏以後になりましてからは佛敎の方も追々に衰へまして、今度は茶の湯などが流行り出しまして例の數寄屋などへ申しまして小さな座敷を作つて樂しむようになりました爲めに大きな像などはいらぬようになりました、之れが彫刻不振の基となつたのだと思ひます、其のかわり他の陶器とか蒔繪とか申す美術工藝の方は著しく進歩して參りました、さてこうやつて昔の事を考へて見ましたり希臘の裸躰彫刻の發達しました事や近くは佛國の美術が盛になりましたのを見ると國民の意向に左右されるより仕方ないようです。併しながら現今では帝國議會とか或は大學の大講堂とか大停車場とか演說會場とか何會社とか何銀行とか追々に大建築ができるようになりましたか

ら從て大なる彫刻像の必要も夫々飾としてなくてはならぬようになつて來ました、ではありますが偖てどこの建築が出來てもどこに橋ができても夫等の飾をした人もなく企てもないのは甚だ遺憾の至であります、あれでは眞の建築とは申されませんカで雨と風を凌ぐだけの大きな箱としが云へませんでこんな有樣では文明國の人の住居とも家とも申されんのみならず外國の貴人を招く事などは決して出來ません此事は經濟の都合もありませうが成べく速に何とか運びをつけたいものです、夫れに軍艦の室内にも西洋などではいろ〳〵と美術的の裝飾がほどこしてあるそうであるが日本の軍艦には一向夫がない是も全體でなくともある一室だけでも日本的の美術裝飾をしてはしい、夫れは軍艦は常に航海して居るから一方では乘込員を慰め一方では各國の港へ寄りて其國の貴顯紳士を招く事などもあるのであるから交際上の飾ともなり又我が國の美術工藝の紹介者ともなりまして直接間接に利益となる事が鮮くないと思ひます併し中には軍艦は戰を主とするものであるから何の飾もいらぬと云ふやうな人もござりませう、夫れは一を知て十を知らぬ野蠻の人の云ふ事であります、追々といふ云ふ風に致しましたら國の品格も高まりますし文華の進歩も助ける事であると信じます、殊に我國のよふに四方海の國では商業及び工藝を以て國是としなければならぬそうして商業の原泉は工藝で工藝の源泉は即ち美術であります。でありますから此源泉は飽迄も培養せねはなりません、近來は圖按などが大分勃興してまいりましたよふですが是も眞に悦ぶべき現象です殊に口附卷煙草の包紙の意匠が大變に進んで參りました、說に商人共は競ふて美麗なる新意匠をでしらへ作る樣になつた。例へは菊世界、羽衣、武藏野、巴牡丹、日の出と云ふ有樣で外の天狗類白牡丹などは少しも賞れぬ樣子であります、之れ皆國民の美術的思想が奬進した何よりの事實であると思ひま

す斯くの如く包を要するもの箱を要するもの等に内容の外に巧に美術工藝の助を待て改良せは海外の市場に於ても將來發展すべき道は多々あるべきを信ずるのであります。

偖て追々御話致しましたか之から段々と皆さんの余り御存じのない鑄金の事に就きまして申し上げようと思ひます、唯一口に鑄金と云へは何でもないが分類して見ますといろ〳〵とこみ入つて參りますから成るべく御分り安きよう申し述べます。

日本の鑄金と西洋鑄金

鑄物にも機械鑄金と鑄金工藝と區別かありまず機械は鐵道線路とか軍艦用の鐵具大砲類等最も鐵が主でありますし夫れから鑄金工藝の方ではおもに銅で是に次で臘銀、烏銅銀等でありまず、前者は多く生型と申しまして冷たる型へ金を入れます之れは川口などでも多く吹きます、後者は殆ど冷へた型へつぐ事はありません之れは美術學校其他市中の各鑄金家かやつて居りますさて鑄金の說明は追々精密に申す事にしまして茲では鑄金の西洋と日本との優劣を一寸と申して見ましよう。

我日本でも鑄金の事は比較的進歩して居つたようです、夫れは例の奈良の大佛や鎌倉の大佛です彼れなどは起重器もなく熔鑛爐もない時代に能く出來たと感心致して居ります、夫れは近年になりまして種々の銅像が出來ましても餘り結果が良好でないのを見ましてもわかる譯であります、尤も機械鑄金の方では維新以來度々此道で洋行したものもあるそふで大分能くやりまするようですが鑄金工藝の方では迚も西洋の足元へもよれぬようであります夫れは一昨年我皇太子殿下の御慶事の折に佛國へ注文した獅々の親子の銅製作が昨年か屆きましたのを見ましても其鑄金の巧なる事は驚くばかりであります、夫れは些のタカヲをあてた痕跡なく處々に鑄型の土が附著してあると云ふ有樣で實に美事な吹であるかいる風であるから鑄金が安く早く出來る安く出來るから從つて求める人も

雜錄

露西亞の話

風雲生

『日露戰端を開かんとす。』

『わが戰鬪準備成れり。』

『帝國の艦隊馬山浦に集まりぬ。』

これ等は今を去ること、數日前有力なる我が帝國首都の某々新聞によりて傳へられ、口性なき京童子の口より口に傳へられ、投機商は其の眼を圓にしつゝ、海陸軍人は腕を扼しつゝ其の日の到るを俟てりしことは事實なり。

戰鬪？　否？　これ吾等の覗ひ知るべきことにあらず、また其の時の到るまでは之れを覗ひ知るの必要あることなし。されど、今の時に當りて聊かこの露西亞に就きて、わが讀者諸子に多少の智識を注入し置くの必要あるべし。

露西亞皇帝ニコラス二世陛下

ピートル大帝を生み、ゴルチャコフを生み、トルストイを生み、ゴルキーを生みし露西亞の事情は如何？

或る人曰はく、露西亞は一の謎語なりと。こは其の變化相繼ぎ動搖相接し、終に如何の定形を取るに至るべきか明かならざるを云へるなり。

その面積は實に一千二百万平方哩強にして、國を以つて比較せば佛蘭西に十一倍し、地球表面に於ける最大の廣原は之れを貫きて横はれり。而して其の民は九千万を超過せり。しかも其の土地の十分の九は未だ開墾されざるなり。猶は

多いと云ふ都合になる丈が日本では鑄た後を種々機々と手を入れねば見られぬと云ふ風であるから大變に徑庭がありまする。勿論一概にタカヲを加へたのが悪いと云ふ譯ではないが、鍍金をせねば見られぬと云ふ事は甚だ能くない事であります。尤も先年美術學校の卒業生の石川浩洋と云ふ人が三年程米國へ參りまして勉強して歸りまして姑く日本美術院に居りましていろ〳〵と彼方の流儀でやつて居りました其時に横濱の原善三郎氏の銅像などを作つたよふでありますが、未だ充分ではないようです。併し今度美術學校の助敎授櫻岡氏が文部省の留學生で洋行する事になつたから、或は能い方法をもたらしてくるかも知れぬ。されど氏が又口の先生で實際の手の先生でないからより多くの望みは嘱されぬと窃に思つて居る。私は獨り鑄金ばかりでなく苟も工藝に屬するものは其道々の技術家で多年苦學して居る所謂職人をやつた方が遙に効果がありはせぬかと思ふて居ります。

蠟型鑄金

工藝鑄金の方で作りまするものの多くは花瓶香爐文鎭茶卓置物等樣々でありまするが其多くの原型は古來蠟を以て作ります、蠟は細工蠟又は密蠟と申しまして多く四國又は小笠原島に産する物に松脂を混じたるものを以て作ります蠟は冬季は甚だ堅くなりまして作りにくいから湯にて温めまして、ヘラと申して竹にて作りたる者、夫と燒ベラと申す鐵にて作りしものにて作ります、此蠟にて作り上げまして土にて全面をかこみ火の熱にて蠟を燒き拔き其空間へ金をつき込みます、之れが即ち蠟形鑄物と申しまして非常に趣味あるものです、かゝる風の製作は古人では整眠東雲琢齋などゝ云ふ人が尤も得意でありました美術學校でも鑄金の方は重もに蠟を以て原型を作る事に之れ迄なつて居りましたが、近來西洋彫刻の流行から油土にて作るよふな傾のありまするのは我が蠟型鑄物の爲には甚だ惜むべきであると思ひます。

また氣候より之れを云へば大陸的なり。冬寒夏熱ともに極度に達し、大抵の地方、一月には寒帶に屬し、七月には熱帶に屬するなり。

この謎語の如き露西亞の大特色は頗る無變化なるに在り。然れとも斯く無變化なる中に於いて、地味、植物、水氣等の點に於いて大に相反せる二大帶、南と北とに横はり、南部に於いては廣漠々の平野帶を形作り、北部に於いては鬱蒼々の森林帶を形作れり。この二帶の相違は幾世紀間露西亞を裂きて之れを二分せる歷史上の爭鬪の深因をなし坐業の北人と、遊牧の南人との不和となり、露西亞と韃靼との軋轢を生し、はたまたモスクワ王國と自由を愛する平原の健兒コサック人との衝突を醸すに至りしなりけり。

而して各自と領域より云へば、この二帶のうち、森林帶は平野帶よりも含むところ廣くして、北方及び中央の全土を蔽へり。然るに平野帶は僅かに南部一帶の地を含むのみにして、西より東に走り遠くウラル嶺を超へて、亞細亞内部の荒野に及べり。森林帶の地、極北に於いては植物生育すること能はざるにより、その起點は北緯六十五六度より次第に南進し、モスクワを過ぎてキーフに達せり。この地方特に南北部は一帶の低地にして河流に富み、露西亞の大河は皆其源を此處に發せり。此の地また、その半歲は冬にして、地は往々二百日以上も雪を以て蔽はれ　河流は五月或は四月の末に至らざれば其の氷解を見ず。故に耕作の業に從ふは甚だ不便にして、生活甚だ容易ならざるなり。これに反して平野帶の地、その地勢前者よりも平坦にして、その面積は佛蘭西に數倍せるにも拘らず、高さ三百五十呎に達する山なく、見渡す限り唯だ茫々として涯際なき太洋を望むに似たりこれ此の平野帶の特色にして、雨は春と秋とに不規則に少しく降るのみにて、極南の或る地方に於いては、一年中一滴の降雨すらなきところ莫きにあらずといふ。

南北の二帶が、斯くの如く各〻其の特色を異にするは事實なれども、而かも此の間、區劃劃據の勢は全くあるなく、尨然として自ら一國民の居に適すべく形作らるゝことを忘るべからず。猶はまた其の全躰の地勢は、政治上の統一を容易ならしめ、從て中央集權となり、專制主義となるの傾向を有するものなることを忘るべからず。

以上、主として露西亞國土の情況に就きて述べたり。次ぎに此の國に住する人種と團體とは如何。

露國の文豪トルストイ伯

露西亞の地勢、極めて無變化なることは前既に述べたり。而かも同時にまた此の國ほどに多數の異人種を有する國は天下無比なりと云ふ。されば從つて其の風俗、言語、宗教等紛々として多樣にして、殆んど辨じ難きものあり。これを宗教に就いて云へば、基督教にては希臘派あり、アルメニア派あり、カソリック派あり、プロテスタント派あり。基督教以外には猶太教あり。回々教あり佛教あり。實に一々枚擧するに遑あらざるなり。

更らに其の人種につき、細別すれば、實に五六十種の多きに上り、彼等は果して、歐羅巴人に屬するものなりや、若しくば亞細亞人に屬するものありや、殆んど名狀し難きものありといふ。

されど、斯の如く紛然として辨じ難き此の雜種中にも、自から其の主なる要素となれる三大人種あり。即ち

一、フイン人
二、韃靼人
三、スラヴ人

これなり。

往時、今日露西亞と稱する地方の大半を占めたるものは此のフイン人にして、此のフイン人は無數の種族に分かたれ、處々に散在孤立すと雖も、他の文明に投じて之れに同化するに敏なるは、その大特色たり。猶ほまた彼等は早くよりして基督敎を奉ぜしに因り、特にスラヴ人と合同し、歐洲の文明と混和するに便なりしといふ。彼等はまた、音樂及び詩歌に對する嗜好を有し、特に詩歌の如きは西歐先進國の珍とするに足るものあり。加ふるに彼等は剛毅、忍耐、固執の性を有し、抵抗の力強く、不撓不屈の勇氣に富めりと云ふ。

次ぎに韃靼人は如何。彼等韃靼人は實に往時三百年間の久しき露人を支配しつゝありしなり。されど後遂に排除さるゝに至れり。彼等は露西亞人と同化すること能はず、されば其の露人に及ぼせる影響も甚だ深からず。されど彼等は今日も猶ほ遊牧の民として南方の平原地を去來しつゝあり。

また豐饒なる地方に住するものは、商業及び耕作を業とし、東洋流の舊習を守りて其の生に安んぜり。その資性、もとより一樣ならねども、概して勤儉にして家庭の遺德厚く、淸潔、實直及び正廉の美德に富めど、創造の力を欠けり。

スラヴ人種に至りては、前二者に優さり、凡て他の種族を從へ且つ併呑せるものなり。此の人種は純乎たるアーリアン人にして、その骨格、言語等に於いてもラチン及びチユート人等の民族と甚だ異るところなし。加ふるに此のスラヴ人は資性に於いてはチユートン人の如く魯鈍ならず。感情銳敏にして、事に動き易く激し易きところあり。而して其の全体を通じて最も特色とするところは、その資性柔軟にして曲がり易し、能く如何なる思想制度にても之れを採用して我が物となすを得ると之れなりと云ふ。このスラヴ人こそ、誠に露西亞人種の中堅にして、彼等は實にバルチック海、裏海及び黑海三大海に注ぐ河流の方向を決する高原附近の地方に起れり。彼等は此の地方より河に

沿ひて徐々に東進し、森林の生ひ茂れる中心に入り、フイン人を追ひ散らし且つ併呑して、終に其の間より新しき一國民を興せるなり。

扨て最終に露西亞人の性情及び氣質は如何。自然の境遇が國民の氣質に影響を及ぼすことの尠少ならざるは云ふまでもなきことなり。露西亞は自然が人の爲めに備へし樂土に非ずして、人は武裝して之れを征服せざるべからざるの地なり。この邊の事情、その國人の性情に影響を及ぼすことの尠少ならざるは云ふまでもなし。

露國の政治家ゴルヤチコフ氏

實に自然との爭鬪の結果として、露國人に最も發達したるは、能く艱難に耐へ、苦痛を忍ぶの消極的勇氣にして、由來冷然たる不拔確固の忍耐は露西亞人の理想とするところなり。猶ほまた、彼等は一種複雜なる性情を有せり。即ち剛にして柔、執着力深くして且つ彈力に富み、粗暴にして溫厚冷情にして親切、これ大に注意を要すべき彼等の性情也。

次ぎに自然との爭鬪の結果として、最も養成發揮されたるは其の着實にして實際的なること之れなり。この特色は啻に風俗、政治、文學者に於て明かなるのみならず詩歌、宗敎の如きものに於いても猶ほ能く之れを認むるを得べし。

露西亞人は氣候及び地理上の影響の爲めに實驗主義に傾くこと此の如きとともに、一方に於いては、沈鬱にして神祕主義に流るゝところあり。而して彼の有名なる虛無黨の如きは、その一例なるべし。抑も虛無主義は組織ある主義、學說に非ずして、急激の社會主義なるに外ならず、而して此の虛無

黨の最も世人の注意を引きたるは、千八百七十八年より千八百八十三年の間にして、而して其の意味も屢〻變じたり。始め千八百六十年より千八百七十年に至る間に於ては、政治上の臭味を帶びざる一種の流派にして、大學等に遊べる青年男女が、舊來の政治、宗教及び社會上の陋説、迷信に對する急激の新思想をいへるに外ならざりし。されども千八百七十年頃に至りては、抽象的の虚無黨は一轉して、形あり、力あり、活動あるものとなり結社と秘密運動とに依つて廣く天下に其の主義を傳へんとし、一躍して政治の渦中に投ぜり。然るに彼等は空論の實効なきに失望して、千八百七十七八年頃に至り、平和の手段を棄て、爆裂彈を其の武器とし、恐怖を其の警語とするに至れり。この虚無主義を心理學的に見るときは、絶對と現實主義とに對する露人の相反する、二傾向の合したる者といふべく、このうちにまた、彼等の大膽に極端に走るの性癖とも認むるを得べし。更らに之れを道德上及び政治上より云へば、虚無主義は、一種の厭世主義にして、天然及び歷史上の事情に養はれしや云ふまでもなし。

露西亞に關して、吾人の云はんと欲することは頗る多々なり。されど、こゝに暫く筆を擱す。

雜錄

實業問答

解答擔任　伊藤秋南

▲問、トラストとシンヂケートとの意義を問ふ

▲答、此疑問は屢〻人より問はれるものでありますが、最も答を爲すのに困却するのであります。何となれはこのトラストも又シンヂケートも何れも最近に顯はれた經濟上の産業組織でありまして、國によつてこの名稱の用ひ方が異つたり、又人によつてトラストを廣く考へてシンヂケートと一つものであると爲す人もあり、又シンヂケートを廣く解釋する人もあるからであります。それ故に私は今この間に答へるに當つて最もよく實際上の現象に當嵌められ得る説明を採るより外はないであらうと思ふのであります。

元來このトラスト及びシンヂケートは兩つながら企業家が同業の企業家と互に劇烈に競爭を爲す時は終には共倒れを爲さなくてはならないことになるから、それは相方共に損である、それよりは相互に仲よく團躰を組織して相互の利益を保護しようではないかと謂ふ譯で出來上つた産業組織なのであります。近世の經濟社會は自由競爭が甚だ熾んになつて來たので、同業者は互に其製品を安く賣らなくては他のものに倒されると謂ふので安賣を爲す爲めに生産物の直段が下落するし、又相互に其生産物の賣り先を競爭するから、其販路は極めて不確實になります。それが爲めに往々にして生産が其賣れ行きよりは多くなつて製品を澤山に持て餘すことになり、企業は非常に困難になつて來たので、これではならぬと謂ふのでこれ等同業者が相共同して競爭と謂ふことのないやうに、共同的經營を爲すことになり、或者はトラストとなり或る者はシンヂケートとなつた譯であります。故に共同的企業であつて競爭の弊害を除くものであると謂ふ點より謂へばトラストもシンヂケート

蟲籠

(五)一夫さむ

そんやう生

三郎さむの大仲好の一夫さむ、且つてお父樣と横須賀の停車場にゆく。眼についたのは上り、下りの列車時刻表。

お父樣の袂ひかへて、〝お父樣〟

〝何？〟

〝上り、下りつて何だらう？〟

パナマ、インパネスのお父樣、額りに髯を捻り給ふ

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

も全く同しで、少しも相異る所はないのであります。唯だ其結合する程度の疎密により兩者の間に區別が出來るのであります、即ちトラストは多くの同業企業者が全く合同して一の組織となつて其事業の經營を擧げて中央部に一任し、其トラストに加はりましたもの〻從來の事業は其トラストの支部となつて、年々其各支部から上つた利益を一度中央部に集め、更に之をトラストを組織する時に各企業家の機械工場其他資產に對して各企業家に分配したトラスト證券に對して配當する方法であります。尤もトラストの組織も段々の沿革がありまして、トラスト證券と謂ふ名稱を用ふるものもありますが新しい株券と謂ふ名稱を用ふるものもありますがそれも所詮はトラスト證券であると謂ひます。即ちトラストは各企業家が從來の自分の營業に用ひて居りました家屋工場と機械器具などをトラストの中央部に信托して其代價に相當するだけのトラスト證券を受取り、トラスト證券の所有者となつて年々配當を受取るのであります。尤も其中にはトラスト中央部の役員となり、又は支部の長になつて自ら其經營に當るものもありますが、何れにした所が、トラストの方は其組織に加はると同時に、從來の如く獨立の經營を爲さぬことになつてそこに一大會社が出來るのであります。

シンヂケートはトラストの如き合同ではありません。シンヂケートの方は其組織に加はる各企業家は皆依然として獨立の經營を爲して居つて、唯だ其シンヂケートの組織に加つた企業家間に成立したる規約に基き共同一致の行動を爲し、相互の利益を計るものであります。却ちシンヂケートはトラストの如き一つの組織になるのではなくて、各獨立して事業を爲しつゝ全躰の同業者の爲めに共同一致の働きを爲し共同の利益を增進するを計るものであります。最も早く分りますのはトラストは今日の獨逸帝國で、シンヂケートは昔日の獨逸聯邦であると謂ふ比喩であります。

▲問、相互保險とは如何なるものでありますか。

▲答、相互保險と謂ふことは日本では近頃屢々聞くことでありまして、兎に角日本では近頃起つたものであります。是を說明するには先づ從來我國で行はれ居る保險の組織を一通御話して、次に此相互保險の御話を致すのが宜しいであらうかと思ふのであります。從來我國に行はれて居ります保險は保險會社がこの保險事業を以て一の營業となして、多くの被保險人から相當の保險料を取つて其人に對して保險の責任を負ふことになつて居るのであります。故に各被保險人は各自この會社からの保險をして貰ふことになつて居つて、保險人と被保險人と全く別の人になつて居るのであります。これが從來の保險の組織であるけれども、相互保險は之と大に其趣を異にして、被保險人はまた一方から見ると保險人であると謂ふ仕組であります即ち相互保險は同じ危險の保險を希ふ多くの人々相集まつて一つの團躰を組織し、各自互に其危險の程度に準じて相當な金を出合ひ、それによつて各自の保險を爲すを謂ふのであります。この保險組織はこの團躰の業務を取扱ふものに對する給料の外に、從來の保險組織の如く其中間にあつて利益を得るものがない故に其積金は多少安い割になるのであります。加之事業が非常に確實であると謂ふ利益があるのであります。

▲問、株式合資會社とは如何なるものでありますか。

▲答、株式合資會社とは半は合資會社の如く、半は株式會社の如く、所詮合資會社で株式會社を混ぜたと謂ふ譯であります。それでありますからこの株式合資會社は、合資會社にあります無限責任社員と謂ふものと株式會社にあります株主と謂ふものとの二つが集つて之を組織して居るのであります。無限責任社員と謂ふは會社の出資者即ち資本を出して居る人であつて、其會社の事業に就いては自己の出した資本のみならず無限に義

務を負ふのであります。即ち會社が損をしたとか破産するとか謂ふ場合には其會社の負債に屬するものを引受けなくてはならぬのであります。株主と謂ふのは矢張り無限責任社員と同じく出資者でありますが、それは會社の株式だけの責任で、其以外に義務を負はないものであります。

株式合資會社はこの二種類の出資者によつて成立して居るのでありますが、此種の會社に於ては、重役は常にこの無限責任社員がなるのであります。これは其責任が株主よりは大いから當然であります。順序として簡單にこの種類の會社を設立する手續を述べて置きませう。これを設立するには先づ無限責任社員と謂ふのが發起人となつて定款を作り、それから株主を募集して創立總會を開くのであります。それで取締役には前に述べた如く無限責任社員がなることに極まつて居りますが、監査役は株主總會で選擧することになつて居つて、これは無限責任社員はなれないのであります。

編輯だより

▲育兒親しむべき頃と相成申候。諸子は此のころを如何に送らせ給ふにや。編輯者より策ねて各方面の大家に依頼し置きし諸講話も追々、漸を追ふて本誌に掲げらるべく相成申候。その一二を申せば理學博士五島盛太郎氏は動物講話として、「近く」うにの話」を御執筆相成るべく、また理學博士長岡半太郎氏も遠からずして最も有益なる物理學講話御執筆相成るべく候。諸子希くは將來を樂みつゝ本誌を愛讀せられむことを。

▲世に行はるゝ營利的雜誌とは、自ら其の選を異にする本誌に御坐候得ば、編輯者と雖も一時的の花やかな眞似を致すことは最も忌はしく思ひ居り候。就いては聊か會員諸子の愛顧に酬ゆる爲め徐々として新計畫に着手いたし居り候。次號の本誌には其の結果を發表さるゝことゝ存候。諸子希くは次號を樂み給はんことを。これまた敢て御願致置き候。

▲本誌前號に謹告いたし置候『談話會』は去月十七日、早稻田大學大講堂に於いて開會され申候。右講話中海老名彈正氏の『新武士の修養』最も喝采を呼び、石川理學博士の『動物の變態』また捨て難き興味あり。大幸理學博士のも有益にて候ひき。詳くは本月發行の『講話集』に就きて一讀の程願上候。

北京の秋

船津生

北京の地たる輕塵飛揚しやすく、春色は見る可きもの少く、蒙古の方より吹きまくる大風蓬々として乾坤に漲り眼も口もあかれぬ程に黃色の砂塵起る。此にひき換へ秋は天清く氣澄み、さらでだに水蒸氣少き地の、空に一片の雲すらなき好晴、さすがに日の色も黃ばみて蟬の聲さへやう〳〵衰へ行くぞ哀れなる。序ながら言はん此の蟬といふが唯だ一種、ガヂャ〳〵〳〵と、大陸的の大聲をあげ、騷々しさ限りなく、蟬噪といふ熟字の適切も一層身にしみておかし。

西太后

まづ內城を一目に見るに適し、且つは好箇の散歩地たる內城の壁の上に登りて見よ。北京は尙は綠樹蒼鬱たる中にうづもれ、天津あたりの一木なき地より來りしものは驚かざるものはあらじ。此の蒼々たる樹木のあはひ〳〵に瓦屋點綴し、殊に目につく景山と呼ぶ皇城後方の築山に、樓臺參差丘山疎林の間に、畫の如き畫閣の立てる、はた其の前に連なる皇宮の大建築、屋瓦黃紬を施し、簷柱丹紅に塗りしもの、秋の日に照り輝きて、いとさらびやかに壯麗なり。天安門、午門の輪奐、保和殿、太和殿の結構、げに五十年前の昔なりせば、さすが大帝國の首都なりけりと感嘆せらるべきも、今は國勢陵夷せるものから、幾分の減價を以て、見らるゝも口惜し。此の皇宮の幾多壯麗の建物の西は名にしふ御苑にて、南海北海など稱せらるゝ湖水あり。其が景山と相並べる所に月島といへるがあり、印

度式の土塔、日本には見ぬ式なるが屹として聳へたる、別趣の風致を添へてよし。これぞまづ城中の大觀なる可く、其の他所によりて親王府寺觀などの碧瓦の大屋ありて、また見ものなり。市中は秋立ちしとて別に外國人の目につく程の變化もあらず、例の臭氣近づく可からざる底の豚漢、おし合ひへし合ふのみなり。去つて外城に至り見よ、まづ先づ農壇の西なる陶然亭に登らん。亭は白居易が『更待菊黄家釀熟、與レ君一醉一陶然』といふ句によつて名付けられしものにて、四面葦澤を以て圍まれ、秋ます〳〵閑なるに及んでや、黄穗風に戰ぎて滿目皆是れまた他物なきところ面白き景色なり。然り秋とはいへど、野外別に紅葉するの木あるなく、萩の花咲き亂るゝの幽趣無し。されば家々の籬落に見ゆる雁來紅や、日まはりや、ねなしの類を初秋に見るの外、日本にて紅葉をもてはやす頃は何物も見るに値する無く、北清にいと多き柳の葉の黄ばみたりとて、少も趣味あるものにに非ず、唯だ此の葦の穗のみそ砂漠の中のヲーシスなれ。また此處を去つて金魚池のほとりに行けば二三の古柳の下、方十間位の碧池相接し池塘を行き行けば、萍邊に浮き寄る寸餘の金魚幾十、此の地にもまた斯の如きものを養ふものあるやを感ぜしむ。これ養魚池にして此を捕へて市中の緣日にビードロの丸瓶に入れて賣ること、日本と異ならず。

更に城外に向つて秋色をたづねん。まづ竿を西郊に曳けよ、蹇驢に騎して詩人氣取の風流にて西使門外に出づれば、野は浩々たる大野にして島國人の夢想にも及ばず、高粱の刈られたる、玉黍の幹を馬にひかせたる、畔に這ふ紫や紅の朝顔の野生したるもゆかしく、嫁菜花の、こゝのも日の本のと同じく咲ける哀れなり。門を出でて六七町、北清道士の總本山たる白雲觀に入れば、道德世に高かりし元時の道人邱長春が遺骸を葬れる所とて、建築宏麗なり。邱が墓は寺門を入ること二つ目

の殿内に古雅愛すべき葡萄の根にて製せる大鉢、今は賽錢箱となれるが安置しある下にあり。此處こそ彼の山東の偉人が蒙古の大漠を渡りて、印度ヒンヅークーシュの溪畔に成吉思汗と相見えて、其の教を授け、還りて此地に止り、長く道俗の渴仰を得し其の魂魄の埋まる所なれ。此の觀の後方には名高き庭園あり。奇石怪岩をつらね、之に亭榭を立てゝ趣をそへ、屋壁につたはる蔦の紅葉なすもいと嬉しく本槿、菊、桂花（日本でいふモクスイ）又はシャボテンなどの盆栽いと多く陳列され、北方式庭園の最好模範と稱せらる。あゝ然るに慨嘆す可きかな、此の後園先年よりロシャの露清銀行北京支店長ポチゴロフの占むる所となり、時によりては客入る可からずといふ張札あるを往々なり。彼は是に在つて道士の長に賂ひ、以て西太后に近づいて彼國の爲に利を謀るとぞ、實に淨潔を極めて支那には珍らしき此の觀を別莊視し、更に之を利用するロスケーが怪腕憎むべき哉、

北京の秋

こゝを出でて程近き天寧寺に至る、十三重の塔は巍然として聳え、隋代の遺風を存して古樸なる形式を有せり。佛体の彫刻壞れたるが多けれど尚見るに足る可し。其の直に前なる堂中に手のみ非常に大なる佛像あり。近年の作にて、いと拙劣なれど、下より錢を拋りて其の掌上に受けしむる、これも亦た子供らしけれど、なぐさみに拋る人少からず。此の寺は坊主少けれど、人を雇ふて植木屋を內職とす。いと廣き植木場あり、大小の鉢、うへもの、うへつけもの、又た温室もありて、餘程の利潤なる可しと思はる。それにひきかへ、本堂の雨に曝され風に打たれたるも其の儘なるぞうたてき。所有地も無く、極まりし檀家も無き支那寺のこととて、これも餘義なき譯か。

さらに阜成門、西直門の方に出でなば山骨あらはに兀として連なれる西山の麓、幾多の古寺舊觀と玉泉萬壽の好景とあれども又た筆を改めて記るす事とせん。

更にむさをかへ北郊なる安定門外の芝地の廣さに駱駝ひいてそを練習せしめ居る少童と語るもおかしく、黄寺に至りて其の頽殘のわはれを見、白石階のみ嚴として存せるに、兩三の小楊樹（楊は柳の類にあらず、柳とは似てもつかぬものにしていと、丈高くなる木にて、幹色白みがゝり、葉は大にして厚く、樫の葉の如きてりあり。邦人が楊柳とつゞくる熟字ゆゑ枝のさがらぬ柳にて、カワヤナギなりと思へるいと抱腹の至なり）黄ばみて半ば搖落せるさまなど、何國の赤髯にや、いと巧ならぬ水彩畫をものせるも興あり。ラマ僧の小さきが硝子製の小喇叭を吹きて、悲痛なる曲を爲せる、胡笳朔風の昔も思ひ合されて哀なり。

此を出で西北德勝門外の大道よりして蒙古に至り更に露領キャクタに至る大往來に出で見よ。道巾二三十間の所もありて、兩方の畑地より低く、恰も大河の水無きが如し。回々教人のみ住める馬店に至り、清眞寺裡に面貌白味を帶び、鼻の下方はいりありて、眼ハ蒼碧を帶べる回教僧に逢ひ、はた此の部落の何れも皆な中央亞細亞伊犂地方より移住し來りし者の子孫にて、詳看すれば、人種的區別を其の支那風の服裝の外に認め得るもおかしろく、寺中に藏する回々教典が悉く西洋風の表裝にて、粗ぼ西洋紙に書されたる蝸牛の跡かと見ゆるアラビヤ字に驚く可く、此等經典が遠く土耳古若しくは波斯より駱駝の背によつて此の極東の一地に致されたるを聞かば、更に驚く可し。此を出づれば間も無く元代城壁の遺趾なる土城關を見ん。今は疊みし煉瓦取り去られて跡方なく、只だ中につめられし土のみ丘の如くに連りて、荊棘其の上に生じたり。今大道の左手の突角に登れば、少しく煉瓦にて積たる趾の更に六尺程高さがあり。之に踞して遙に萬里長城のわる太行山脈の夢の如く淡さを望めば萬古蒼茫の感胸中に往來し、蓋世の英雄成吉思汗が韃靼の荒武者をひきゐて、秋高く馬肥ゆるの節、長城の間道を越えて中原に闖入し

十一人三四馬を率ゐて晝夜兼行飛ぶが如くに敵の虛をつき、城を屠り龍虎臺に旗をとゞめしをなど思ひ浮ばれつ、或は忽必烈が此のカンバラック（帝都の義）を築造して、威を世界に振ひ、空前絶後の大帝國を統治し、露人は其脚下に蹂躙され、伊太利人マルコポロが其の下に指役されし事などを思ふと同時に、今眼下に行く駱駝は露領に行く商品なるを思ひ、過ぎ行くラマ僧はヲロスの盛運を語りつゝ行くかと思へば、無限の感愴言ふばかり無し。此の蒙古へ通ずる大道は嚴冬盛夏を除けば通商の馬、駱駝、隊を作り絡繹として絶えず、牛皮の長靴穿てるモンクー人、手拭を頭に卷ける中央亞細亞人を見ることも稀ならず、長城遊覽の歐米人も少からず、北京附近要道の隨一なり。然も九分までが蝉斗を空中に泳がせし連中にて、オホウ、テルゝの馬追ひ聲も秋風に嘎れて情なく、京中には九ケ國の佩劍鏘々たるやからが、皇宮を睨視し西太后英語を學んで外國婦人に御世辭を蒔くとい

へる時節なるこそ、一葉落ちて先づ秋を知るといふよりは更に悲しけれ。夕陽西に入らなんとするや歸り來つゝ家路にいそぐ羊牧ひの誰れ彼れ、數十の羊群を鞭一つにあつかひつゝ、長煙管に燧石の火のあかく見ゆる頃、秋は何處も同じく哀れ催し顏なるが、更に其の國の秋と共に一しほの寂しさなり。

○

そんやう生

北京の友に送るとて、

思ひあらば、あらば取らんの筆しまづ、
異鄉の山の、ともすればの秋。

新刊紹介

教育學術界

▲手工科の理論及び實際　千葉師範學校教諭　中澤志郎氏著　中等教育「第二期」教育學術界叢書の一として、過日三版を出したる本書は、實に手工科の理論と實際とを網羅したる好著述なり。著者は平素の研究と經驗とを基礎として、本書を編述したるものにて、其の説明の周到なる、用意の懇切なる、實に教師たるもの必ず座右に備へざるべからざるの書なり。

▲訓練の原理及び方法　東京高等師範學校教授　中澤志郎氏著　小學校教育「第二期」教育學術界叢書の一として、過日三版を出したる本書は、實に訓練の原理及び方法を説明したるものにて、其の説明の周到なる、用意の懇切なる、實に教師たるもの必ず座右に備へざるべからざるの書なり。

教育實際界

▲我が國語教育　文學博士　芳賀矢一氏著　中等教育「第二期」教育實際界叢書の一として、過日三版を出したる本書は、實に我が國語教育の權威者たる著者が、多年の經驗と研究とを基礎として、我が國語教育の方針、目的、方法、教材、教授上の注意等を詳説したるものにて、其の説明の周到なる、用意の懇切なる、實に教師たるもの必ず座右に備へざるべからざるの書なり。

▲數學教授の實際　東京高等師範學校教授　藤澤利喜太郎氏著　中等教育「第二期」教育實際界叢書の一として、過日三版を出したる本書は、實に數學教授の權威者たる著者が、多年の經驗と研究とを基礎として、我が國數學教育の方針、目的、方法、教材、教授上の注意等を詳説したるものにて、其の説明の周到なる、用意の懇切なる、實に教師たるもの必ず座右に備へざるべからざるの書なり。

▲手工科の理論及び實際　千葉師範學校教諭　中澤志郎氏著　中等教育「第二期」教育實際界叢書の一として、過日三版を出したる本書は、實に手工科の權威者たる著者が、多年の經驗と研究とを基礎として、我が國手工科教育の方針、目的、方法、教材、教授上の注意等を詳説したるものにて、其の説明の周到なる、用意の懇切なる、實に教師たるもの必ず座右に備へざるべからざるの書なり。

發行定價五拾錢（〒）

取次所　東京神田表神保町六番地　光風館書店
行所　東京神田裏神保町六番地　光風館書店

會員業績帖

▲我が吳文山會員には今度入會せられたるに、我が部下の會員たる、滋賀縣栗太郡上田上村尋常小學校訓導、伊東參一郎子と、奮つて續々入會を勸誘あれかし。（滋賀縣栗太郡上田上村尋常小學校訓導　伊東參一郎子）

▲交際　我が吳文山會員には今度入會せられたるに、我が部下の會員たる、滋賀縣栗太郡上田上村尋常小學校訓導、伊東參一郎子と、奮つて續々入會を勸誘あれかし。（滋賀縣栗太郡上田上村尋常小學校訓導　伊東參一郎子）

會員來書帖

▲希望　私は第一期に於て會員の一人でありますが、一寸記者の方へ一言申上げます、あの本誌の後に附記してある質疑と解答とは、成るべく多くの會員の御參考の爲めに、成るべく多く掲載せられんことを希望します。

▲應問　一、宮城縣　中學二年の程度では無理です。他に講義と申して、一年なら中等卒業の程度です。

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

▲東京　生等に取りては不幸極まりなく、第二期に於ては永く會員欠課にて修身、第二期に於ては未だ一度も數訓を受けず、

▲東京　小倉某（▲年程經過ながら左に一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

▲廣島縣　尾道市　同　一年なら中等卒業の程度です。

▲宮城縣　二、中等教育の雜誌中英語解釋の要は生等の好參考、乞ふ以後、一英語科に何本位の雜誌を讀めば、英文典の講義や御講話下さるに出來ますかゐ。

▲靜岡縣　三、十一月中旬發行の第二期講話に記載ある澤山御揭載あらんことを、一日も早く御揭載を願ふ。

（靜岡縣　沼津　高等小學校訓導　鈴木重雄）

無蓋の蓄

無名氏

秋と冬

秋の季節は黄葉白雲とともに去らんとして、冬の節季は北風霜雪とともに來らんとす。春去り夏の苦熱に心身ともに倦み疲れしも思へば夢なれや。

蟲聲唧々秋夜悲しと。白露千草の葉に滿ち、月團々として天上に澄み渡る。或は近く。或は遠く耳もとに聞ゆる、さゞめの音、近さわたりの波濤のそれなるべし。

颯々として聞ゆる物れと、さながら自然の音律を爲せるは松風の聲なるべし。あはれ、松聲濤音！しかして、足下に聞ゆるものは、即ち虫の諸聲なるべし。鈴虫、松虫、蟋蟀。虫のさま〴〵己がじし鳴く音は優しく麗はしく、宛然、自然の音律をなせども、その聲一たび人耳に響きては世にも悲しき聲音となる。不思議ならずや。

この秋は
　水か嵐か
知らねども

今日の務めに田草取る也。

聖書に曰はく「神は罪人に聽かず。然れど、神を敬ひて其の旨に遵ふ者に聽きたまふ」と。あはれ

一日の勞苦は一日の安寧を持ち來す。かくして日また日、日は積りて月となり、月重りて年となり行く。一日の勞苦を敢てするは神の旨に遵ふ所以にして、その一日の安寧を持ち來すは、これ神のわれに聽き給ふ所以にあらずや。しかれども人の行路短きが如くして、しかも長し。一途に思ひを未來に馳せ、空しく齷齪としてあらんには、人夫れ何處に休息のところを見出し得んや。かるが故に曰はく、一日の勞苦は一日にして足れりと。夫れ寸重りて尺となり。尺集りて丈となる。一日の勞苦を一日にして足れりとし、日を追ひて怠なくば、人遂に終生の安寧を得ん。要するに人生に必要なるは今日なり。「この秋は水か嵐か知らねども、今日の務めに田草とるなり」。詞短く意長きが如しと雖も、これ要するに一日の勞苦は一日にして足るべきを敎ゆる福音にして、一日の安寧を與ふる所以と告ぐる敎訓なるに他ならじ。

行く秋のおはれ、いとゞ心に切なるは、われも人も同じかるべく、秋ゆいて冬來る、おはれは愈〻切なるべし。されども、かゝる悲寥の秋も冬も、務めて怠らぬ人々には安息と收獲とを與ふるなるべし、しかして常に怠れる人々には齷齪と失望とを來すことなるべし。

聖書に曰はく、神の國は飮食に非ず、たゞ義と和と聖靈によれる歡樂に在りと。あはれ、一日の勞苦、一日の安寧。味はひ來れば詞意深し。しかして此の心を心とせる人々には、秋と冬とに對する興味いよ〳〵深からん也。

一意專念

騷がしき世ならずや。煩さき世ならずや、新しき出來事は刻々に生じ、新しき誘惑は時々に生じ來るを見ずや。限りある頭腦、限りある智惠を保てるわれ等、遂に能く此の時々の誘惑に打ち勝ち、刻々煩瑣の出來事に一々應じ得べけんや。夫れ二點間の最短距離は直線なり。人間の一生を

その最短距離に依りて歩まんとせば、たゞ一直線に進むあるのみ。而して人間の一生を一直線に依りて進むべき出發點は生にして、到着點は即ち死なり。生を出でゝ直ちに死に歸す。これ人間の一生を一直線に最短距離に依りて進みしものなり。しかも之れ最も無意味なる人間の一生なり。何を以つて無意味なりといふ。人間この世に生るゝ、各自一個の使命を持して此の世に生るゝなり。この使命の債未だ果されざるに、その生死を苟くもするは、これ自ら人間を蔑視するものなり。

世には往々にして、人間の一生を一直線に最短距離に依りて進むものあり。即ち自ら人間を蔑視し、各自の使命未だ果たされざるに、生死を苟くもするものあり。その因つて來るところ、各自同じからざらん。されども、自らを持すること輕忽にして、生と死とを視ること甚だ重からざるの責めに於いては即ち同じ。

說いて云ふものあり。人間の一生に二個の大なる出來事あり。その一つは生にして、その他は死なりと。然り、生と死とは人間一生に於ける二個の大なる出來事なるべし。されども、生と死とが人間一生の大なる出來事なるべき所以のものは、生死の間に繫がるゝところの意味極めて重く、極めて大なればなり。即ち生より死に至る間に於いて、人間の此の世に處すべき使命、極めて重且つ大なるものなればなり。されば生死を蔑視するものは、取りも直さず人間の使命を蔑視するものに他ならず。

果して然らば人間の使命とは何ぞや。人間この世に生るゝ、その分に應じ、各自一個人として其の自らの本分とするところに向ひ、一意專念、以つて進むところ無からざるべからず。これ其の使命の一なり。人間この世に生るゝ、決して單獨なること能はず、必ずや相關係するところあり。即ち人間は一個人として此の世に立するとともに、自己以外に關係するところのもの無かるべからず。

即ち父母あるべし。兄弟姉妹あるべし、大にしては自己と國家と繼がるゝところあるべし。されば人間は自己の本分とするところに一意專念するとともに、これ等相關するところに向ひても、夫れ〳〵忠恕ならざるべからず。これ其の使命の二なり。その他尙はあるべきも重且つ大なるものは即ち以上二大使命なるべし。

この大使命は、繫つて人間生死の間にかゝはる。これ生と死との人間一生に取りて二個の大なる出來事なる所以にして、而かも、かゝる絕對、相對あらゆる關係によりて、生より死に至る人間の徑路には、煩瑣多樣の出來事生じ、誘惑生じ、その限りある頭腦と智慧とは、時々刻々煩はさるゝところとなる。

然りと雖も、退いて思へば、かゝる煩瑣多樣の出來事と誘惑とは人間の試金石なり。彼の艱難汝を玉にすと云へる亦た此の意味に依りてなり。而かも一意專念するにあらざるよりは、人間は遂に此の煩瑣の多事に對して試金石たるに堪ゆる能はざるなり。

彼の人間を蔑視し、人間の使命を蔑視し、生命を視ること輕忽なるものに對しては、生死遂に人間の二大出來事とするに足らぬとともに、彼等は生死の間を完全に直線に歩めるものとはいふべからざるや論なきなり。

新刊紹介

▲七草集（草村北星氏著）　「若き理想」「田舍生活」「故園のうれひ」「手と手」「縒り糸」「暮愁」「糸萩」以下數十篇の美文。これは著者が多年の間にものされたものであつて、それを今こゝに集めて、體裁の美しい見事な册子に編み、今度新たに發行したものが、この「七草集」である。全體を通じて文體は言文一致。仲々面白く捨て難いものが仲々に多い。詳しくこゝに評を加へる餘地のないのが誠に殘念である。（定價金六十錢、東京日本橋金港堂發行）

眞の人間

市野虎溪

およそ世界の人類はと生眞面目に出發るほどの事でもないが、先づあらゆる人間を二種類に區分することが出來やう、と書き出したら、恐らく氣の早い讀者は、人種學のお話でも始めるのかと言ふであらう、なれど、僕の話は其樣な面倒臭いことではなく、早い處君と僕との間にもこの分類がチャンと成立して居るといふのだ。曰く眞の人間と僞の人間。

何！僞の人間。ぢや君は僕に擬するに僞の人間を以てせうとするのだな、失敬な！、如何にも人類はダーウヰンが出て詰らぬ贅辯をきいた爲に、猿公の後胤とまで相場が下落したが、まだ有難いことにはお互に尻尾も生へて居ない。勿論洋の東西で色に黄白の別はあらう、が、全じく橫目縱鼻の眞人間ぢやないか、其れに眞と僞を別つ理由は如何に、是非承はりませうと來るだらう。イヤサ來なくともだ、是非聽いて貰はにやならぬ。

成程世の中を見渡せば、人間に似た動物がゾロ〳〵ウヨ〳〵、さても夥しい數だわい、が、これが果して眞の人間といふものであらうか。彼等は幸にもこの社會に生れ遇はして、丈夫な腕脛を親から貰ひ、相應に金儲けもすれば、勉强も出來る飯も食へば酒も飲む。併し人間といふものは、飲んだり食つたり寢たり起きたり饒舌つたり笑つたりで能事了るのであらうか。なにも生きてるのが惡いといふのではない、又飯を食ふのを咎めるのではない、唯彼等の如く木偶の樣に働き、機械の樣に働き、蛆虫の樣にうごめいて居て、何が何やら一切無我夢中で、音もなく生れて來て、音もなく往生を遂げるといふのが僕の氣に入らないのだ。醉生夢死、これがかゝる人間の常態である。これが眞の人間であらうか、又社會が要する人間であらうか。

諸君は僕の言葉に疑あらば、試みにこの人間の面を下げた奴をつかまへて、下の樣な質問を放つて見よ、曰く、汝は何等の要あつて現世に生れて來たか、何の爲に生きて居るか、何の爲に働きつゝあるか、と。これに明答を與へ得るもの果して幾人あらう。およそ世の中に、何が意氣地がないといつても、自分が何物であるか、自分が何事をすべきであるか、又、自分に何の爲に其樣な事をするのかといふことを知らぬ程愚なことはあるまい。若し人が路人に向つて「僕は何處へ行くのでせう」と問はゞ、愚と呼び狂と罵ることを誰でも知つて居るのであらう、が、其の知つて居る御當人が、自己の何物たるかも、自己の理想も目的も知らぬとは、イヤハヤ、是れで人間で御座るとは誰が許しても猿共の方で承知すまい。

併し古往今來幾億萬の人類中にはさすがに眞人間もありましたね。往昔ギリシャのソークラテースなどは旨い事を言つて居る、其れは彼れが常に人に向つて說いたといふ「己れを知れ」"Know thyself," といふ語だ。己れを知れ、實に人を警策する善い語ではないか、己れを知るのは總ての事を知るの初めでなければならぬ。其れは恰度己れに克つのが總てのものに克つ初めであると同じ道理だ、が、己れを知るのは存外、むつかしいかして、口先ばかりのお利口連が、高慢チキな事を饒舌つて居るが、自分の足元は根ッから不知案內だ。

左樣「己れを知れ」とばかりぢや合點が行くまい語を換へて見ると、大に自覺心を發揮せよといふことだ。自覺心、是れが人間の部類分けの標準だらうと僕は信ずる、で、人の人たるべきは、知識も、財產も、名譽も、何も要つたものではない、イヤ其樣な者は自覺心あつての上の景物見た樣なもので、決して人間の誇りとするに足らぬ。知識とは何だ、衣食の道を敎へるに過ぎないではないか。財產とは何だ、居て食ふ爲の贅澤品ぢやないか。其樣な財產や知識なら空を翔る鳥、海に

潜む鱗介は無盡藏の富を有し、又寒暑を防ぎ起臥を安くする抜目ない知識に於いて彼等は、一歩も人類にひけを取らぬ。かの基督がソロモンの榮華の時さへ野に咲いた百合の花にも及ばないと言つたのは此處だらう。人間がまだ智に誇つたり、榮華に誇つたりして居るうちは、到底一木一草に對してさへ顔色なしと謂ふべしだ。

自覺心、それあればこそ世界に我れといふものがあることが分るので、取りも直さず自覺心は自然人から眞の人間に生れ返つた最初の時だ、僞人間が眞人間に抜け返つたのだ。己れは人である。獨立自由の人である。唯他に無關係な、一人ぼつちの人間でなく、社會や國家の首石であると合點が行くので　自己の天職も、本務も、目的も、理想も心の鏡に映つて來るのだ。自覺心のお留守な奴と來たら、箸にも棒にも懸つたものでない、先づ自分が人の子たることを忘れて居るから、親に不孝をする、自分が日本國民たることを忘れて居るから、露國の探偵となる。又自分が一少年に過ぎぬをを忘れて居るから、「人生不可解」なぞと熱を吹いて投瀑なぞといふ結果になる。又々もつと甚しいのと來ると、己れの人間であつた事さへ忘れて了つて、否知らんで禽奔獸行をして居る。

斯樣述べ立て來ると、僞の人間といふのは、無智蒙昧とか人面獸心とかいふ樣な意味と間違ひ易い、が、その樣な例外の場合に就いて言ふのではなく、御同樣に眞面目に、息才に、活動して居る人間の中に、この模型の人間がどつさりあるのだ活動！これは人類の生命であつて至極結構の事だが、活動にも自覺心の伴ふものと否と二種の別がある。苟も人類として自覺心のない無意味な活動をして居る以上は縱令彼等が何樣な仕事を爲たからと言つて、蠶が繭を造り、馬車馬が車を引張るのと毛頭差別がない。この種の活動は本能がさせるのである。自然の要求がさせるのである、是れは動物的活動とも謂ふべしで、眞人間のすべき活

動ではない。

そも〳〵眞の人間の活動は、理學者が「人若し足を擧げて大地を蹴れば震動が全地球に達する」と言つた樣に、其の一言一行は、宇宙の大勢力となつて顯はれるのである。斯う言ふと惡い習慣で直に震天憾地的のボナパルトや、豐太閤なんどの僞英雄の事業を想起させるが、僕は其樣な賣藥の廣告然たるをを言つて諸君を釣らうとはせぬ。近い例を取つて言へば、農夫が鍬を下す時に、商人が二一天作を彈く瞬間にも、彼等が頭の中に、其の行爲が社會的世界的の關係を保つ居るものであると自覺して爲たならば、これこそ偉大な世界的の事業ではないか、この處で想ひ出したが、カーライルに就て此樣な話がある。彼れが書齋に閉ち籠つて例の如く小むつかしい哲學をひねくりまわして居た時に、ゆくりなくも檐を傳つて響く力のない眠たさうな指物屋の丁々といふ槌の音を聞いて「アヽあの一打ちが十錢を破つたわい」と言つた。これは指物屋の頭には此槌の一打ちが、大千世界にまで影響するのであるといふ世界的精神のない事を嘲つたのであらう。

だから僕は強ちに諸君が孔子やソークラテースの如き偉大な人物となれと責めるのではない、唯世界の精神と我々の勢力とは融會して居る、社會勢力と我々の勢力とは氣脈を同うして居る、否其樣な間接な關係でなく、我々の思想が即世界の精神活動となつて宇宙に瀰蔓するものである。我々の行爲が社會の勢力となつて四海に溢れるのであるといふことを自覺して、自己の天職に忠なるものならば、筆を執つて世に立たうが、鍬を持つて南畝を耕さうが、何等の業何等の事を爲すとも、高き人格の人、神樣の造り給うた理想に叶つた人として尊敬するをを躇躊せぬ。是れこそ僕が要する所の、又社會が要する所の眞の人間であつて、彼等の手に籍つてこそ始めてこの世界を大理想に向つて轉進せしめることが出來るのである。

新刊紹介

▲**西洋哲學史**(上卷、文學博士大西祝氏遺著)　これは故大西博士が生前早稻田大學で講ぜられたものであつて、この上卷には希臘哲學の原始から中世哲學の末までが掲げられてある。博士が如何に博學の人であつたかは、既に治ねく世間で知つて居るから、こゝに辭く述べぬが、この書文章精緻を極め、批評は嚴密でよく原學說の眞意を悟へてある。まことに我が『思想界の寶玉』といふべきである。最後に附け加へて置くが、これは『大西博士全集』の第三卷であつて、第一卷の『論理學』、第二卷の『倫理學』は既に發賣され、非常の歡迎を讀書社會から受けたのである。(定價金二圓六十錢、東京々橋尾張町二丁目警醒社發行)

▲**奉公訓話**(下平糠堂氏編)　本書の內容は讀始め、正直、從順、勉强、儉約、言語等十三章に分かたれてある。文字も文章も平易であつて、悉く振假名附きになつて居るから、此書の名に負かず諸種の奉公人をはじめ、各家庭に於ける修身上の讀みものとして最も適當であらうと思はれる。殊に其の編輯法の斬新であるのは最も妙である。(定價三十錢、神田裏神保町光風館發行)

▲**法制一夕話**(法學士桐生政次氏著)　名の通り法制に關する談てのことを、殊に國民の是非知つて居らねばならぬ法制の一般を最もやさしく言文一致体で記述したものである。大体より云へば法律、制度の二編に分かれ、法律編のうちは、生命と秩序法律と秩序、國家と行爲等八章に、制度編のうちは君主、國務大臣、議會以下六章に分かれてある。(定價金三十五錢、神田裏神保町富山房發行)

▲**新潮**(尾崎紅葉氏編)　これは今や病褥の中に在る紅葉氏がその病を推して編輯した今人の類題俳句集である。取り分け本書の嶄新なところは、新たに種々の季を附け加へたことである。紙質印刷、体裁ともに頗る善美を盡して居る。まことに其の名の新潮に負かぬ句集である。(定價廿八錢、同上發行)

▲**俳句大觀**(數人、大羽兩氏編)　縮きに、春、夏、秋の三部が出たが、これは『俳句大觀』最後の卷、即ち冬の卷である。前に紹介した『新潮』が今人の句集であるが如く、この『俳句大觀』は古今の類題句集であつて、新題の足らざるは今人の句に依つて補はれてある。(定價三十錢、小石川武島町廿一美育社)

▲**食用作物栽培要說**(農學士原田友作氏著)　各作物の性狀、利用と效能、適地と氣候、栽培法、肥料、貯藏、種類、病虫、栽植要件の九章に分かち、各作物の一々につき多く得難い繁簡要を得た說明が加へられてある。家庭の書物としても、植物學の參考書としても有益であらう。猶ほ卷末に詳しい見出しのあるのは親切である。(神田裏神保町富山房發行)

▲**マアテルリンク物語**(正宗白鳥氏編)　白耳義の沙翁と呼ばるゝ現代の作家モウリス、マアテルリンク氏の劇詩のうち

「マレイン王女」「ペリアスとメリサンダ」「侵入者」「群盲」の四篇の梗概を面白く書きつゞけたもので、『通俗世界文學』の第七編として發行されたのである。面白き挿畫いくつもなく挿まれ、体裁も仲々立派である。(定價二十錢、同上發行)

▲**春花五大力**(宮崎三昧氏校訂)　『名著文庫』第十卷として發行されたのが之れである。この『春花五大力』といふのは、寛政七年鹿木五瓶といふ人が作つた戲曲で、有名なものである。この度宮崎三昧氏の嚴重なる校訂を經、その上巻きたるしの當時の似顏まで添えられてあるから、一輯讀一番すれば自から當時を忍ぶよすがともなれること、思はれる。(定價二十錢、同上發行)

▲**新算術**　▲**物理學**　▲**農業一班**　以上三書は、いづれも言文一致普通學全書の一冊である。このシリースの特色は小學校卒業程度の力で容易に理解し、獨習の出來得るよう極めて平易巧妙な言文一致で書き綴らるゝところにあるので、取り分け『新算術』には附錄として杉算、珠算、油分くる算、その他町づもりのこと、歩數に由て距離を知ること、英文問題、外國貨幣、度量衡等を添えてあるのは親切である。尙ほ『物理學』には種々の精巧な挿畫が入つて居り、『農業一班』には害虫驅除法、肥料取締法、農會法等が附錄として添えられてある。ともに例の富山房の發行である。(定價各二十錢づゝ)

▲**偉人論**(文學士大谷正信氏譯)　これは米國の文豪として有名なるラルフ、ワルド、エマーソン氏の『レプレセンタチーヴ、マン』の一篇をば、大谷文學士が逐字譯を試みられたものである本書譯文の不足を補ひ、原文研究の資けにする爲め、一々頭註の加へられてあるのは、頗る親切なことである。こゝに未だ原文を讀まぬ人々の爲めに其の目次を紹介すれば、偉人の用、哲學者プラトー、神秘論者スヰデンボルグ、懷疑論者モンテイス、詩人シエークスピア、時流の人ナポレオン、記者ゲーテ、以上である。本書の文体は平易な言文一致。(定價五十五錢、京橋銀座一丁目大日本圖書株式會社發行)

▲**將來の活動界**(成功雜誌社編)　これは日本民族、將來の活動界たる合衆國、布哇、支那、遲羅、臺灣等の詳しい案内を記したもので、一周年紀念號の『成功』の附錄である。頗る有益也。(本郷弓町二丁目八番地成功雜誌社)

▲**太日本と露西亞**　雜誌『青年界』の臨時增刊である。時節柄一讀の値がある。(定價三十錢、日本橋本町三丁目金港堂株式會社發行)

明治の文豪

故尾崎紅葉氏

一　露　子

死なば秋、露のひぬ間ぞ面白き。その秋雨のきのふ今日、菊の雛に露面白き十月三十日の午後十一時十五分といふに、紅葉山人尾崎徳太郎氏は溘焉として長逝したのである。わが會員諸子にも定めて新聞紙を讀まるゝ人があらう。その新聞紙の多數が、その翌本月一日の紙上に少くも一段、多きは二段以上にも渡つて氏の生前、永眠當時の摸樣を委しく報道し、且つ辭のあらん限、その長逝を悼んだことを記憶せらるゝであらう。本會員のうちで時折小説類を繙く人々は格別、その他の人々のうちには或ひは其の故を怪しむ人があるかも知れぬ。

故尾崎紅葉氏は何が故に斯くまで其の死を人々から惜しまるゝようになつたか。それは、氏が其の職とするところに最も忠實であつて、しかも不

幸短命にして逝いたからである。

紅葉氏の逝去を報ずると同日の『國民新聞』紙上で、徳富蘇峯氏が故中村敬宇の文を論じた中に、敬宇氏の力行不息の精神は、その一生を貫徹して居る、而して此の『敬宇文集』を心して讀まば、自ら氏が力行不息の精神を窺ふことが出來るのである、と云ふようなことが記されてある。ところで此の紅葉氏も實に其の一生（一生と云つても僅かに三十有七年！何と短かき一生では無いか）を通じて、その職とするところに向つて力行不息、即ち絶えず猛進し、倒れて後已むの覺悟、精神を保つて居たのである。これが即ち紅葉氏の以つて摸範とすべきところであつて、紅葉氏が其の名を成し、死して後まで世人から惜しまれた所以なのである。われ等が爰に本誌の卷頭に氏の畫像を掲げたのも、爰に氏に就いて云々するのも、唯だ此の意味に他ならぬ。

然らば氏が天職として居つたのは何であつたか

曰く文士。

文士と一概に云へば、未だ文學趣味の普及せぬ今の世の中、殊には昔の所謂武士的教育のみが深く頭腦に浸み込み、詩を作るよりも田を作れといふ主義が、その胸の何處へやらに潜んで居る師長父兄の未だに少なからぬ今の世の中に、怪しからぬ職業と眉を蹙める人々も多いことであらう。けれども此のような思想を保つて居る人々は、既に時勢に後れて居る人々である。少年有爲にして、これから世の中へ進み出づべき我が會員諸子に於いては、決して深くこれを念頭に置くべきでは無い。諸子、考へて見給へ。彼の露西亞のトルストイ伯。（この人の名は恐らく聞き及ばれたことであらうが）、彼も文士である。しかも、その胸に炎ゆる眞理の焔は、その鐵筆に注がれ、一たび走れば小説となり、論文となる。而して歐米諸國は勿論のこと、わが東洋にまでも其の著作物は愛讀されて、その思想に感化さるゝもの、その文章、結構

を味はふ人が多いでは無いか。わが尾崎紅葉氏も此のトルストイ伯と同じく文士である。

否。諸子も知らるゝ如く、世に文士と云はるゝ人々今日仲々多いが、紅葉氏の如きは、その文士中での文士である。本會の講師坪内博士と列を同じうすべきとも、決して後に落ちぬ文士である。こゝに明治の文豪と掲げたのも、それ故なのである。紅葉氏と坪内博士。勿論、同じ文士と云つても其の志すところ、主義とする處が違ふ。が、それは爰に云ふべきでない。

ところで紅葉氏は文士として如何なる功績があつたのか。これも我が中等教育の程度に在る會員諸子に説明するのは少し時期が早い。で、あるから、詳しく云ふことは出來ぬ。が、第一に、文章の鍛錬といふことに殆んど寢食を忘れた人であるといふことは確かである。第二に時勢の推移といふものに能く注意し、その時代の人情風俗を出來得る限り詳しく、出來得る限り美妙に寫そうと精

根の限りを盡じた人であることも確かである。しかして、氏は立派に此の二點に於いて成功し、決して他の人々の眞似ることの出來ぬ技倆を發揮したのである。されば、氏は明治の文章と小說とを進歩させることに於いて、他の知名二三の明治の文豪とともに『明治文學史』の中から決して忘るべからざる人である。

本誌は文學雜誌で無いから、文豪としての紅葉氏に付いて述べることは以上に留め、更らに聊か氏の人物に就いて記して置かう。

* * * * * * *

紅葉氏は文士として幾多の門弟がある。その門弟のうちに、今は殆んど氏の衣鉢を傳へるに足るものもあるようだ。が、氏は此等門弟等に對して最も嚴格であつたと同時に最も深切であつたのである。それは氏の門弟が氏を見ること嚴父の如きと同時に、深く其の德に懷いて居るので判かる。氏の門弟の一人は氏に就いて斯う語つて居る『師は正義を尊んで、非常に虛僞を憎んで、同情に富んで、愛情が深くて、能く勤め能く遊んで、禮容を重んじて、交際に巧みで、義理に堅く、家庭が圓滿で、談話に長じて趣味が深い云々』

氏は實に交際に巧みであつた。されば、その交友のうちには政治家もあれば學者もあつた。老人もあれば青年もある。しかして、今の文士の殆んど其の總べてを擧げて氏の知己であつたのであつた。しかして、その長とするところの談話は、半日にして盡きず、一日にして盡きず、否、興に乘ずれば徹夜も更らに辭さなかつたほどである。されば此の度氏の逝去を耳にした交友の總べては、此の文豪を失つたことを悲しむと同時に、談話の好敵手を失つたことを悲しむことであらう。誠に氏の談話は其の文章の如く、自然のうちに洗練されたものであつて、しかも多方面の話題に渡り、滔々幾萬言水の流るゝ如く口を突いて溢れ出づるのであつた。尠さに我が中等教育第一講話會の催

された折、紅葉氏も其の快辯を振つて一場の講話を試みらるべき筈であつたのに、故あつて其の事なく、爲めに我が會員諸氏にして、親しく氏の風丰に接し、その輕快の談話を耳にするの機會を失せしめたのは返へすゝも遺憾である。

また氏は、まことに其の門弟の談話の如く、交際上手であるとともに多趣味の人であつた。即ち弓術、玉突、遊獵、寫眞、これ等は氏が本務の餘暇の全力を注いだもので、彼の何事にも銳意研究の志が深いところから、斯れの道に於いても殆んど其の蘊奥に達して居つた。また彼の俳諧、書の如きは、文豪たる氏の餘技として見るべきものであらうが、餘技であるとすれば、その本職の人を凌ぐこと甚だ遙かなる點に於いて、これまた世人の深く敬服するところであらう。

若し夫れ氏の閱歷に至つては、既に新聞紙上に詳しく出で居ることであるから、こゝには重復を厭ふて別に記さぬ。

故尾崎紅葉氏　故片岡健吉氏

あはれ、死なば秋、露のひぬ間ぞ面白き。この一句を歸らぬ世の形見として十月の月方に暮れんとする前一日の最も晨に近き頃、癌腫の疾に歸らぬ旅に赴いた紅葉氏の遺骸は、その生前の遺言に依つて翌日東京大學醫院に解剖に附せられ、越えて一日、その血族、親戚、友人、門弟等に送られて、青山墓邊の土に化すべく、盛大なる葬儀が行はれたのであつた。

あはれ三十七年の短生涯！　天は何故、この文豪に餘命を藉さなかつたであらうか。けれども、この短生涯のうちに作された文士としての事業は此の世の限り、永遠に殘るのである。その功業は永遠に傳へらるゝのである。さらばよ、死なば秋、露のひぬ間ぞ面白き。

政界の名士

故片岡健吉氏

不紡生

年寒くして凋離菊老いたり。北邊雲さはいで將星頻りに飛ぶ、是れ果して何の兆ぞ。

明治三十六年十月三十一日、衆議院議長正四位勳三等片岡健吉氏逝く。實に明治文壇の明星紅葉山人尾崎德太郎氏が永眠の翌日に當る。宿世何の緣ぞ、相見て幽冥何の感かある。悲哉。

氏は天保十四年十二月廿六日高知城下中島町に生る。文久三年二月土佐藩の奉行となり海防の事に任じ、明治元年東征の役起るや藩の大軍監を以て參謀となり東北の野に轉戰し殊功あり、中老格に進み賞典祿二百石を賜ふ。明治四年大政官の命により海外視察として米より英に入り、倫敦に滯在一年巴里を經て歸朝し海軍中佐に任ず。明治七年征韓論に破れて西鄕板垣等蹴然廟堂を去るや氏もまた加はる。尋いで板垣伯を輔けて自由黨を組織し、二十三年國會の開設と共に高知縣選出議員として議場に列し、爾來一度も落選せず。廿六年には衆議院全院委員長、廿七年には副議長に、三十一年には遂に選まれて衆議院議長に任じ、爾後引續いて議長の席を去らず、內外の聲望隆々として政界に聶く。本年三月胃を病んで經過甚だ宜しからず、鄕里に歸りて靜養し居りしが、遂に今回の恨事に接せり。享年六十有一、危篤の報九重に達す。陛下震悼特旨正四位に敘し勳三等旭日中綬章を賜ひ、特に菓子料として五十圓を賜ふ。

氏爲人溫厚篤實夙に君子の風あり。早くより基督敎を奉じて造詣する所甚だ深く、信念牢乎拔くべからず。三十四年十月日本基督敎大會に於いて傳道局總裁に推戴せられ、三十五年一月東京神田青年會々長に推選せられ、同年三月同志社々長並びに大學校長に推さる。あゝ混濁の政界氏に負ふ所多かりしに一朝溘然として天國の人となるいたましい哉。（本誌第五號「人と說話」參照）

布哇雜話

梅村

布哇の發見——布哇史の第一頁——布哇の位置——布哇の土人——布哇の過去——ホノルルの模樣——キャピテーンクークの——花の布哇——街の模樣——土人の性質——產物

布哇（Hawaii）は歐羅巴人から『地上の樂土』（Earthly Paradise）と呼ばれて居る。

それを何故かと云へば、氣候が年中一樣であり、風景が實に美しいからであつて、斯く風景佳絕にして、氣候の一樣なところは、此の地球廣しと雖も、左程餘計に見出し得ないからである。否、かゝるところは、容易に、他に見出し得ないからである。

既に布哇といへば、必ずホノルル（Honolulu）の名を聯想して來ることであらう。

このホノルルこそは布哇群島中の一なるオアフ（Oahu）と呼ばるゝ一つの島の都であつて、實に紀元一千七百七十八年にキャピテーンクークに依つて發見された島なのである。が此の布哇全島の見舞はれたのは、紀元一千五百五十五年のことであつて、その人の名はジュアンゲータノ（Juan Gaetano）。

この群島に、何時のころ初めて人が住むようになつたか、それは甚だ詳かでない。けれども、此の地の傳說に依ると、何んでも餘程早い昔のことであつたらしい。そこで或る人は、或る說を根據として、紀元前五百年ごろ此の布哇群

島に住民が出來たのであると主張して居る。但しこれとても、必ずしも確かに信用すべき說とも思はれぬ。

それは兎に角、布哇の眞の歷史の生れ初めたのは、紀元一千七百三十六年、カメメハ第一世といふ王（King Kamemeha. I）が誕生した以來のことである。それで、いろ〳〵の形を作した十個の島がある中、八個だけに人が住つて居り、布哇は其の中の最も大なるものである。キャプテーンクックは、サンドウキッチ卿の名に因んで、これをばサンドウキッチ島（Sandwich Islands）と名付けたのであつた。

この島の位置を云へば、サンフランシスコからは二千七百マイル以內に在つて、シドニイ港の東北五千マイルのところに在る。要之北太平洋の中心の位置を占めて居るのである。されば、此の島が、いかに古昔の文明の中心から隔離して居り從つて近年まで、多く世の注意を惹くに至らなかつたかといふ、その理由が判ることであらう。

布哇群島は目今、亞米利加合衆國の領地になつて居て、此の群島の代議士はワシントンの議會に代表されて居る。

この布哇島の土人、彼の弱肉强食の結果、今日では甚だ僅かであつて、今は主として文明人が我れ顏に住つて居る。それに、新聞紙等で諸子も御存知の通り、我が國の移住民が仲々多く此の土に住つて居ることである。

この島、本來の土人といふのは、仲々野蠻な人間であつて、從つて野蠻な習慣があつたが、今日では殆んど全く夫れが排除されて居るのである。それで此の島の、その昔時の自治の有樣を云へば先づ王があり、種々の部落を支配して居る酋長がその下に幾人もあつた。その次ぎの階級が僧侶や醫士、それから平民即ち勞働者といふ樣な階級になつて居たのであつた。それで王は素よりのこと平民にして酋長となることも出來ねば、酋長が平

民になることも決して無かつたのであつた。

過去のことは先づ此の邊に止めて置いて、そこで此のオアフの面積は何れほどあるかと云へば、僅かに七百四平方マイル、全島の土質は全くの火山質で、その海岸の處々には珊瑚礁なぞもある。それで土地は概して肥沃である。

ホノルゝは此の島の南端に位し、全都樹木生ひ茂り打ち見たるところ、宛然、

山麓から海岸に連なる一平原のようである。それで氣候は概して、同じ經度に在る國々よりも涼しく、その差は十度ほどだといふことである。

布哇雜話

されば、此の布哇島の氣候は割合に涼しく、しかも土地は肥沃で、五穀が能く實る。何と、此の島は天より惠まれたるパラダイスではあるまいか。

住民のある八島布哇の面積は六千七百平方マイル、しかして、この最大なる人の世間で所謂布哇島は、その三分の一を保つて居るのである。で、こゝには世界の在りと有らゆる島に在るうちでの最高の山がある。

そこで、この島の都會ホノルゝといふのは、何のような處かと云へば、決して進步した商業的の

都會といふことが出來ぬ、けれども可成な商業的の都會であつて、仲々繁昌なことである。と云つて昔時の俤が悉く打破されたといふ譯でもなく、その往時作られた宏壯な建築物なども仲々殘つて居る。

キアピテーン　クークが其の往時この島を見舞つた時、當時の王は彼の頭上に美しい羽帽をいただかせた上、羽で作つた美しい衣服約そ七通りも與へたとのことであるが、カメハメ王の羽衣は、今日でも彼の地の博物館に保存されて居る。それで、斯く往時、羽を飾りに使つた習慣が今も殘つて居て、花は布哇人の主要なる裝飾になつて居るといふ次第。されば、土人のうちに特に花賣りといふものゝあるのは勿論、彼の地の勞働者なぞは勞働して居る間でも、首の周圍に花輪なぞを飾つて居るそうである。で、此の花輪の長さが、時とすると三フイート位になるほどのを作らへる。このような次第であるから、彼の地を見舞ふ旅人なそは、時とすると一驚を喫するまで、多くの花輪を贈らるゝことがあるそうである。

布哇の重な産物は、砂糖、米、それから珈琲、バナ等、總べて熱帶地方に産する植物で、その販路は廣く世界に行き渡つて居る。

それから布哇人の主な食物は魚である。されば彼等は生れながらにして巧みなる漁夫である。從つて彼等は主に漁業に從事し、殖産のことは我が國幷びに支那からの出稼人に一任して居る有樣である。と云つて、彼等は文明國の勞働者の如く、少しも齷齪して働く樣子もなく、何時も餘裕綽々として、至つて安樂に暮して居る。その上、他國人に向つても、決して敵意なぞは挿まぬのみか、反つて好遇する有樣である。

ホノルゝの最も忙はしき時節は、砂糖の頃である。この頃には、港には船が充滿して居て、出來上つた砂糖を、至つて迅速に、米國その他の各地方へ送るとのことである。

ホノルゝの街は何で裝飾されて居るかと云へば樹木である。樹木のうちでも、主として棕櫚が街の裝飾に用ゐらるゝ。この話の初めに挿んだ『棕櫚街』の如きは、取り分け此の棕櫚並木で街の兩側が美しく飾られてある。それに勿論電氣燈も點されて居る。その他、文明國に在るほどのものは悉く備はつて居る。

それから如何なる商業街へ行つても、その往宅の周圍は、大概生け垣で回らされて居る。されば町々の横町でとに樹々は青々として、處々に種々の花が美しく咲いて居る。これが誠に美觀だといふことである。

キヤピテイン　クークの肖像

ホノルゝには、また一個の圖書館と劇場と、二個の病院と、六個の敎會と一個のローマンキアソリックの寺院と、その他著名だたる建物がある。

更に最後に附け加ふべきは、布哇人は非常に潔癖のあることである。されば一日に十二度も入湯するといふ。何と驚くべきではあるまいか。それに彼等は至つて變化好きであるとともに、心には美しい道念を保つて居るといふことであつて、彼のキヤピテーンクークを逆殺したのは土人が好意を以て彼を待遇したのにも關はらず、彼等の一行中に土人を惡しざまに待遇したが爲めだと云ひ傳へられて居る。それは兎に角に、布哇人が何人にも好意を保つてとは明白である。

それから今一つ、此の島の動物は概して鳥類であつて、凡そ七十餘種の鳥類が此の島に居るとのことである。地上の樂土、布哇に就いては先づ此の位にして筆を擱くことにする。

旅行の友

舘山寺遊記

名倉嵐洋

「君今日は天氣がよいから舘山寺に行かう」「ヤムそれは賛成だ、何時頃出懸けよう」「僕は今夜は十六夜だから其の月見がてらと考へたんだ」「ソヲカそれもよからう、では午後四時頃にしようか、左様して久しく見なんだから、舘山寺の秋月を……」「面白い其の通り決定したぞ」「ヨシ」と我親愛なる友△△子と、出校の砌斯く約した。

抑も舘山寺は、濱名湖の東岸にある實に風光佳麗なる處で、我等は其の湖の一部なる、細江湖の濱に住んで居る一野夫である。朝夕ゆきかふ眞帆片帆や、海士の釣舟を見つゝ、愉快に某小學校に通つて居るので、少し暇さへあれば、直ちに一葦に棹さして大公望の二代目をしたり、又風波を冒して、湖上を乘り廻すのを、唯一の樂しみとして、度々舘山寺にも行くのである。彼地は、峻巖屹立して、上には古松青々としたるが曲りくねりて生ひ立ち、寄せてはかへす白波は、其裾をナヤピン〳〵と洗つて居る。其樣は畫にもかきたいような。時々寫眞で見る松島や、江の島の景色の如く遊覽せられた、誰でも褒め無いものは無い、四時の眺は宜しいので有るけれど、最も人の愛づるは秋の月で。濱名湖の八景の一として、數へられてある。偖僕等は午後四時頃になつた故、一艘の輕舟に、欸乃の音勇しく漕ぎ出た。見渡せば、み空には一點の雲なく、或は高く、或は低く立ち並ぶ山々は、遠くは淡く近くは濃く、滴らんばかりの常盤木の色を綴りて、此處彼處紅葉の見ゆるなどは、中々に美はしく、又波なき湖は、宛然油を流した如く、其上を滑りゆく心地よさ。約一時間ばかりで黒岩と云ふ岬をクルリと廻つて此處から細江湖を出でゝ、濱名湖に入り數町ゆけば、日指す處に達する事を得るが、其時はモウ太陽が、本坂山の頂に沒せんとして、日影は慘然靜けき海に映じて、燦々として黄金を敷き詰めたよう。次第に日は影をかくして、オレンヂ色に、名殘を止むる頃は、彼方の村里は、早や夕靄に鎖ざされて、刻一刻に夜の色の蔽ふ處となり、今迄白う見へし帆影も、對岸の山影も、全く其中に消え失せて行く樣は、恰も幻燈でも見るやうで、悠々としてせまらぬ靜寂なる一日の臨終は、實に偉大で有る。舘山寺の宿端は、一町程水を隔てし、大草山がある。此間を土人が瞼首と云ふ、之れを入れば又一ツ湖があるのだ。見上ぐれば同名の寺院は之に面して儼然と建てられてある。我等は其前に上陸した。坂を登りて、彼の寺院に至れば、庭園廣く、多く植込みたる櫻は稍紅葉して居る。直ちに神に三拜した。神燈の火影微かに、名香の煙裊々薄暗き籠前に薫るあたり、いと尊く覺えた。

見れば西の方、椎や松が鬱蒼として、眞黒な上には、夕つゝが光まばゆくきらめいて居る。

此處が、最も宜しいと、佛刹の棟に腰かけて待つ間もあらせず、皓々たる明月は、三方原頭にさし出た。陣頭に立つた勇士のごと、凛として威嚴と、乙女の習々たる春風に、送られて來るような愛せざるを得ない、艶たる美しさとを、備へて、其さやけさと云つたら、只嗚呼と嘆美するばかり。之れより頂上に行かばや、一個所にて眺むるより……と友に促がされて、さらばと落葉踏み分けつゝ、怪しき道を進み、又は止まりて樹間に、月を賞しつゝ、崎嶇たる險坂を攀ぢ上りて、絶頂に達した。漫々たる湖水には、一道の月光が、長虹の如く、キラ〳〵と映じた、わたり、さながらに、是れ名鏡の上を。金蛇が走るよう。「君實に綺麗だね」「アゝ」と感嘆して居ると、何處ともなく風琴の音……音する方を顧ると、遙か彼方に舟遼艘、糢糊として極の如く浮んで居るのである。やがて其中より、いと妙なる歌の聞ゆるに、耳を欹つれば「心にかゝる雲もなし、さやけき月にむかう間は、浮世の外の心地して」と判然とはせぬが、聞えたのである。

月々に月見ぬ月はなけれども月見る月は此の月の月と古へ人の歌はれしとか、聞き及べど、吾も涼傳の「仲秋月にめでゝは今川の教ももどく酒宴遊興」と云ひし如く、酒肴を携へて湖上に、親月の宴を開きたる事は、間々有れど、今宵の如く人待つ虫や鈴虫の哀れにも聲ふり立てゝ、露に鳴く音を、微妙たる神のみ言かとも思ひつゝ、さやけき月に對して、何となく浮世の外に在る心地したるは、又と無いのである。

舘山寺遊記

遊學と交友

（附男女交際に就いて）

遥　幼　生

一言――交友の辯――人は孤獨なる能はず――心友――所謂東京人――凡べて踏出しが肝要也――堕落書生――惡友の惡感化――男女交際とは何ぞや――かゝる會は思慮ある青年の近くべき處に非す

會員諸子。余は本誌第一期より第二期にわたり特に東京に遊學せんとする青年學生諸子の爲めに『苦學生と東京』『研學と東京』『下宿屋と寄宿舍』『遊學と學費』『修學と衛生』の諸項に分ちて、極はめて淺薄ながらも余が特に感じたる事どもを語れり。而して猶は筆を續けて心づける節々を、幾分なりとも諸子の忠實なる友として、華飾の贅文字以外、聊か貢献する所あらん事を期したりしも、塵事兎角多忙にして、六號以來稿を續くるの期なく、徒かに以て遺憾とせり。然るに頃日伊豫の日淺吾一君其の他の諸子より『遊學に志す諸子の爲めにと題するお話を悦んで讀んで居りましたが、六號には一向見受けませんで落膽いたしました。願はくは吾々が中學を卒業して踏み出す學校、即ち實業專門高等學校等に就いて、參考になる樣なお話を希望いたします』等の書を受くる事尠からず、余は心より誠意の婆言に耳を傾けらるゝ諸君の眞面目を喜び、一層忠實に、是等の諸子の友ともなり、出來得るだけ盡力せん決心を堅くせり。尤もかゝる問題は、かの詩人の傳とか、人物の評論などとは違ひ、誇張の言論や、形容詞たつぷりの華文とは全然性質を異にし居る事なれば、余はつとめて平生の筆致を避け、達意の――誰れにもわかり易き、極く平易なる文体を選びたり。猶は此の種の問題に就いては、男子に限らず女子に限らず、諸君が特に希望せらる所を申出でられん事を切望す。筆者は是等をよく參酌して、可成洽ろく會員諸子――特に遊學に志す兄弟姉妹の爲めに、注意すべき參考となるべき事を選び、循々に

此の稿を續けんと欲する也。また問題を撰ぶに就いては、日淺君侑野君の希望せられし事もあり、余も色々と思ひ當たる事もありしが、特に本號には如上の問題を撰びたり、唐突の筆とは言へ、聊か徴意なきに非る也。

＊　＊　＊　＊　＊

遊學と交友、是れまた諸子の須らく注意を拂ふべきの事に屬す。

人は到底孤獨にして生活し得べきものに非ず、生れ出でては父母兄弟のあるあり、年少にして朋友知己あり、長じては即ち良妻となり良夫となり遂に嚴父となり慈母となる。其の他基督教徒の如きは、凡べての運命を神の大能の掌裡に歸して、人間の生涯は必ず神と偕なり、神を離れては人類は一日も生活する能はずと唱ふる程にして、兎に角人間が孤獨にてあり得べからざるは言ふまでもなき事どもなり。

而して神といふ觀念は特別として、吾々が生涯に於いて最もたよりとなるべきもの――或意味に於いては最愛なる父母兄妹よりも、より更に親密に心の底の底までも打ち解けて、相互に慰め得る者は眞個の心友なりとす。

余は單に朋友といはずして心友といへり。心友とはお互に露僞りなきの友也。所謂肝膽相照らし悲しみあれば倶に悲しみ、お互に喜びあれば心より倶に喜ぶの友をいふ。男子にして女子の心友を有する人もあるべく、女子にして男子の心友を有する人もあるべし。兎まれ世の勢利以外、即ち全く利害の關係を離れて、相方どの樣な零落と貧窮に陷入りても、其の交情の決して變る事なきまことの友交を心友の交といふ。

朋友の種類――勢利の友、飲食の友、莫逆の友等は諸子の夙に知らるゝ所にして、大聖孔夫子も益友の求むべく、損友の避くべきをば繰返し〳〵說かれたる所也。こは凡べての人類に必要な撰擇なれども、殊にはじめて東京に出でんとする人々

の注意を要する事なりとす。

蓋し東京は、且つても述べし如く言はば日本全國の、あらゆる階級、あらゆる地方の、あらゆる種類の人々の集合所にして、其の人情氣風は到底全村皆一家といふ樣な單純なるものに非ずして、厭ふべき生存競爭の旋風は洽く滿都に吹き荒び、從つて其の世渡の手段の狡猾に、且つ複雜なるは勢の止むを得ざる所なり。されば學者智者の多き代はりに一代の馬鹿者も多く、大臣參議などいふ高位高官のやからも多き代はりに、都下至る所に乞食物乞の蠕々たるを見るべし。勢ひ其の人情も概ね冷淡にして、而も表面は極めて親切らしく、世辭もよく人交際もよく、鳥渡した所に氣前を見せて、陰にまはれば是れは〳〵と驚く事のみ多し。こは一般都會の風なれど、東京は殊に其の傾向のはげしきを見る樣なり。こははじめて東京の地を踏まんとする諸子の豫じめ知り置くべき事なるべし。尤も渡る世間に鬼はなく、東京の人とても皆

不親切冷淡なりと言ふには非らず、中には骨肉も及ばぬ親切なる人あるは言ふまでもなし。

別に是れといふ理窟はなけれども、世の中の事は何事によらず踏出しが肝要也。手違になるといふ樣な事は、實に僅かな動機、原因より來る事多きものにして、人をして轉た運命の多岐なるに驚かしむるもの故なきに非らずとなす。諸君は屢〻強請的小間物賣や、ヘボ畫家の押賣や、或は月琴尺八に編笠姿、だみ聲はりあげて『南無和尚さんえ……』などと臆面もなく法界節を怒鳴りあるく墮落書生の成れの果てを見し事あるべし。また毎朝の新聞紙上、一廉の學生が墮落の極自ら身を殺して一世の物嗤ひとなれる可憐の記事を幾度か讀まれし事なるべし。わい彼等とても仝じく學に志すの人也。其のはじめて志を立て、學若し成らずは死しても還らずと高唱して、村の土橋に霜柱くだきしの時にあたりてや、安んぞしかく拙かるべき運命を豫想せんや。いづれも天晴れ有爲の人

物ともなりて、故郷に錦を飾らん希望なりしや明か也。然るに何事ぞや、其の結果は書生乞食の群に入りて、大道に白晝法界節を呻るべく、死んでから迄新聞に浮名を流すべく、そはあまりにも甚だしき、情けなき意外の結果にあらずや。

諸子、注意すべきは其の點也。彼等がそれ程に迄零落せる最初の原因は、即ち踏出しの手違ひより起これるを聞かば、諸子は慄然として如何にはじめの一歩が至大の關係を生涯に有するかに驚くべし。更に、更に其の根本的原因の大多數は、悉く惡友の惡感化より來れるを知らば、如何に交友の道のゆるがせにすべからず、盟契の大義の愼重ならざるべからざるかに想到する事なるべし。

されば下宿屋などにありても、ゆめみだりに人に心を許すべからず。甘き針には毒あり、口先きのうまい人に限りて碌な事がなし。余は此の點に於いて古諺の『人を見たら盜賊と思へ』といへるに一面の眞理を見出す也。

德富蘆花君の「思出の記」の一節に、よく下宿屋の內情を寫したるがあり、其の一部を抄錄せんに、『……此の豪傑組の四人の外には、猫の樣におとなしい醫學生で、その許嫁の寫眞を始終懷中して居るとかいふ男と、矢張り開業試驗を受けに出京して居る未來の扁鵲で。胃が惡るい〳〵と言ひながら鰻嚙つては酒飲んで、急にビットルを飲む人と、猶は他に四五人。唯だ一人、「惡いお方ではありませんが、滅多に金などお貸しなさいますな」と主人が注意して呉れた木村某といふ青年、長崎の者で高等學校を頼りに落第する男とか、東京馴れた愛嬌者。僕が下宿に來て二日目「君失敬、何卒以來お心安く」と馴々しくはいり込んだが、六日目には「君お氣の毒ですが一圓立て替へて呉れませんか、今日あたり爲替が來る筈だが」とやつて來た。嚢底無一文の由答ふると、一寸困つた樣子で「君の羽織か着物でも宜いから一寸ほんの一寸貸して呉れませんか」といふので、「お寒いので

る所なり。

終りに於いて、事少こしく問題以外にわたるが如きも、是非諸子の參省を乞ふべき事あり。そは他に非らず、今や愈〻明治三十六年も暮るゝに垂々として、明くれば明治も三十七年の嬉しき正月も來らんとす。一年の計は正月にあり、此の希望ある正月を如何に祝すべきかに就いては諸子の胸中各〻成案あるべし。親戚故舊團欒し、友人知己相つどひ、共に新らしき年を喜びたのしむや素より可なり。唯だ吾々の喜びと吾々の祝意をして、少しく意味あるものならしめよといふ也。

正月は須く遊ぶべし。男子にありては旅行、遠足、ボート、スケーチング最も可なり、女子にありては羽根つき、球遊び、ロンテニス等色々あるべし。中にも百人一首骨牌はわが國のお正月に於いて最も盛なる遊戯にして、男女相交りて夜更くるまで相爭ふ也。余もまた郷里にありし頃は、隨分熱心なる歌骨牌黨にして、いざ鎌倉といふ時には必

ず一方の旗頭ともなり、夜を徹して奮戰せし事もありき。東京に來りて後も、時々知己の何某君や、何某夫人に誘はれて、好きの道として屢〻所謂お江戸の本舞臺にも臨みしが、大學生あり、女學生あり、奥樣あり、八字髭あり、其の盛なる事中々田舍の比にあらず。而も子細に彼等のなす所を見るに、かるた其の物には罪なくも、其の無垢なる青年男女間に、一種厭ふべき不知不識の弊風の瀰漫するあり、其の弊害の及ぶところ、時として識者の眉を顰めしむる事多きを見て、余はつく〳〵と思慮ある青年男女の斷じて近寄るべき會合にあらざるを思ひ、爾來成るべく、止むを得ざる場合の外、この種の會合には列席せざる事となしぬ。

然るに近頃大町桂月氏の學生訓とかいふ小冊子中に、何事ぞや男女交際の一助として、須らく歌骨牌會を盛にすべしてふ意味の文字あるを見て、今更ながら論者のあまりに淺慮なる、無責任なる言論に唖然たるものなくんばあらず。男女交際に

就いては、余もまた贊成者の一人として、一己の意見なきに非れども、そは今こゝに論ずべきの限りに非ず。たゞ其の手段として其の會合を青年男女學生に推奨するに至りては、余は到底眞面目に其の暴論に贊同する能はざる也。

抑〻男女交際の利益は、主として男女相互の意志の疏通により、お互の品性を高むるにあり。異性よく相ひくと共に、其の間に於いて實に言外の美はしき現象を見るべし。男子は婦人の前に、婦人は男子の前に、各〻其の欠點を表はさぬ樣に、擧動に於いても言語に於いても、自然に愼しむ所ある樣になり、より更に默々の間に崇高なる品性に加ふる所あるは疑ひもなき事實也。

故に其の交りや極めて温籍なる間に凛乎たる尊敬あり、謹嚴犯すべからざる間に聖き同情の愛の湧きいづるなり。其の間に自然の意志の疏通は、無限の高尚なる慰藉と愉快とを齎らすべく、かくてこそ男女交際の眞の効果を見たりといふべきに

からずや。それ是れを思はず、濫りに極端に走りて手段を撰ばざるの論をなし、有爲なる青年男女を誤らんとす、是れ果して青年學生に忠なるものといふべきか。

試みに思へ、手首指頭血だらけに、男女入れ亂れて相爭ひ『わら酷いわ、よくつてよ！』『何に僕が取つたんだ、お生憎様！』などあられもなき姿御前の柳眉をさかだて玉ふさへあるなかにいかでか高潔なる品性問題に想到するの餘裕あらんや。宜べなり、其の相互の得る所や、意志薄弱なる男女間の怪しき關係を結ぶに過ぎざる事や。

お正月は來らんとす。歌がるたの徽を拂ふべきの時は近けり。特に此の一婆言を添へて、わが親愛なる會員諸子——特に東京にある諸子の三省をのぞむこと爾り。

注意—次號即ち新年號には『早稲田大學』を紹介すべし。

新刊紹介

▲人生地理　（牧口常三郎氏著緒論、人類の生活としての地、地人相關の媒介としての自然、地球を舞臺としての人類の生活現象、結論の五篇に分かち、地と人との關係に就いて面白く書き記した斬新の著述である。紙質堅緻印刷鮮明の上、精細完備した地圖挿畫もある。特に志賀重昂氏の批評及び追補あるは稗益するところ甚だ多い。（定價金二圓、神田小川町文會堂）

▲角笛　（中村春雨氏著）　國民新聞、世界之日本、小天地、新聲、國文學、青年界等の誌上に掲載せし氏の小品、小說、美文等を集めたるもの、体裁瀟洒たる美本にして、清新の調いづれの邊にあふるゝを見る。講話欄國語漢文の裏搭りあはせ讀まれたし。（定價六拾錢、日本橋區馬喰町三ノ十四今古堂書店）

▲言文一致簿記學　（富山房編輯部）　普通學全書の第十五編として發行されたるもの、篇中、簿記總論、商業簿記、銀行簿記、實例等の諸篇にわかちて、丁寧親切に編述せられたるを見る。思ふに初學者に取りては机上の良友たらん。（定價貳拾錢、神田裏神保町富山房發行）

數學片々

H・K・生

此處に載する事柄は、教科書的の整然秩序を逐ふ譯でなく、算術、代數、幾何、三角等の中にて唯だ心に浮んだ必要だとか一寸面白いとか云ふ問題を、不順序に何んでも手當り次第に勿論中等教育の程度にて一ッ二ッづゝ書く積りである。

甲乙二村の間に一條の河流あり今甲村のA家より乙村のB家に到るべき最も近き道路を新設し之に由て其の河に橋を架するに橋は河岸と直角をなすべしと云ふ如何に道路を取るべきか。

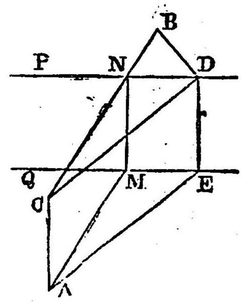
但し河幅は何れの點も相等しきものと假定す。

此の問題は幾何學の初歩に於て屢〻見る所の、與へられたる二ッの點A及びBを折線AMNBにて結び付け其平行線とM及びNに於て交らしめMMを與へられたる直線に平行ならしめ全長AMNBを最短に作る法如何

といふ問題の應用なること明かなり因て第二の問題を解すれば前の問題は自ら分かること、思ふ其作法幷に證明は次の通りである、

作法　PDQEを二ッの與へられたる平行線とし此平行線と他の與へられたる直線との交點をPQとす但し第一問題架橋の要件に由てPQ線は平行線に垂線なるべし

AよりQPに平行にACを引き之をQPに等しく取りBCを結び付けBに近き方の平行線とNに於て交らしめNよりPQに平行にNMを作りQEとMに交らしめMAを結び付くればAMNBは所要の線なり



證明　今QE上にMの外なる任意點Eを取りAEDBの折線を作れば此線はAMNBより大なるべし

ACMNは平行にして且相等さが故にAMNCは平

行四邊形なり故に　AM=CN,
∴　AM+NB=CN+NB=CB,
同樣に　AEDC も亦平行四邊形なるを以て
AE=CD,　AE+DB=CD+DB
而して三角形 CDB に於て二邊の和　CD+DB はCBより大なり即ち AE+DB＞AM+NB 此双方へDE或はNMを加ふるときは折線AEDBは AMNBより大なり故に AMNB は最短なり。

次には算術問題を示さん

溢れつゝある井あり水は絶へず一樣に湧出づるものとし四個の喞筒を用るときは十五分時間に其水を盡すべく八個の喞筒を用るときは七分時間を要すといふ之を五分時間に盡すには幾個の喞筒を用ゆべきや。

解　一分時間一個の喞筒にて汲出す水量を1とすれば四個にて十五分間に汲出す水量は
4×15=60. 同く八個にて七分間には 8×7=56,
なり、60−56=4 は 15−7=8 分間に湧出し水量にして一分間には $4\frac{1}{8}$ 即 $1\frac{1}{2}$ なり 因て井の容量は $60-\frac{1}{2}\times15=52\frac{1}{2}$ とす、之を五分間にて汲盡するには其間湧出づる水量とも
$\frac{1}{52\frac{1}{2}}+\frac{1}{2}\times5=55$ となる、故に喞筒の數は55+5=11.

新刊紹介

▲家庭清話（堀口大學譯氏譯）　特に小さい弟さんや妹さんをお持の兄弟姉妹に御紹介いたします。この本は青山學院の堀口氏が『ヒ、ストーリ、アヴー』を譯されたもので、極く可愛い面白い、お歲玉やクリスマスの贈物として最も適當な本です。鵝の巢、傳吉の誕生日、水大郎、辨次と獸類園行、華盛頓、チンチラ夫人、生きた贈物などで、誰が讀んでも有趣味な好著と思ひます。（村羊生）（京橋區銀座四の三敎文館、定價二十錢）

舶載譚錄

鳥逕

(一)街頭のすさび

伊太利亞フロレンスの某公廳の入口なる石段の下に、兵士あがりらしき老婆ひし男、物乞の曲も卑しげに胡弓奏でゝ、道行く人の憐を請へるが立ちたり、側には忠義顏して此も年老ひける犬の、口に主人なる奏者の帽子を銜へ、その裡に情を受けん心待の目を四方に配りていと可笑げに坐りたり大方の上手にさへ耳を貸さざる都人の、却りて犬に興を曳きて二日三日は周圍に立つ人もあり、隨つて金投込む者もありけりしが、今は早あふさくるさの影は繁けれど、立つ人とては裏町の稚兒、偶には郡見物の鄙人位に止まる憐れさ。さるにても他に生業の道もなき身は、根善く日毎に立ち續けたる某日の午後の事なり、通り掛かりし良き衣着けたる紳士、つと寄り來りて一片の銀貨を例の帽子に投入れやがて、胡弓少時が程貸せよと謂ひつゝ手に取りて、一わたり調べたる後、身拂えて奏で出でぬる物の音、此れ將た何たる巧妙ぞ、萬丈の紅塵も納まりぬべきその樂に、道行人の足思はず引きつけられて、蟻の甘に就く如しとは此等をこそ、少時の間に七重八重と圍繞して名技に聞き惚るゝ聽衆雲の如き有樣に、胡弓の主は驚きて口をも塞がず、犬の口なる帽子は見る中に貨幣堆く、重きに堪へで犬は呻吟り帽は破れんばかりに傾きぬるを、再び空ふすれば復び堆く代ふること四度に到れる時、胡弓を持主に返して彼の奏者は輕く會釋しつゝ圍を切りて立去りたり。只だ茫然として側にありける物乞の前には彼の帽子四杯の金錢の優に已が三月を過ぐす物の代として殘されあるに、初めて我爲の慈善ぞと、遽に跡伏拜みつるも可笑し。此の紳士を誰とかなす、アマアド、バッチャアとて一回の演奏だに數千金を値する名家なるに、唯だ老を憐む愛遊として、逍遙の道草

に、恩の露、霜枯の物乞が懐を滋したるなり。

(二)手帕の裡

撲素なる衣を纏ひて麥藁の帽子に面帕深くしたる三十前後の丈高き婦人、紐育なる塲末の裏町を通り掛りてふと道の傍を見やりて立停り、衣兜より手帕取出して、何物をか拾ひ初めぬ。時は正午少し前、未だ小學校の退散前なれば此所らを遊塲とする貧家の跣足なる腕白も、未だ籠の鳥の羽を擴げて軍ごとに喧り騒ぐ聲もなくいと靜なり。恰も來合しゝは巡行の査官人をし見れば嫌疑の眼鋭さを誇る職務の、逃し難さは彼の婦人の振舞、遠目より怪しみつゝ近寄り數歩を隔てし靴音にも氣つかで一心に探むる物は、恐らく人の遺したる金子をぞ拾はんとの心かと、益〻近よりて背後に立ち、早や罪人に對すらん聲音もて、婦人には彼國の風として、いと不躾なる物謂ひの「こら〳〵」。背後に人ありと初めて知りし婦人は驚きと、やゝ憤の顔紅らめつゝ、振返り見れば、その警官なるにやゝ不快の感をも添へて「何御用ですか」。凛然たる返答に査公稍調子を改め「貴方は何をして御出でしたか」「少し……」「少し何ですか」頓に答へぬ婦人を復も怪しむ査公やゝ鋭く「その手帕の中は何か」「何でもありません」「何んでもない事があるものか啓けて見せろ」。婦人は有繋に怒の眉を昂げて、而もいと温順に「では御目に懸けます……」手帕を啓きて中なる硝子の片碎を査公に示しつゝ「此所邊は小兒が遊び廻る處で萬一過でもありましてはと、實は此を拾ひ集めて居たので御座います、若し御指圖なら元の通りに致して置きましても」。倩は斯る陰徳者もありけるかそを辱め身の愚さよと、今は慚愧の冷汗背を傳ふ査公は消えも入りたき此の塲の仕義を唯打詫ぶる心より遽に身を屈め、言を卑ふして「婦人、誠に失禮を致しました、いやどうも誠に感じ入りました次第で、萬望その儘、それでは失禮を致します」徳に打たれし査公は署長に對する時は斯くこそと思はるゝ敬禮を表

して早歩に行き過ぎけり。

(三)捨身の徳

亜米利加ミシガンに名高き大湖あり、瀛船此岸より彼岸に往來して交通運輸の便限なけれど、琵琶湖に叡山嵐いと凄しきに比べて此處にも亦た山嵐の船人を惶かすあり、その來るや忽然何人も此を豫知する事難しといふ。時は秋の初、朝は一翳の雲もなき空は鏡の如き湖面を深碧に染めて、斯かれとは夢にも知らぬその午後、例の風雨に一隻の瀛船は難破して乗組の客も船員も皆岸を去る僅二丁ばかりの處に浪と風との弄り物となりぬ。湖に面して大學あり、寄宿の樓上より一望湖上を收むべし、一學生宛然の難船を睹るや物も曰はず同窓團欒談笑の中を拔けて獨り外面に出行くを、難に赴むく俠心の彼を識れる儕輩は、今の彼が擧動たゝ事に非ずと一齊に跡追ひかけて岸に至れば、あはや身を跳らして怒濤の中に早や岸を五六間が程離れて、彼の船の方に泳ぎ行くなりけり、日頃の氣象

さてそとは思ひながら今更の驚愕と嘆賞に、儕輩はあれよ〳〵と爲ん術なさに唯だ皆を決して立ちたる間を、手練の拔手雄々しくも目指す船に達して、一人づゝ兩側に抱き陸を目掛けて引返へし、漸く岸に上りしを見たる友は先づ安堵の胸を摩りつゝ、救はれし人々をも壽かんとする折、彼は復び岩を噛む波浪の中に沒して二回目の救助にと急ぎ手に汗握る友の面前に又も二人を救助しつゝ陸に上ると同時に氣を失ひて仆れたるを、篝火などにて介抱し漸く氣確かなるに及び、友の強ひて止むるをも椀くが如くにして三回目の救助にと赴きそれをも果して又た氣絶しぬるを、儕輩して寄宿に荷ひ歸り醫を招き篤く介抱する事數時、漸く正氣を復して眼を開くや、側なる友の喜悦の狀を寧ろ訝らんやうに見やりつゝ、いと憂ひ顔に「まだ僕はやりのこした」「何を、六人を人を救へば澤山ではないか」「いや然でない、三度目の時見ると夫婦者らしい二人の男女が、此の次は私等を！と僕を

みつめて頼んだ……その顔がまだ目についても居る、もう眩目だらうな殘念な」。言葉の末を涙に曇らせて語る赤心に、僧輩の誰彼今更その愛心に勵まされ「爲さざる不德に」責められて、已後の寄宿寮今に至る迄犧牲の精神他に比類なしとかや。

(四)巖の上

フローレンスのピッチ館に一幅の繪畫掛りてあり激浪、密雲、軒翥く稻妻の暴れたる海に難破の船半ば沈み、其處彼處に死すべき憐れの人數多く浮べるを見ゆ、此暗澹たる氣色の中に巖の聳立するあり頂に土やわる花草叢がり茂れる裡に鳩の巢ありて、巢の中に鴿は雛を守りて外面の荒るゝ樣を知らず顏に且つ樂しげなり。此は悲哀と厄困の裡に處する道を現したる者とぞ、そもその巖とは何にかあらん熟考を値すべきに非ずや。因に我曾て聽きつる此に似たる譚あり。富有なる人、二人の書伯に平和といふ心を物してよと頼みぬ、さるに一人の書きしを見れば、夕方の湖に漣立つる風さへ無く、夕榮紅ふ映りて、見るからにいと靜なる圖をものして送りぬ。今一人は大瀑布懸りてある前に鬱蒼たる喬木立ち、その樹間に鳥の巢掛れるが、裡なる鳥はいと安らかに雛を養ひて瀧の音にも氣附かぬさまなるを送りぬと、いづれが眞の平和といふ意に副へりや、後のものぞとは誰が目にも判じ易からんなり。

新刊紹介

▲この華（第四卷）　東京麹町の成女學校内にある、この花會の機關雜誌で、號を追ふて面目の新になるのは喜ばしいものです。いづれを花とたゝえんのまとひ、さすがはやさしき紅筆のかほり、奥ゆかしく思ひます。殊に『ロスト、エンド、フハウンド』の一篇は、さてこそイエス、フロームな姫君達の面目がほの見えるやうで、まことに面白く拜見いたしました。（そんやう生）

新刊紹介

▲史學研究法（文學博士坪井九馬三氏著）　全編を四卷に分ち第一卷には總説、第二卷には史料編、第三卷には考證論、第四卷には史論編、しかして極めて平易な言文一致体で書き綴られてある。實に『早稻田叢書』の一卷としてのみならず、近來有數の好著述である。取り分け第一卷は本會々員諸子の爲めにも有益の事柄が記されてあるべし。（定價一圓六十錢、早稻田大學出版部發行）

▲博物學研究（廣田文則、平尾晃兩氏編）　本書は文部省指定の中學教授要目に依りて編まれたもので、最も記憶し易き方法で生理の大綱が説かれてある、中學生の參考書として甚だ適當であるべし。（定價卅八錢、日本橋本石町育文館發行）

▲青年立身訓（野田叱雷氏著）　著者は卷首に、「今の教育、克く青年の弱點を洞破して、之が救濟の適法を見出したるものあるか。……今の所謂倫理教育は徒らに形式に拘泥して些の生命なく些の力なし。「力のなき」これ實に我が青年の通弊なり」云々と記した。しかして此の害は此の「力なき」青年に一路の力を添へん爲め幾多成功の實例を掲げたものである（定價三十錢）

▲人物の解剖　これは實業之日本社で編纂したもので、當代實業家の性行資性を縱橫評論して往々痛快を極むるものがある掲げられた實業家は岩崎久彌、早川千吉郎、豐川良平、富田鐵之助、大三輪長兵衛、高田慎蔵、以下約そ五十氏。（定價五十錢）

▲成功錦囊　同じ社で編纂したるもの、如何にせば成功すべきや、成功に必要なる七大習慣、成功に必要なる資格、成功と結婚、友誼と成功、樂天と成功、職業撰擇の秘訣、成功すべき青年の特徴、成功の福音等が述べられてある。（定價三十錢）

▲名流奇談（鈴木光次郎氏著）　徳川慶喜公、小村外務大臣、古市工學博士、根本博士、坪内博士、重野博士以下三浦梧樓氏、故勝安房氏等現代百家の逸話奇談を面白可笑しく記したものである。勉學餘閑に一讀するには適當な讀みもの。（定價三十錢）

▲致富成業策（正岡藝陽氏著）　緒論、何をか富と言ひ何をか力といふ、富と力との目的、如何にして富を散ずべきか等、都合九章に分つて論じてある。これも仲々有益な讀みものである、（定價三十錢　以上四書、麹町有樂町三丁目一、實業之日本社）

▲哲人と文章美（前田越嶺氏著）　プラトーン、デカルト、フエヂロン、モンテスキユ、パスカル、ダンテ等諸家をそれ〴〵傳記、評論、文抄の三段に分かちて最も簡明に論じたものである。わが會員にして文學に志すものは一讀して然るべきである。（定價二十錢、京橋築地二丁目二十、通俗宗教談發行所）

庭球術

笠　正　澄

遊戯の効用――コートに就いて――適當なる地面――球庭の種類――球庭と太陽の光線――球庭と風雨――球庭の設定方法――球庭保存に就ての注意

遊戯と云ふものは、喋々する迄もない、身体各部の發達を圓滿にさせ、吾人の擧止働作を活潑にし、又た精神を快濶にするを以て直接の効果となすものである。而して其の快樂は競爭をなすのであるから、衆人同一に樂む事が出來るし、又た同一に慰む事が出來る。且つ歐米人の遊戯に至つては悉く規律があつて、頗る嚴密なものである、隨つて紛擾爭鬪を來す憂は殆んど無いと云ふても宜しい。此の點によりして朋友間は勿論、不見不識の他人、一言半句の言語も通ぜない外國人とでも愉快に之を行ふ事が出來、特に父子兄弟間にて之を行へば、自然家庭の平和を保持する事か出來るそうして各遊戯に關する規律に依つて勝負を決するのであるから、頗る公平正直なものである。實に雅量ある大人君子の爭ひである。

加之遊戯は規律が嚴格であるから、之れを行ふと同時に、不知不識の間に規律の習性を養成するに於て最も妙策である、規律の習性は、其の人一人に取りては終身處世の要素であつて、國家萬業の基礎となるべきものである。遊戯は能く人をして規律的習性を涵養し、能く人をして品行方正たらしむべきものである。此の點より論及したらば遊戯は道德實踐上に重大なる關係を有して居る。故に之に依つて高尚なる品位を陶冶する事が出來るのである。

斯の如く遊戯は、身体上、品性上に於いて、偉大なる効益のあることは明かである。其の他の効用に至つては、一々之を擧げ數ふる事は出來ない。

斯樣であるからして、歐米各國に於ては、常に遊戯を奬勵し之れが普及を謀つて居る。國民も亦た競ふて之を演じ、殆んど之を以て日課としるのである。

若し之を行はない時には、人に非ずと云ふ位で其の盛なる事は實に驚く可き程である。隨つて運動場、遊戯場等の設備の完全な事は、實に羨むべきはどである。

千鍋の如く、我が國民の狀況はどうである。多くは都會主義である。出不精である。蟄居好きである。軟弱雅びである。從つて其の氣質は漸々虚弱に流れ、元氣年を追ふて陵夷するの現象がある。

心は身体とは假令ば影と形との如く、親密なる關係あるものであつて、精神の健全は身体の健全に基くものである、と云ふ事は疑ふ可からざる事である。身体既に斯の如く虚弱である、從つて之に宿る精神の活潑ならざる事は明である。之れ現時同胞の有樣であつて誠に歎はしき事である。吾曹は之れを救ふの一策として、遊戯を主張し、同胞の体力を挽回せん事を期するのである。そこで此處に要點を掲げて、諸種の遊戯を紹介することゝしたい。扨かして此の號には庭球術に就いて述べるのである。

庭球術

球庭(Court)に就いて

球庭は、成る可く平坦なる土地、または刈り込みたる芝生を撰ばなければならない。而して土塊塵埃小石等は注意に注意を加はえて、之れを除かなければ、球の反跳を不規則ならしめ、爲めに此の興味ある遊戯の全体を攪亂する事がある。地面の傾斜も亦た球の反跳を不規則ならしむるのみならず、傾斜に沿ふて下る球を止むるに困難を來し且つ疲勞することも甚だしいから、注意せなければならない。

左にコートの種類を示せば

(イ)アッシュ、コート(Ash Court)
桑皮(トネリコ)にて造りたる球庭

(ロ)グラブル、コート(Gravel Court)
砂礫にて作りたる球庭

(ハ)アスファルト、コート(Asphalte Court)
アスファルトにて造りたる球庭

(ニ)セメント、コート(Cement Court)
セメントにて造りたる球庭
(ホ)ホルヮブル、コート(Rubble Court)
砕粉にて造りたる球庭
(ヘ)ブリクダスト、コート(Brickdust Court)
煉瓦の砕粉にて造りたる球庭

斯くの如き球庭は、晴天はいふまでもなく、風烈しき時とても、砂石塵埃の飛散する憂は更になく、又た雨後直ちに使用するも、更に障げない、甚だ便利なものである。が、之れを購求するとすれば、多額の費用を要する。ところが石炭の燃滓を細砕して之を少しく厚く球庭に撒布すれば、其の代用を勤むることが出來、之れなれば値段も安く至極簡便であるから最も普通に行はれる。

球庭は東西に長く設置するときは競技の際、一方の戯友は、眩き太陽の光線を眞正面に受け、其の不利益となることは勘くない、さればとて南北に長く作るにしても、矢張り日中に於ては一方の戯友は迷惑を蒙ることがある。然し日本は朝夕より太陽の光線の來る角度が遙かに大であるから、南北は東西に比すれば、其の妨害は少ないといふべきである、して見れば先づ球庭は南北に長く設置する方が至當であろうと思ふ。

球庭を構造するに當つて、風力の方向に注意しなければならぬ。若し之れに顧慮することなく、風の方向に向つて長く球庭を設置したならば、風の方向に向つて居る戯友は、前方より襲ひ來る風塵の爲めに、殆んど眼を開くことが出來ない。其の蒙る不利益は單に之のみに留まらない、又た一方の戯友は打ちたる球が弱い球であつたにしても風の爲めに往々敵庭に入る如き圖らざる利を得ることがあるけれど、多くは球庭外に飛び過ぎ、天晴の働きを顯すことが出來ない。從つて球庭を選ぶに當つては、可成風の吹かない土地を卜し、球か風の爲めに意外の邊に飛び、競技の不利益を生するとのないやうに注意せなければならぬ。若し

止むを得ず風の烈しき土地に球庭を設置せんとするならば、先づ風力の方向を計り、此の方向に角に球庭を作ることが肝要である。

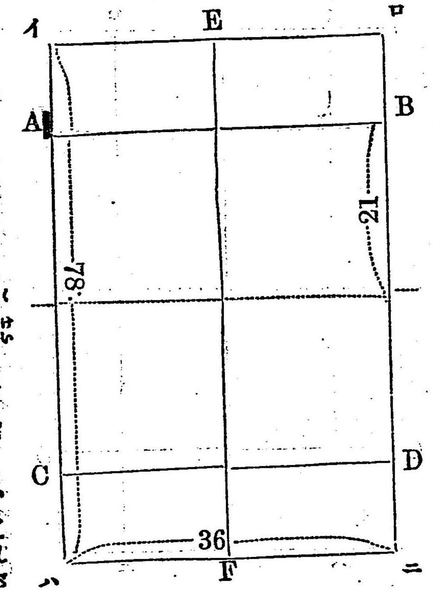
球庭の設置に就いて

偖て、此れより球庭の設置に就て說かうと思ふ第一圖に掲げたる圖は、四人試合に於けるコートの有樣を描きたるものである。

試合に左の三種類がある
二人試合(The Single-handed game)
三人試合(Three handed game)
四人試合(Four-handed game)

二本の棒に着けたる網を以て、球庭を横に等分する。但し網の高さは其の中頃を三呎、其の兩端を三呎六吋の高さに張る。棒と棒との距離即ち網の長さは四十二呎である。試合を開始するに當つては、先づ審判官又は戯友の一人は棒及び網が適當の高さに裝置せられたるや否やを檢視しなければならぬ。

第一圖



網の兩側に於て、網を離るゝ三呎九吋の處に網へ並行なる直線を引き、次ぎに兩端の棒の內方へ三呎離て、網に垂直なる直線を劃くときは、兩線は、イ。ロ。ハ。ニ。に於て相會して、爰に長さ七十八呎、幅三十六呎なる一矩形を發現する、之れが即ち球庭である。此の矩形を縱に二等分する直線の長さは四十二呎である。此の矩形を縱に二等分する直線即ち網の中央を過ぎて網に垂直なる一直線を劃くときは、網の兩側に於て相等しき二個の右球庭及

び左球庭を作り出すことが出來る。更に此等の球庭を網を離る丶二十呎の處にて、網に並行せる一直線を以て橫斷し、都合四個の球庭に分劃することが出來る。

(イ)及び(ロ)をサイド、ライン(Sides line)と云ひ、其の長さ各〻七十八呎

(ロ)及び(ハ)をベース、ライン(Base line)と云ひ、其の長さ各三十六呎

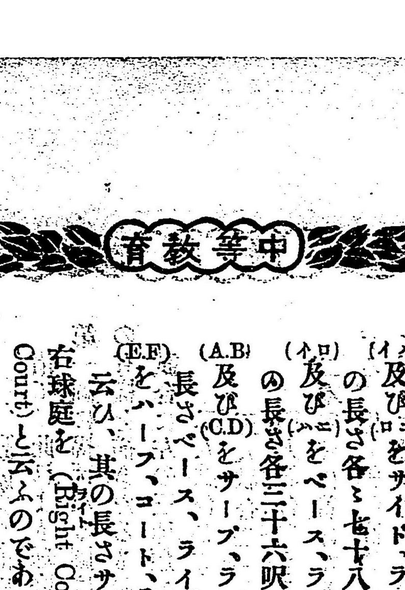
(A.B)及び(C.D)をサーブ、ライン(Service line)と云ひ其長さベース、ラインに等しい

(E.F)をハーフ、コート、ライン(Half Court line)と云ひ、其の長さサイド、ラインに等しい

右球庭を(ライト)(Right Court)と云ひ左球庭を(レフト)(left Court)と云ふのである。

第二圖に揭げたるものは至極便利な球庭であつて、家庭等に設置するには最も適當なものである。四人試合及び三人試合に使用せらるゝのみならず二人試合の折にはサーブ側線(サーバイス サイド ライン)(Service side line)を

第二圖



內方四呎半の處に側線に並行なる(ロ)(ニ)の二直線を引きベース、ラインに、イ、ロ、ハ、ニに於て會せしめたる差異があるだけである。

第三圖に揭げたるものは、今を去る二十年前英

國の各倶樂部に於て設定したる構造であつて、本遊戲の始めて本邦に渡來した時の球庭の構造は之れ一つであつた、當時は盛に此の設置に由つて、競技したものである。

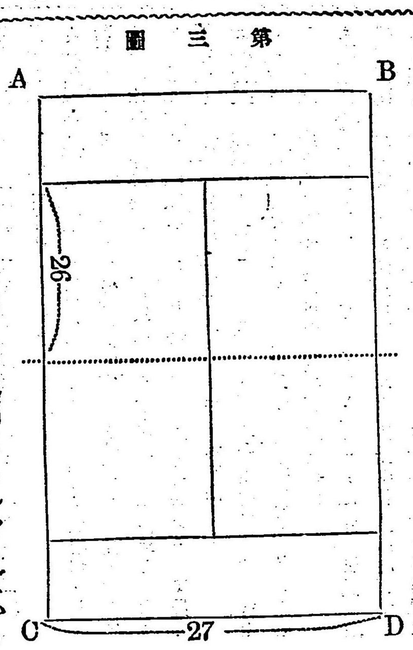
サーブ側線(サーブ、サイド、ライン)は側線(A.B)(C.D)之れを兼ねて、其の長さは矢張り七十八呎であるけれども、ベース線及びサーブ線は二十七呎六呎の處であつて、球庭を橫斷するのである。此の設置に於て、網の兩端にある棒は、サイド、ライン上に立てられたものである。

球庭を區劃する處の各線は、細引(ほそびき)或は細繩等のもので引くのも宜しい、が、厚さ五分位の板を地中に埋めて、其の緣を地面と平頭にするのが最も宜しいと思ふ、但し土砂は風塵となつて飛散するものであるからして、板部のみ地面から凸起して之に觸れた球は、意外の邊に飛ぶものである。從つて、此場合には更に土を敷くかさなければ、板

を埋めて修繕しなければならない。

斯くして成功したる球庭は如何なる場合とを問はず。下駄を穿つた儘で侵入してはいけない。若し下駄の儘で之に侵入したならば、忽ち地面に凸

第三圖



凹を生じて、球の反跳を不規則ならしむるばかりてない、之れが爲めに、戲友の土塊に跌きて顚倒するが如きことが無いとも限らない、殊に競技の際下駄等を用ゐるときは球庭を害するのみに止らない、運動の自由を妨ぐること又た甚だしいも

のである。されば靴、雪駄、或は靡裏草履等を穿つが、最も適當なものは足袋護謨靴等である、又雨後直ちに、球庭を使用せんとするときは、到る處に凹凸を生ぜしむる虞があるからして、半日乃至一日の猶豫を待ち、土地の乾いた折りを見計つて使用しけなればならないのである。

新刊紹介

▲青年界（二の十五）　内山懐天氏の主幹する所、本號に於て見るべきは『青年界』の一欄にして、『青年男子の交際法』に就いて諸先輩の意見を滿載せり。男女交際の可否は已に論ずるまでもなき事にて、唯だ如何にして是れを實行すべきやといふが問題なるべく、畢竟名論も實行が伴はでは空論に等しきもの、寄稿家諸氏はいづれも教育界の先達と見受けられたり、吾人は諸氏が自ら書つて時代の新潮流を作らるゝ果斷こそ願はしけれ。（定價郵稅共二十二錢、日本橋本町三丁目金港堂）

▲文藝會（二の七）　草村北星氏の主幹する所也。余は嘱して氏の本領の他にありて存するを疑はず。所載の小説はいづれも婦人を主題としたる、また妙なり。獨歩氏の『女難』さつぱり感服せず。花柳莽環に至りては到底文學雜誌の生產物に非ず。（郵稅共二十二錢、金港堂）

▲新小説（八の十三）　主幹は後藤宙外氏、此の種の雜誌中先づ白眉なるべし。小説には佳作と稱すべき程のものなきが如く、孤島氏の『良判事』も氏が得意の作にはあらじな。島村抱月氏の滯歐文壇再讀す。附錄の『紅葉山人追憶錄』はわが文壇の泰斗を追悼する誠意に於いてまことに遺憾なしといふべし。（定價郵稅共二十七錢、日本橋區春陽堂）

▲蘆風雁聲（中學世界增刊六の十五）　例の冬期增刊として發行されたるもの。雜誌の體裁は頗ぶるよく整へるを見る。青年諸子の作品以外に於いて桂月氏の『日本名山錄』小波氏の『貴き血』止水氏の『閥族の爭ひ』月村氏の『寃罪ボネスツス』等最も讀むべし。（定價郵稅共二十二錢、日本橋區博文館）

▲明星（卯歲第十二號）　與謝野鐵幹氏の主幹也。姉崎博士の『ワグネルの劇曲に於ける戀』鐵幹氏の『哀歌』等あり。（定價二十一錢、府下豊多摩郡澁谷村中澁谷三八二新詩社）

▲白百合（一の二）　明星派より分かれたる林外、御風、泡鳴、天籟諸氏の編輯する所。綱島梁川氏の『車上半日記』泡鳴氏の『鳴門姫』其の他讀むべきものいと多し。さは、明星派より出でたりとは言へ、體裁まで其儘なるは面白からずと思ふもの、必ずしもわれのみかは。（定價十四錢、麹町區富士見町一の三十三東京純文社）

青山女學院 全手藝學校 運動會を見る

そんやう生

十月の五日、其の學校のしるしした招待券に、一葉のプログラムを添へて、『一度は青山の女兵を御覽なさいまし、男子の愚圖〳〵は宜しく慚死すべしと言いたい位です』と人の筆に、美くしくも認めたる六日の午後から、落葉ふむ秋の澁谷路を青山へとまかり出づ。

風溫かに小春日和の空は鏡のやう。學院の門を一面の芝生を縫ふて、小松のかげ紅葉の楢、神祠校の前を斜めにして早や華やかなる吶喊聲を聞く。四角四面に幔幕うつて、黒山の樣な來賓席を遙かに隔て、青葉のしつらひ。時や二時も半ばを過ぎて、競技は一部も二部も早や了りたりな。と見れば蜷茱、紫、纖色の袴も輕るく、丈長き繻の垂髪さつと亂れてグラウンド一面に、バスケツトボールを爭ひて宛然の花を撒いたと也。

順を追ふてありし影を偲ばむにはあまりにわれの忘じたりや。許させ給へ、思出のまゝをそれよりそれに唯だ此の筆。

雪と撒らしたる紙のあとを眼蔽いて迷宮の神秘を探ぐるべく、節おもしろき豊年の秋に、黄金なす田の面の稻を刈穗の歌、英文料の生徒とあらば今少しくハイカリても繰るべくなど。端典式の體操とや、亞鈴體操の步法といふの、さすがはお姫樣方の足蹈かな。日惡ろき哀童なるべし。獨り笑壺に入の子運動とはいしくも申したり。紅きは平氏か、白きは清和源氏か。一隊凡そ五六十名、プログラムには紅白中隊運動とありき。整々然として一絲みだれず、砲煙の野に遠く望まば、思ふに十二天軍の先驅とも見るべきか。對抗競爭は手藝學校の有志家連とぞ、うで鷄卵に兎のお細工、澁滯の涙を啜るべく、負傷せるあの兎の何としてなどの憎まれ口は叩かずもがな。今少しく趣向ありたらば。

天樂起る。錚々として滿天の雲に入るの時、一隊の壯士堂々長刀をかざして長蛇の陣を爲す。孰れも揃の白鉢卷に襷十字にあやなして、手頃の薙刀りう〳〵としごいて縱橫無盡に奮戰するに當りてや、意氣軒昂觀るもの皆汗を握るの感なくんばあらず。名を記せず中隊の指揮官、號令明徹眞に名將軍の風あり。知らず軍國多事の秋、幸に此の一隊を滿州の野に見るを得ば、北雲の猛驚よくそれ恐るゝに足らざらむか。國旗の光、綺陽春の花の如し。

もしそれ青山の歌に至つては正氣のあつまる所百花研を競ふの觀あり。女學院の總員、女子手藝學校の總員、すべて二百余名、隊伍整々步調寸毫もみだるゝなし。期々たる其の歌や、まづ高く〳〵高唱すべく、白雲のとばり彩雲のただよふを見む。

予ばりしは四時。釣瓶おとしの秋の野に、暮色はやくも蒼然として。遠寺の鐘聲はのかに相傳ふ。——十一月二十一日記す——

人と說話

白水生

中等教育に於ける國文學史

文學博士芳賀矢一氏が、先つころ帝國教育會に於いて講演された『中等教育に於ける國文學史』は青年諸君に對しても稗益少なからぬことゝ思ふ。白水生がこゝに其の一部を紹介するのも此の意味に他ならぬのである。そこで先づ博士は曰く

「何をか文學史上の智識と云ふかといふに、古今集が何時出來たといふことを知つて居るのが文學史の智識を得たといふ考を持つて貰ひたいと思ひます。文學史の目的は種々ありますが、元來、文學史といふものは國民の思想、感情を盡く發露したもので、それを知るのが、目的であります。文學といふものは、一般の科學に對し、學術に對して、一種別なものである。眞理を語るものでなく寧ろ空想を話すものである。そう云ふ領分を持つて居る文學、それを取つて研究するのが文學史でありますので、その國民の想像、國民の思想の走つた領分を引括るめて其の歷史を見るのが即ち文學歷史で、國民の思想、感情の歷史が、それに依つて分るといふことが、文學史の目的であります。されば一方に於いて政治歷史を研究し、一方に於いて商工業の歷史を研究すると同時に國民の想像の歷史も、空想の歷史も大切になる。それは、國民の性質の發達史でおるからであります。廣い意味の國學の主要なる目的は他にない。その國の言葉を研究し、その國の文學を研究するのが、一國の大事な目的になつて居る。されば、書きものに現れたことを材料として、國語に現れたところの精神的の產物、殊に文學上の想像、感情を現したところの國文學を取りまして、それを研究して、國民の思想の

文學史は國民思想の歷史也

變遷、想像の變遷といふことを研究するのが、即ち國文學の目的、國學の意味の主要なことで、文學史は國語の最も大切なことになつて來なければならぬ」と、述べ、更らに

中等教育に於ける國語教育

「中等教育に於ける國語、國文といふ科目の目的といふものは、一方に於いて人の書いた國語、國文を理解することを養ひ、また、これを自由に使ふように國語を書き習ふ力を拵へるのが一の重なる目的であるには相違ありませぬが、一方に於いては、國民の思想感情の變遷を自然と注入して往かうといふのが主要なる中等國語の目的になつて居るのである。獨逸語を獨逸國で學ぶのは、言葉だけを學ぶのではない、その中に獨逸といふ國の國民の精神といふものを理解することを主として居るのである。即ち、一の獨逸の讀本を讀み、文學史を繙けば獨逸國民が自ら浮んで來るのである。鳥渡した諺を聞いても、何處か其の中に獨逸的のことがある。佛蘭西人や英吉利人の云ひ方と違ふ。そこを理解する。それに伴つて歷史を思ひ起し、それに伴ふた昔の古老の說話を連想して來まして、そこで何となく無上の懷しいような感じを起すといふことに於いて、一の詩を讀み、一の諺を暗んずることに於いても價値がある。

わが國語國文をやる間にも、何となく大和魂といふような考が頭に浮ぶということになりますから、中等教育に於いて國語を教へる間には、自ら日本國民として、昔からの思想、感情の理解さるゝことを主眼とせねばならぬことになるのである。それが即ち中等教育の國語科に於ける主要なる目的でなければならぬと思ひます。

國語教育の主要なる目的

無論、作文を作り文章を書く方のことは大切な目的でありますけれども、それだけで以つて、今申した側のことが欠けて居つたならば、この國語の教育は詰らぬものとなつてしまふと考へるのである。中等教育に於けるとて

ろの國語といふもの、中樞となり、その最も大切なところとなるのは、文學史でなければならぬのである。たゞ中學校の最後の五年級に少し許り文學史が這入つて居ることを以つて、文學史は極めて詰らぬ價値のないものであると考へるのは間違ひである。

日本の古傳說を一括する

「中等教育に於ける國文學史の講義は日本の古傳說をだん〳〵引き括めて話をして、昔の文學に現はれた形を教へ込んで往く、日本にこれまで現れた國文學に於いて面白みを持たなければならぬ。日本古文學の傳說、數千年來國民を支配して來た傳說、口碑を充分に理解させて、そうして其の方に興味を持たせて從つて古文學を味はふといふ興味を持たせなければならぬ。古今集が何年に出來たといふことを知らぬでも、萬葉集が何年に出來たといふことを知らぬでも、一の浦島太郎の話が何ういふ風に形が變つて來るといふことを知つて居つて、子供

萬葉集より浦島太郎の話

に浦島太郎を面白く話す人のある方が文學史の智識があると云ひたいと思ひます。」

「先づ極く簡單な例で、竹取物語に就いて申して見ようならば、この竹取物語は非常に見方に依つて面白い物語である。月の都といふ奇麗なものゝ中に都があるといふ思想で、そこから假に人間界に降つて居つた美しい女がある。下界の人間が何うかして此の女を手に入れようとして、いろ〳〵方法を廻らしたが、汚ない世界の人は、それを得ることが出來ないのである。天子樣の勅命でも否んで往かない。しかしながら、離れて居つて月世界の父母を戀ひ慕ひ、暫く竹取の養はれた其の養父母の恩を惜む。遂に月の都から迎ひが來て往くといふので、下界に居る間に、いろ〳〵の男から云ひ寄られるが、汚らはしい下界の人間と違ひ、高尚な世界に住むものだから、そんな下界のものの云ふことは聞かない。勅命でも聞かない。貞節

を全うして天に昇つて歸るといふので、これは見かたに依つて高尚な面白い話である、この物語を講義する時に、それと同時に、月世界の考は何うであるか。昔は何時ごろから月を愛することが出來てあつたか。或は支那から來た說ではないか。月世界に都があるといふ傳說は印度にあつたのが來たのでは無いか。國民固有の說か、但しは外國から渡つた說か。國民に在るにしても此の時代に在るのは面白い。或は外國にも、そういふ例もありましようし、そんなことを較べて月の都といふ思想について空想を描かせる。從つて、天人が迎ひに來る有樣、天の羽衣を着ると身體が輕くなるといふのも詩的である。そういふ空想の上から見ても面白いところがあるのでありますから、そういふところを解釋するのは、文學史を教へる心持ですることが出來る。」

例へば「はまぐり」と云へば「はま」に在る「くり」の如きものだと云ふので、日本人が名付け、「さ」の

「くらけ」のようだといふので「さくらげ」といふ名が付いた。かゝる單純なをにも、自然に國民の思想が見られるのである。それと同じに、文法を教へるにしても、方法次第で國民性を示し、國民の思想、感情を示すをが出來ると思ひます。云々」

新刊紹介

▲作文の教へ　糸左近氏著）「昔から作文の本は山ほどあるけれど、修辭學を應用し、その例に一文完結したのを掲げ、六ケしい句は其の意義を解釋し、しかも其の文の何故善いかといふ理由を分析して說明したものが少い」とは著者が巻頭に掲げた言葉であるが、この注意に基づいて、此書は著はされたのである。その要目を擧ぐれば、總論、各論、美的快樂論、名文解剖、實用文、以上である。用文に志すもの、參考書としては、近來稀れな好著述であると思はれる。（定價金五拾錢、東京神田今川小路一丁目金刺芳流堂發行）

小天地

▲さは秋風の吹きに吹かすや。夕、ひとり低唱のおばしまに、暮れゆく秋の野を遠く、かすかに響く野の寺の、淋びしき鐘にたぐすめば、あ、吾れながら怪しき想ひの胸のみだれよ。——またしても——またしても鐘の音は低く〳〵遠くかすかになり響くよ。想ふ事なからんや。

小天地

村生羊

▲風はいづこより來りていづこに去るを知らず、人生の行路また實にかくの如し。神秘のとばりはとこしへに深うして、理想のおもかげは天ゆく雲よりも杳かなり。春あり、秋あり、花に落花の恨みあり、月に叢雲の嘆あり。我れは何の爲めに此の世に生れしかを知らず、われは唯だ此の世にわれあるを知る。我れの『今』に生くるを知る。まことや、『今』に生きて『今』に死す。人の生涯は必らず『今』ならざるべからず。われ今こゝに在り、我れはかるが故に思ふ。思ひに生きて思ひに死す。これ實に男子の畢生の本國にあらずや。

▲野の百合の光榮に見よ。かささぎの橋の秋に置く霜の美妙なるに見よ。歌はざらめや、讃へざらめや。仰げ。進め。死の針はいづこにありや、冥途の刺はいづこにありや。生死は一に大能の掌る所、たゞ勇ましくわが力のつくく限り、わが生命のあらん限り、さらばわれは花々しくぞ戰はめ。

▲あゝ天浩々たり、地深澈たり。朝あり、夕あり。星の榮あり、地の榮あり。山に白雲のいざよふ所、とけては清水とかすみの流れ——仰いで、俯して、さは瞑目の我が身のあまりに小さしと思ふ。神の御心の尊しと思ふ。わが身つたなしとおもふ。而して大悟遂にいづれの時なるべきやにまどふ。

△——さりや攝理の指す所われに道あり。わが道の啓くる所われに感謝の祈禱あり。過きしを追ふと勝るな、『今』は過去の未來なり。過去は『今』の昔なり。我がまなざしの『今』にもゆるの時、わが心は常にその昔を思ふ Was を思ふ。Were を思ふ。而して深く『今』に省る。

▲病める父、亡き母のいかに戀しく、主にある兄弟、基督によるわが姉妹のいかに懐かしく、思ひはかへる幼き昔のたゞ懇しく懐かしく、此の思ひ實にや讐にけぶる曙の湖のあなたに、雲煙の神仙によばふがごと、わが魂は遙かに幼かりし昔のその昔に生くるを感ずる也。

▲爾幼兒のごとくならずは神の國に入る事能はず。我れは心より幼兒の昔にかへらむ事を希ふ。——十月廿七日——

雜錄

萬國議會の話

井上充

本誌に挿んだのはアメリカ合衆國議事堂の圖でありまして、この議事堂は有名なるワシントン府に在るのです。

議會！わが國の議會は帝國議會（Imperial Diet）と呼ばれて居るのであるが、この米國の議會は何と呼ばるゝかと申せば、コングレス（Congress）と云はれて居る。

このように國に依つて同じ議會でも、各〻その名稱が違つて居るのである。そこで目下我が帝國議會は開會中のなどではあるが、こゝに世界の各國に於ける議會の名稱を此處に紹介するのも、必ずしも無益のことではあるまいと思ふのです。

こゝに世界各國とは云つて見たものゝ、立憲政治の行はるゝ國でなければ議會の無いのは勿論のことであるから、この立憲國の主なるものゝみを撰つて、その議會の名稱を紹介するのは、これ云ふまでも無いこと、御承知ありたい。

ワシントン府の肖像

先づ英國から紹介すればこの國の議會はパーリアメント（Parliament）と呼ばれ、貴族院（House of Lords）と衆議院（House of Commons）とに分かれて居る。わが國で貴族院、衆議院の二院制を取るようになつたのも、全く模範を此の英國に取つたとのことであります。

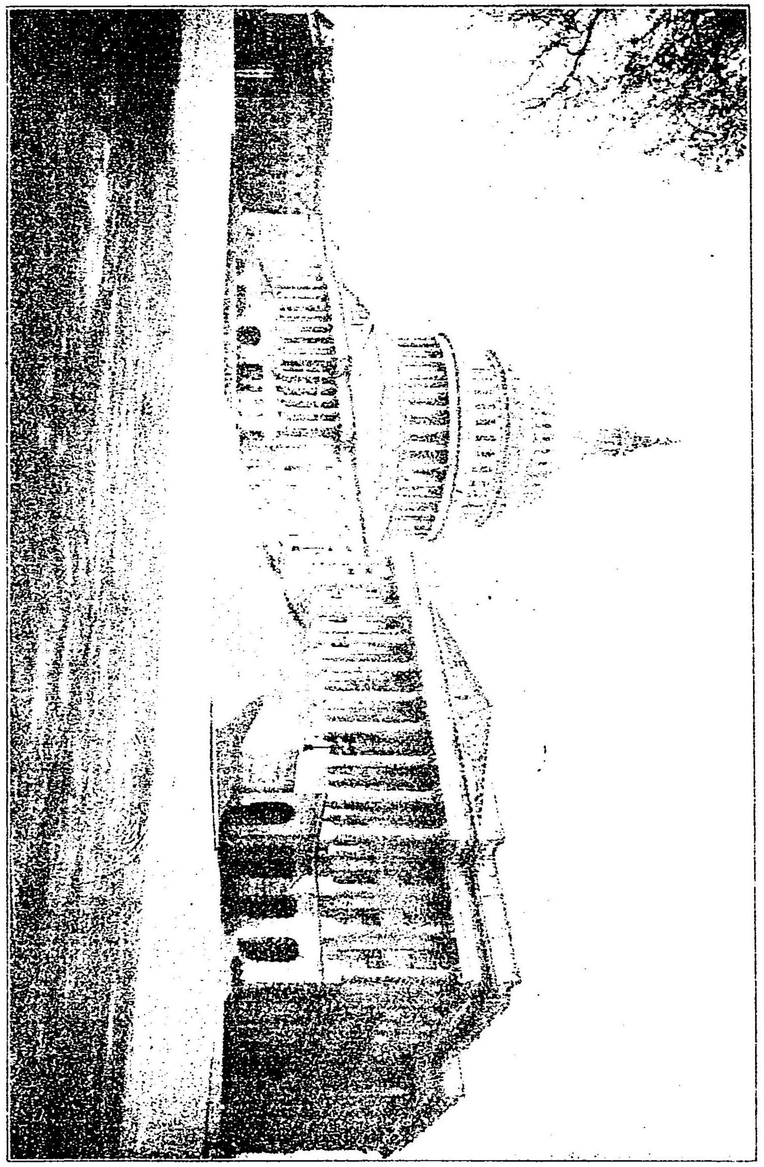
それで議員の數は貴族院か五百八十名ばかり、衆議院が六百七十名ばかりあるのです。即ち我が國の貴衆兩院の議員の數を合計して、やつ〳〵英國二院の議員の數と相當することになるのです。議員の多少が素より立憲的進歩を意味しては居りませんが、流石は始めて代議政体を創立した國だけあつて兩院議員も斯のように多數なのであると云ふことは出來ましよう。

次ぎは佛國。

この佛國の議會はナショナル、アスセムブリー（National Assembly）と呼ばれ、その上院（英國の貴族院）をばセナート（Senat）と呼び、下院（衆議院）をはシャムブル、デ、デプユテ（Chambre des Deputes）と呼ぶのであります。このセネートを英語で綴れば Senate となり、元老院といふ意味があるのであります。それからシャムブル、デ、デプユテは英語では Chamber of Deputies と綴り代議院といふ意味になるのをあつて、元老院の議員の數が三百名、代議院議員の數が五百九十名ばかりであります。

第三番目は獨逸です。

この獨逸議會の上院は各聯邦國の推選で成り立つて居りますからブンデルスラー Bundesrath（連合院の意、英語に譯せば Federal Council）と呼ばれ、議員の數は五十八名。また下院はライヒスタッグ Reichstag（帝國議會の意、英語にては Diet of the Realm）と呼ばれ三百九十七人の議員があります。しかも、この上に各聯邦に各〻議會があるのであつて、例へばプロシアの如きは其の議會をランタッグ Lantag（Diet of the Country）と稱し、更に之れを上下兩院に分かつて、上院をばヘルンハウス Herrenhaus（House or Lords）下院をばアブゲオールドネッテンハウス Abgeordneten-haus（Chamber of Deputies）と呼び、四百有餘名の議員があります。その他の聯邦にも、それぞれ議會がありまするけれど、くだ〳〵しければ



獨逸の議會は此の邊に致して置きまして、次ぎには北米合衆國。

北米合衆國の議會は、前にも記してある通り、コングレスと呼ばれて居り、上院は Senate 下院は House of Representatives と呼ばれ、上院には九十名、下院には三百五十七名の議員がある。

第五番目には墺太利國。

これは墺太利帝國と匈牙利王國より成立つて居るのでありしかして全國皇帝は次のような稱號を保つて居る。

Emperor of Austria and King of Hungary. 即ち墺太利帝王兼匈牙利王という意味なのである。

そこで墺太利の議會は Reichsrath と呼ばれ、上院は Herrenhaus、下院は Abgeordnetenhaus と呼ばれ、上院には三百四十五名、下院には三百五十三人の議員がある。しかし此の國の議會はヴイエンナ(Vienna)にある。(匈牙利の議會のことは、こゝに省く)

ルコンの肖像

次ぎに伊太利の議會は Parlamento と呼ばれ、上院は Senato、下院は Camerade Deputati と呼ばれ、上院には三百九十七名、下院には五百名の議員が居る。

白耳義に於いては、その議會の上院は Senat と呼ばれ、下院は Chambre des Represen tants と呼ばれて居る。

右の他、西班牙、葡萄牙、和蘭、丁抹、瑞典及び那威等に於いても、それ〴〵の名稱がある。けれども、あまり管々しい恐れがあるので、先づ此の邊のことにして筆を擱く。(第一期『中等教育』第四號「海外雜談」及び十一號「日用語彙」參照)

早稲田大學

芙鳳生

▲序言▼

私立大學——眞面目なる紹介——筆者の微意

大學なる哉、大學なる哉。曰はく明治大學、曰はく法政大學、曰はく日本大學、曰はく法學院大學、曰はく哲學館大學。何ぞ其の標榜する所の嚴めしきや。或者は有名無實の學士博士の名を列擧して人材のトヾたるに誇り、或者は帝國大學制帽其のまゝの制帽と仰ぐべしき稱號とを掲げて生徒吸收策に是れ勗む。さはれ昨年の夏、わが學界に更に五私立大學を加へたることに於いて、明治文運の光彩俄かに陸離たるの感なくんば非ず。

是に於いてか讀賣紙上、五來素川子の『東西兩京の大學』に次いで、日本新聞紙上『私立大學評判記』なるもの現はれ、全時に萬朝報紙上『私立大學參觀見記』なるもの現はれ、何れも多少人目を聳動したるものあり。而も評論は飽迄も評論也。讀んでは面白かるべきも得る所甚だ多からず。況んや他日笈を擔ひて遊學の途に上らんとする諸子に取りては、何等の價値を値するなし。是れに依りて其の學校の眞面目を窺はんと欲するに至りては殆と是れ木に倚りて魚を求むるに等しといふも過言にあらざる也。

今や年新らたに、新學年の入學期は漸く近からんとす。思ふに會員諸子の中には將に笈を負ふて東都に遊學せんと期しつゝあるの諸子尠きに非るべく、官學の單調に慊焉たらずして寧ろ私學の高等專門學校に志すの人必ず多からむ。余は特に是等の諸子の爲めに、新年の中等教育紙上を藉りて、順次是等の私立大學の紹介の勞を取らんと欲す。是れ實に此の稿を起こせる所以にして、また聊か諸子に忠なる微意に非るなきを保せんや。唯だ恨むらくは塵事多忙の筆者の、果してよく毀を

追ふて此の稿を續け得るや否やは未定なりとす。縱ひ續しいふ、こは評論に非ざる也、とこそでも眞面目なる紹介也、案内記也。請ふ先づ手近かなる早稲田大學に就いて語らしめよ。

▲位置▼

春秋によく春によし—田園の風色詩興湧つ—校合

本郷よりすれば江戸川河畔より左に折れて山吹町より。牛込見付よりすれば、神樂坂を一路早稲田町、鶴巻町を經て穴八幡を右に曲るべし。蒼綠鬱として大空を覆ふの所、遣水の流はそく、幽禽の聲ものどかなるの所、魏々たる大建築の雲に聳ゆるを見む。石門あり、墨黑々と早稲田大學と署す。常磐木の木蔭にすがして正面は大講堂にして階下には學監室あり、職員室あり、編輯局を右にして壯麗なる應接室あり。階上はよく二千人を容るべく、南北に廣く遙かに東に開く。遠く相望めば早稲田の新街指呼の内にあり、關口の高臺よりかけて、江戸川の流水をとめ、茫々として煙の如く、

鎖鑽巷おほろなるの日、こゝかしこに殘れる雜木の林に佐保姫のやは衣華かに彩るを見む。北は即ち大隈伯の邸を隔てゝ水かれし田の面の風情、蘆荻風に叫いて月天心にやどるの夕、詩人ならなくも神來の感興なからむや。

左の袂は出版部、右の袂は高等豫科の事務所にして、講堂は其の後にあり。新築の校舍は優に數千を容るべしと聞く。寄宿舍あり圖書館あり、是れを左にして新築の早稲田實業學校はまた一段の壯觀をを添ふ。

▲組織▼

主旨——沿革——各部の組織——附屬の事業

苟くもわが國民をして自治獨立の精神を持せしめんとせば、須らく先づ學問の獨立を圖らざるべからず。而して學問の獨立を完ふする道は、權勢情實の羈絆を脫したる一大私立學校を起こし、學に志す者をして自由に必要の諸學科を修めしむるにありとの主旨のもとに、早稲田大學の前身たる

東京專門學校が、明治十五年始めて伯爵大隈重信氏によりて創立せられ、爾來、小野梓氏、高田、坪内、天野三博士の熱心なる保育の下に、今日の盛況を呈するに至りし多面多岐なる其の沿革史に至りては到底こゝに盡すべきの事に非るを以て、こゝには單に現在の早稻田大學組織に就いて、單簡に記載するに滿足せざるべからず。

早稻田大學は大別して大學部、專門部、高等豫科、研究科の四部に分かつ。大學部は政治經濟學科、法學科、文學科の三科より成り、專門の學理の研究と、二種以上の外國語の修得によりて廣く古今内外の書を參考せしむるにあり。專門部は政治經濟科、法律科。高等師範部は國語漢文科、歷史地理科、法制經濟科及び英語科より成り、邦語を主とし、傍ら支那語若くは英語を必修せしむ。高等豫科は大學に入るの豫備門にして、三期一ケ年半の年限にして、研究科は大學部專門部の得業生をして、更に深遠なる研究をなさんとするものゝ爲めに設けし所にして、其の他三十七年度より開設すべき商科大學部なるものあり。

各部各科の課程表に至りては規則書に詳はしきを以て略す。高等豫科を除いては各部各科悉く三ケ年にして、昨年十月の調査によれば、生徒は大學部に三百十四人、專門部に千百廿八、高等豫科に八百十三人、研究科に十九人、他に舊規則のもとに取扱はるべき二百名を加へて二千四百六十人にして、現在は實に三千二百餘人の多數に上れり。

每學年特待生を置き全學年の學費を免ず。また特に秀才を選拔して外國留學の特典を與ふ。

校長は法學博士鳩山和夫氏、學監は法學博士高田早苗氏にして、敎授には五十五博士、五十一學士、外國の學位を有するもの十八人、他に三十五人の講師を以て各部專門の學理を敎しむ。附屬として出版部あり、講義錄、早稻田學報、中等敎育の發行以外有益なる著作の出版に任じ、圖書館には和漢書に於いて二萬七千四百七十二部、洋書に於いて八千八百六十二部の藏書を有し、建築の費用は實に二萬九千余圓に上る。館長は市島謙吉氏也。

▲學風▼

學風とは何ぞや——外見と内容——所謂早稻田學風

民族には必らず其の民族特有の氣風あり。學校には必らず其の特有の學風なかるべからず。素より人心の相異る其の面の異るが如く、一部少數者の特長を以て全般を律すべからざるは論なきも、而も已に主義あり、網領あり、其の主として皷吹する傾向に向かふは勢の止むべからざる所に屬す。學風とは即ち全校の生徒を通じて隱約の間に認識し得べき其の特長を指すものにして、慶應義塾に三田學風あり、早稻田大學豈に特得の學風なからむや。

雨あがりの月の夕、肌寒むの秋の朝、試に牛込早稻田の市街を逍遙すれば幾千人といふ所謂早稻田大學生が、意氣揚々として三々伍々母校の懷に來往するを見るべし。頭には戴く正帽の、黒地角

形のバイカラ式、ふつさりとした絹糸さはに、態ざと前のめりの眉まで下げて、裏は繻珍かインバネスの袖頻りに風に飜ぐ。遠く望めば宛然として是れ長安の貴公子の如く、文學を論じ政事を議する其の聲容の如何に蕭洒たる哉。是れを三田塾の着流し主義、前垂に雪駄ちやらめかして校堂に出入するものに比して、何ぞその整々然たるや。日本子の「慶應義塾は上野公園の如く早稻田大學は日比谷公園の如く、彼れは馬車鐵道の如く、是れは電車の如く、彼れはノートルダムの寺院の如く、一度堂に上れば先づ三田風なる一種の感に打たるべく、此は巴里のオペラの如く、未だ構内に入らざるに、先づ神氣の快活を覺ゆ。彼れは秋郊の晩煙離落の菊花を尋ぬるが如く、幽情饒しと雖も凄凉の氣を免かれず。是れは春風三月樓臺の櫻花を見る如く、駘蕩の象多しと雖も幽寂の趣きを欠く」と評せるもの、また早稻田學風の半面を現はし得てあまりあるを覺ゆ。

誤解する勿れ諸子、是れまことに外見也。故に余は特に半面といへり、更に深く其の大主義、精神理想の發展する所に至りては素より他にわつて存す。是れを論ぜんと欲せば勢ひ多大の頁を要すべく、決して此の稿の本意に非るを以て、余は特に筆を擱せんも、彼の坪内先生が、獨立獨行の大精神、自信自恃、外見よりは精神を重んじ、進んで取るといふ活靈の大理想は是れ吾が早稲田大學の學風の特長なりと揚言せられたる本然の校風は校の内外を通じて至る所に發揮せられつゝあるを見る也。

▲案内▼

▲入學者の資格▼　高等豫科、專門部の政事經濟科、法律科は、中學卒業生若しくは是れと仝等の學力あるもの。高等師範部は更に高等豫科の第一期を修業したるもの、若しくは是れと仝等の學力あるものに限り、大學部第一年級は年齢十七才以上則ち高等豫科三學期の課程を修了したるもの、若しくは是れと仝等の學力ある者より選拔す。

▲入學の手續▼　入學志願者は高等豫科の事務所に就いて規定の入學願書を貰ひ、それに履歴書と寫眞を添へ、中學卒業生は其の學校長の證明書を添ふべし。受驗料は大學部は二圓、其の他は壹圓宛にして、研究科は特に五圓を徴收す。愈〻入學の許可を得たるものは保證人連署の入學證書に束脩金貳圓を添へ、更に二ヶ月分の月謝と体育費其の他を前納するを要す。

▲入學試驗▼　中學卒業生は專門部一年級、並びに高等豫科第一期には無試驗入學を許し、其の他は悉く試驗を要す。

試驗に二種あり。一は仝然中學卒業と仝程度の仝科目に就いて試驗するものにして、一は倫理、國語漢文、萬國歴史、地理、數學、英語のみの試驗、若しくは國語、漢文、歴史、地理、數學の五科目だけの試驗のみにて入學せしむ、一を甲種と

いひて徴兵猶豫の特典あり。一を乙種といひて徴兵猶豫の特典なきものとす。

特に入學試驗に就いて注意すべきは、必ず正々堂々斷じて不正の手段を取るべからざる事にして、こは言ふ迄もなき事ながら東京の學生には隨分此の種の不屆なる學生多き事なれば、學校にて特に彼等に對しては嚴重に取締を設け、かくの如き不都合あるものは遠慮なしに排斥する方針なり。其の他換玉を使ひて一時を瞞着する如きは是れ苟も青年學徒のなすべき事に非ず。

▲學費▼　各部各科の學費は左の如く、月納の者は必ず其の月の三日迄に納むるものとす。

△大學部　前期十八圓、後期十五圓、毎月三圓宛分納を許す

△專門部　前期十三圓、後期十圓、毎月三圓宛分納を許す

△高等師範部　前期十五圓、後期十三圓半、毎月分納三圓半宛

△高等豫科　一期十圓、二期十五圓、三期十二圓半、分納二圓半宛

△研究科　一ヶ年三十三圓、毎月三圓宛分納を許す

▲寄宿舍▼　父兄保證人の依頼ある者は、特に監督の勞を取る。舍費月俸は時價によりて高低すべきも、規定は左の如し。

△舍費壹圓五拾錢　△月俸（賄費）五圓五拾錢

▲片々▼　月に幾回となく科學講演を開き、また毎土曜日宗教界、教育界の名士を聘して土曜講演を開く。

校内には各種の會合團体ありて、鶴巻町には早稲田學生倶樂部あり。早稲田學會は鳩山博士を會長として、校友會は六千人以上の會員より成る、其の他躰育部あり、運動部あり、近來早稲田健兒の一隊はベースボール界に嶄然として頭角を顯はし、至る所聲名隆々たるものあり。

市街新らたに成りて各種の生業一としあらざるはなく、下宿屋軒を列ねて萬般の便利一として備はらざるはなし。物價は本郷其の他に比して廉ならずと雖も、また甚だ高からず。

野に近く、其の水や滄々の響きを傳ふ。都塵を遠く、其の山や常に白雲の悠々たるを見るべし。

早稲田大學

月によろしく、雨によろしく、早稲田の別乾坤はとこしへに仙境の名を恣にす。

▲講師▼

早稲田の講座——其の特長——浮田和民氏

講座の早稲田大學。傳ふべき事の何ぞそれ多さや。洽く天下の人才學者を集めて各〻其の得る所に力を盡さしむ、其の講座の多面多趣味なる豈に偶然ならむや。

高田博士の政治學に於ける、坪内博士の倫理、文學に於ける、天野博士の經濟學に於ける、有賀博士の國際公法に於ける、いづれも天下に其の名を知らるゝ所にして、和田垣博士、田尻博士の講義は帝國大學に於いてさへ嘖々の聲名あるもの、其の他、文學部にありては姉崎博士、三宅博士、芳賀博士あり。文學者にして其の職にあたるものは巖谷小波、長田秋濤の二氏あり。增田、内ケ崎二氏の英文學に於ける、鹽澤、高杉、諸氏の語學に於ける、數へ來れば殆んど枚擧に遑あらざらんとす。若しそれわが浮田和民氏に至りては、其の學殖の富贍なる、其の識見の卓越なる、眞率なる學者として、天下稀に見る所なりと傳ふ。

▲舞臺▼

政事界——實業界——文壇の觀

百姓は米を作くり、大工は家を造くる、燕子は巢をつくり、人間は罪惡をつくる。三田の慶應義塾は所謂當世才子流の素町人をつくり、官學の帝國大學は官吏と鬮髪をつくる。抑も然らば尨然たる早稲田大學は遂に何をか此の社會に献ぜんとしつゝあるか。請ふ吾人をして過去二十年の其の成蹟に徵せしめよ。

理財科が三田の主腦なるが如く、早稲田大學の主腦は實に政治科にあり。從つて其の舞臺は實業界上に尠くして政事界に多く、評論の人に多くして實務の人に尠し。日本子は報じて、『慶應義塾の出身者にして銀行にある者二百三十一人、會社にある者四百四十八、獨立して商業を營ひもの百

五十一人、自家に在りて諸種の事業を營むもの百三十二人、是れを合すれば九百五十四人の多きを有しながら、其の割合に官吏若しくは府縣會議員たるもの尠し。是れに反して早稲田は、其の銀行會社員たるもの僅かに二百九十七人に過ざるも、新聞記者には二百八十人を有し、府縣會議員には百三十五人を有し、町村吏員には百八十五人を有す』といへるもの故なきに非ずとなす。

然り政治科はわが早稲田大學の主腦なり。而も吾人は、其の本來の特色は、實にわが明治文壇に於いて社會の表面に最もよく發揮せられたるを見る也。

明治文壇を二分して、其の一を保つものあり、早稲田派といふ。更に其の一を保つものあり、早稲田派といふ。此の二派は實に隱然としてわが文壇の兩大關をなし、群星聲をひそめて將星を仰ぐの觀あり。早稲田派の頭領を坪内博士となす。

評論家として島村抱月子を記せりや、宗教家として綱島梁川子を記せりや。鳥谷部春汀子は人物月旦を以て鳴り、天渓、春潮、不孤、和軒諸子また健名あり。創作家にして評論家を兼ぬる者は後藤宙外子、草村北星子、中島孤島子あり。創作家としては德田秋江子あり、森しづか子あり、中村春雨子あり。詩人としては山本露葉子、杉谷代水子、河井酔茗子、前田林外子あり。其の他新進の文學者に至りては枚擧に遑あらずとなす。思ふに今後の文壇は更らに是等新進の早稲田派の文士によりて陸離たる光彩を添ふるを疑はず。

請ふ吾人をして、而も早稲田大學の本領のかくの如きに止まらずして、必ずわが社會の表面に遺憾なく其の手腕を揮ふの時あるべきをかたく信ぜしめよ。余はこゝに擱筆す。

早稲田大學

催眠術の話

S M 生

「永き夜のとおの眠りのみなめざめ、波のり船の音のよきかな」これは此の新年に因のある、彼の寶船に書いてある歌である。この歌の書いてある寶船を枕の下にして、正月の二日に眠れば必ず何か夢を見るので、その夢を初夢と名付け、その夢に依つて、その年の禍福、吉凶を卜し得るのだといふことになつて居る。この事は何處を何うして起つたのやら、鳥渡知ることは出來ぬ。それがまた、それが果して迷信であるか何うかといふことも、私はこゝに明言せぬ。また、迷信であるとすれば、いかなる邊から出た迷信であるか。それも明言することは出來ませぬ。それは兎も角も、近來、この催眠術といふことが切りに流行り出したようである。取り分け、彼の山口三之助といふ人が、此の頃しきりに、此の催眠術を唱へ、催眠學會といふ會を組織し、また自ら『催眠術』といふ冊子を著はされたとかいふことである。私は未だ其の冊子を見たことは無い。が、私も少し此の催眠術に就いて研究したことがあるから、こゝに少しばかり、その御話しを致そうと思ひます。

未だ催眠術に依れる施術を見たことの無い人は、無論のこと、この施術を見たことのある人でも、その道理の判らぬ人は、兎角、催眠術をば一種の魔術だと云ふのであります。成るほど、催眠術は一種の魔術かも知れませんけれども、現今時既に科學の一つとして受け納れられて居るところの、深遠な學理を用ゐれば、解釋の出來る魔術なのであります。

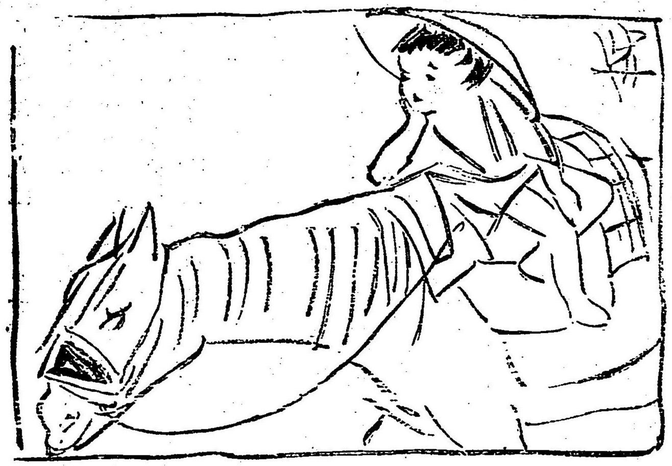
唯今、この催眠術が現今は科學の一として受け納れらるゝに至つたと申しましたが、斯く科學の一つとして受け納れらるゝに至つたのは、まことに最近のことでありまして、その往昔に於いて、恰度今日の日本に於ける一般の人々と同樣、單に魔術としてのみ受け納れられて居つた。が、それは今から殆んど二千七百年前のことであります。して見ると、この催眠術といふものは、決して新しいものではない。その新しいといふのは、科學の一つとして受け納れられてからが新しいのであります。

そこで、その二千七百年前に何處で行はれて居つたかと申せば、彼の埃及や希臘や伊太利あたりに於いてゞあつて、これは今日、ロンドンなぞの博物館へ行つて埃及の遺物を見ても判るそうであります。閑話休題、この催眠術と云ふ現象が、如何なる學者に依つて初めて研究されたかと申せば、それはメスメルといふ人であつて、この人は大學卒業後、その自分の一生を此の催眠術の研究にさゝげたのであつた。で、その研究の結果「動物電氣說」といふものを發表いたし、この動物電氣の作用に依つて、催眠術は、その現象を呈するのであると主張いたし、爲めに此の催眠術にメスメリズムといふ名を冠ぶせらるゝもように至つたのでありました。が、この時に於いては、メスメルの學說は佛蘭西に於いても獨逸に於いても受け納れられなかつたのでありました。依つてメスメルは其の主張遂に納れられず、あはれ果敢ない最

後を遂げたのではありましたが、彼が、かほど熱心に主張したほどありまして、我が國に於いてまでも、メスメリズム即ち催眠術と、斯う心得て居るほどになつたのであるから、彼れメスメルも亦た瞑すべきであつて、實に學者としての名譽この上もないことだと思ひます。

が、しかしながら、今日所謂催眠術は、このメスメリズムではなくて、ヒプノチズムといふのであります。

このヒプノチズムといふ名目は、メスメルの同じ流れを汲んで其の後研究に從事した英國のブレードといふ學者が名付けた名前であつて、この



人は、その研究を積んだ結果、催眠術に感じて居る人が忽ち眼の明かなくなつたり、眼を開くことの出來ないようになるのは、魔術の結果でなくして、たしかに生理作用である、生理作用の結果であるといふことを發見したのであります、されば今日の催眠術と申せば此のヒプノチズムのことでありまして、メスメリズムと申せば今は早や歷史上の一遺物に過ぎないことになるのであります。

このブレード等に次いで、佛國にリエボーといふ博士が出て又たベルンハイムといふ人が出て、いよ〳〵益〻この方面の研究に其の歩を進

め、催眠術の現象といふものは、生理上より更に一歩を進めて、心理學の上から説明せねばならぬことを唱へるようになつたのであります。それで、今日のところでは、催眠術が心理學の上から説明され得るといふことが、一般に學者間に信ぜられて居るのであります。

以上は催眠術が、今日の狀態にまで進歩して來たところの歷史の大体でありますが、こゝに此の催眠狀態といふものは、どのようなものであるかといふことを少しお話しして見ようと思ひます。

ところで、催眠狀態とは何のようなものであるかと申すに……それに先立つて暗示といふ言葉の説明を述べねばなりません

暗示……英語で之れをサッヂエッションと申します。が、このサッヂエッションと申す言葉は仲々廣い意味の言葉で、一口に申せば先づ刺戟といふ言葉に近いのであります。で、此のサッヂエッションの目的といふは、或る一定の作用を見ることであつて、例へば、施術者が被術者に向つて

「貴方の眼は明かない」

と云ふと、直ぐ被術者の心に「明かない」といふ觀念を起こす。このようなのがサッヂエッションであります。

そこで此の暗示といふ一種の精神的刺戟を與へると、それが爲めに、それに相應した一定の感應作用が起こるのであります。即ち此の水を飲めば酸つぱいと云へば、被術者の心のうちに酸つぱいといふ觀念が起こるのであります。このような狀態になつた時に、これを催眠狀態になつたといふのである。この催眠狀態に就いては、學者の方にはいろ〳〵の議論があるのですが、こゝに夫れを云ふ必要はあるまいと思ふ。

右は催眠術の理論を、最も簡單に申し述べたのでありまするが、これが種々に應用さるゝので利き目がある。即ち第一に醫學上に應用さるゝ、第二に教育上に應用さるゝ。

第一の醫學上に應用さるゝに就いては、世間の醫學者の間に議論はあるが、兎にも角にも、この催眠術を用ゐて、種々の疾を巧みに治療し得ることは事實であります。また、催眠術を知らなかつた以前には、到底醫し難かつた病が、この催眠術を用ゐて醫さるゝのあるのは事實であります。

それから第二の教育上に應用すること。これは、この催眠術を用ゐて、兒童を感化させることが出來るので、即ちいくら叱つても酒を飲むような子供に、この催眠術を施して懇々說諭する。すると、その利き目は忽ちに現はれて、その

子供は酒を見るのも、いやだといふようになる。これは事實である。早いお話しが、彼の母親が赤子を眠かしつけ、その子が早や夢うつゝのようになつて居る時に、懇々と種々なことを云ひきかせる。すると、殊に利き目が多い。これと先づ理屈は同じなのであります。これと同樣にして不品行な學生の心をも直すことが出來るのであります。

催眠術のことについては、まだいろ〳〵申し上げたいこともあるが、一わたりの紹介には、略ぼ以上ほどで要を得て居ることゝ思ひますから、詳しきことは其の道の人に讓つて、これだけにして置きます。

數學片々

H.

代數除法の殘餘

(1) x^3-3x+7 を $x-2$ にて除したる殘餘を求む

解 $x-2=0$ 即 $x=2$ とし與へられたる被除數の x の代りに2を置けば其の結果は求むる所の殘餘なり

即 $x^3-3x+7=2^3-3.2+7=5$, 因て殘餘5なり、

(2) x^3+4x-6, を $x+3$ にて除したる殘餘を求む

解 $x+3=0$ 即 $x=-3$ とし被除數の x の代りに -3 を置けば

$x^3+4x-6=(-3)^3+4(-3)-6=-9$ 即ち殘餘なり、

(3) $x^3-4x^2-25x-12$ は $x+3$ にて割り切ることを證せ

解 $x+3=0$ 即 $x=-3$ とし被除數の x の代りに -3 を置けば

$x^3-4x^2-25x-12=(-3)^3-4(-3)^2-25(-3)-12=0$

即殘餘は零なるを以て $x+3$ にて割り切ること を得べし

(4) x^3+5x+n, が $x-2$ にて割り切るゝ爲には n の値を如何に定むべきや

解 被除數の x に2を置き換ふれば

$x^3+5x+n=2^3+5.2+n=14+n$,

なるを以て此の除法が割り切るゝには殘餘は零ならざる可からず因て $14+n=0$ より

$n=-14$ とす、

(5) $2x^3+mx^2+nx+2$ が $x-2$, 及び $x-1$ にて割り切るゝ爲には m 及び n の値を如何に定むべきか

解 被除數の x の代りに2を置きたる殘餘

$2\times2^2+2^2m+2m+2$ は零ならざる可からず

$\therefore\quad 4m+2m+18=0$ ……(1)

又 x の代りに1と置きたる殘餘も零ならざる可からず

$\therefore\quad m+n+4=0$ ……(2)

(1)及び(2)より $m=-5,\ n=1$. を得て答とす、

以上諸問題は次の所謂殘餘定理に據るものなり

x に就きて n 次の代數式を $x-k$ にて除したる殘餘は其 x の代りに k を置きたる結果なり

例へば x に就き n 次の式を

$$ax^n+bx^{n-1}+cx^{n-2}+\cdots\cdots+q,$$

とし $x-k$ にて除したる商を Q、剩餘を R とすれば

$$ax^n+bx^{n-1}+cx^{n-2}+\cdots\cdots+q=(x-k)Q+R,$$

然るに此の恒同式に於ける x の値を如何に定むるも R は x を含まざるを以て R には關係を及さゞるなり因て今 $x=k$ とすれば上の恒同式は

$$ak^n+bk^{n-1}+ck^{n-2}+\cdots\cdots+q=(k-k)Q+R,$$

$$=R,$$

故に R は殘餘なり若し又た R が零なるときは其の式は割切るゝこと明かなり、

噸の事

噸に容積の噸、目方の噸、又た英噸、佛噸等ありて先づ我國にて普通目方に用るは英噸にして、其の一噸は凡二百七十一貫に當り、一佛噸は千「キログラム」即ち凡二百六十七貫に當る、瀛車にて荷物を量るに目方に由るときは大抵英噸を用ひ重量に由るときは百立方尺を以て一噸とす。

又た軍艦に排水量何噸と稱するは、軍艦が水に浮べるとき水中に洗みたる部分が水を排除したる其の水の目方にして、我が國にて現今稱する所のものは佛噸なり。故に一万二千噸の排水量を有する軍艦といへば其の艦の爲めに排除せられたゝ水の目方が一万二千佛噸にして即ち

$$267\text{貫}\times12000=3204000$$

廿二万〇四百貫なり、而して此の水の目方は即ち軍艦の目方なり、通常の船の容積又たは積荷物の容積は大抵百立方尺を一噸とすれども、又た四十立方尺を一噸とするものあり。登瀛噸は船中積荷に使用する部分の容積なり。

第二期中等教育　毎月一回十日發行（一ヶ年完結）

定價　一ヶ月分（一冊）六ヶ月分（増刊一冊共）七冊　一ヶ年分（増刊二冊共）十四冊
金貳拾五錢　金壹圓六拾五錢　金參圓貳拾五錢

代金はすべて前納のこと○前金相切候節は其前號の帶紙に會計切と朱記可致候間御注意ありたく候○小爲替にて御送金の時は東京早稲田郵便受取所宛に願上候○郵券代用は謝絶す○代金領收證は御送り不申候間御入用なれば端書又は郵券御封入被下度候

廣告料
一等　金貳拾五圓　一頁
二等　金貳拾圓　二等金拾圓　半頁
三等　金拾八圓　三等金九圓五拾錢　一行
金參拾貳錢

一等は表紙の二、三、四○二等は各色刷廣告の前後○三等は其他悉皆○一行は五號活字廿四字○三十二行にて半頁○廣告料は一切前金に願上候○一等は一頁に限り二等は半頁以下謝絶す

明治三十七年一月七日印刷
明治三十七年一月十日發行

不許複製

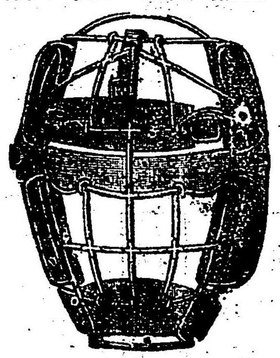
編輯者　永持德一　東京市牛込區早稲田鶴巻町二百十三番地
發行者　五十嵐力　全　小石川小日向臺町三丁目十三番地
印刷者　荒川信賢　全市小石川區關口町二百番地
印刷所　熊田活版所

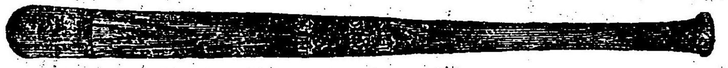
發行所　中等教育會
大賣捌所　東京　◉東京堂　◉東海堂　◉有斐閣　其他
東京市牛込早稲田　早稲田大學出版部内

諸學校用
體操器械

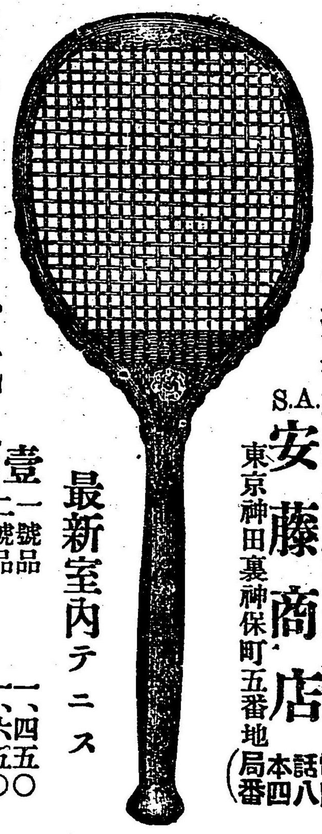
恭賀新年

登錄商標
SA
安藤商店





改良ラケット



二重枠ラケット一組四本代價

一號品四本	一一、〇〇
二號品四本	一三、〇〇
三號品四本	一一、二〇
四號品四本	八、〇〇
五號品四本	七、二〇
六號品四本	六、〇〇
七號品四本	五、七五

體操器械製造販賣元
S.A.
安藤商店
東京神田裏神保町五番地
（電話本局四八四番）

兵式體操之部
●兵式體操器械各種
●遊戲體操器械各種
●室內外遊戲器械各種
●野球庭球用具各種
●樂器類各種
●其他一切製造販賣
仕候

一式入函代
壹號品 一、四五〇〇
二號品 一、六五〇〇
三號品 一、八五〇〇
四號品 二、〇〇〇〇

最新室內テニス

雜錄

英國 オクスフオード

在英國 島村抱月

當オクスフオードは人も知る如く、當に英國第一たるのみならず、歐州でも最も古い學問地の一つで、倫敦テームス川について上ること滊車で一時間半許りの所、小さい町ではあるが、格式の高い、由緒のある點に至つては、他に比類が無い。大學は町中の諸所に散在してゐる二十有餘のカレッヂから成り、學生は常に三千以上である。學校の建物はいづれも三百年五百年、中には八九百年の歷史を持つた古いもので、其の偉觀は到底外で見ることの出來ない立派さである。玆に說明する寫眞は即ち當オクスフオード大學の一部である。

オクスフオード

第一、モーダレン、カレッヂ

(Magdalen College)

これはオクスフオード大學中で最も古い建物の一つで、此の繪（寫眞參照）に見えてゐるのが其の正面の塔である。構內の古色眞に蒼然たる諸講堂や、何百年の樫の大木の立ち幷んだ庭に鹿が群を成して遊んでゐる樣は、日本の奈良あたり其のまゝの神々しさに見える。

第二、クライスト、チヤーチ、カレッヂ(Christ Church College)

大きな點に於いては此のカレッヂが當地第一である。（寫眞版參照）。彼の大政治家グラッドストーンは此の學校から出た。繪に見えるのは、矢張り正面の塔で、其の時計はトム、タワーの鐘といつて有名なもの、昔は在學生の數だけ打つて即ちそれを合圖に町家も戶を締めたといふことで、即ち所謂カーフユー、ベルの名殘である。今は九時過ぎに百一つ打つて、やはり學校などの門限と

見られてゐる。

第三、セルドニアン、シアター

(sheldonian Thentre)

これも見事な建物で、稱號授與式など行ふ儀式場である。その名の示す如く羅馬のシアター即ち公會堂に象つて天井には昔のカンバスを野天に張つた摸樣が書いてある。有名なものだ。(この寫眞版は次號に掲ぐることにした)

第四、アイシス川のボート、

レース(River Isis)

これが當大學のボート、レースの寫眞である。(この寫眞版も次號に掲げる)テームス上流にあたり、時候は五月の中頃がエイヴ、ヴキークと呼ばれて、その時である。學生などが自分の朋友、身寄など、殊に婦人の客を多く招いて、ボートレースの間は毎日之れを見物させるがため、一年中でオクスフオードの最も華手やかにゲー(Gay 面白ろき、又たは樂しき意なり)になるのは此の時と稱せられて居る。以上は前號の豫告にも掲げたように早稻田大學留學生抱月島村瀧太郎氏が特に四枚の美しき寫眞とゝもに本會に寄贈せられたものである。こゝに記して同氏の厚意を謝す)

編輯だより

▲本月開會さるべき第二期第二講話會の詳細は卷頭に掲げし會告に依り諸子の治く御承知下され候こと、存候、就いては進んで傍聽あらんことを希望致候。

▲會員諸子より給はりし御年賀狀に對する御挨拶は別項掲載致し候。尚同樣なる御年賀狀を本會は講師諸君より數多く給はり候。こゝに其の御厚意を謝し申候。

▲取り分け講師志賀重昂氏より給はりしものは、左の面白き御文認めあり申候。

小生義も御蔭を以て益々壯健を極め體量は廿二貫と相成りシャツを着けずして越年致し候、此節の樂は推挙を堵鑒致し、今春の舒發菌を待ち居り申候……

俳句雜話

森 た つか

多忙にかまけて、久しく俳句のお話が御無沙汰になつたので、忠實なる會員諸子から大分御不審やら御催促を受けたのであつた。そこで爰許は漸くに時間を割愛して、此の方面に筆を走らせる餘地を作つたから、少々俳句の雜話なり致して見ようと思ふ。

が、それに先立つて云つて置きたいのには筆者は昨年の歲暮から今年の新年へかけて千葉地方へ旅行して居たから、旅中に少々發句も出來たといふもので後ればせの氣味はあるが、御年始にかへて、その二三を此處に掲げる。

旅に居て着のみ着のまゝ明の春

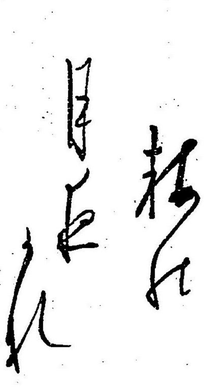
初日さす浪は霞の礎がくれ

初鷄や近き後の山里に

この他にも未だ大分あつたが、此の邊で御免を蒙り、扨て本文の俳句雜話にとりかゝらう。

▲主觀と客觀

故尾崎紅葉氏自筆發句



と云ふような標題を付けると何うやら難かしく、哲學の話でも述べ立てるように思はれるかも知れぬが、こゝには其樣なむづかしいことを述べるのでは無い。俳句に於ける主觀的と客觀的とのことに付いて述べるのが、筆者の目的である。

夫れ觀るもの、聽くものにつけて悲しみ笑ふのは、これ人情の常である。と

ころが、その悲しさ其の可笑しさをば、直ぐに悲し、可笑しとばかり云ひ現はすと之れは主観的の俳句になるのである。云ひ換ふれば、人が或る物に就いて起つた感を抽象的に云ひ現はしたのが主観俳句である。譬へて云はうなら、櫻の花を見て麗しいと感じた場合に

「あゝ美しい」「立派なるかな」

と、其の感じたまゝを云ふのが主観である。俳句で所謂主観である。芭蕉の句に

面白うてやがて悲しき鵜舟かな

と云ふのがある。これは有名な美濃の長良川の鵜船を見て詠んだもので、主観的の俳句である。それからまた同じ芭蕉の句に

竹の子や幼き時の繪のすさび

といふ俳句なぞもある。これも主観的の俳句であつて、

『自分が幼い時分に、筍を書くといふのであつたことをもあのようなものを、なぐり書きに書いたことをもあつた云々』

と、昔のことを思ひ出し、その感じたまゝを其の儘に云ひ現はしたものである。

然るに、同じ筍の句に

竹の子や畠隣りに惡太郎　去來

竹の子の皺の案内やおしさし　蕪村

といふのがある。これ等は客観的俳句である。それを何故かといふに、客観は我が感じた事物を其のまゝ直寫するのである。云ひ換ふれば、人が嬉し、悲し、面白し、可笑しと感じたことを其のまゝに、嬉し、悲し、面白し、可笑しといはずに、其の嬉し、悲し、面白し、可笑しと感する對象を捕へて來て、繪畫的に描寫する時は、客観の句になるのである。即ち

鵜につれて一里は來たり岡の松

これは其角が鵜飼を見た時の自分の心の感じを其のまゝに寫したものである、即ち其角が鵜飼を見て感じた事物を其のまゝ直寫したものである。即

ち客観的の句なのである。

以上述べたので、俳句の主観的及び客観的ということは略ぼ判つたことであらうと思はれる。そこで、初學の人々には、主観客観の孰れの句を學ばせるが好いかと云へば、成るべく主観的の句を避けて、客観的の句、即ち繪畫的の句を作ることが最も安全なのである。

何故に安全であるかといふに主観的の句はやゝともすると理窟に流れ易いのであつて、この理窟に流れるということは、甚だ俳句の趣味を害ひ、厭味に陷らせることが多いからである。が、實際に就いて云ふと、初學の人々は兎角この主観的の俳句を作りたがるので

ある。しかも極めて狹隘な、理窟的の句を喜ぶものである。が、漸次俳句の研究を積むに從つて、その反動として此の主観的の俳句が可厭になつて、終には客観的の俳句を好むようになるのである。然れども此の客観的俳句を好む時代も其様に長くは無いので、即ち客観的の作句も厭きが來る。そこで主観、客観を交へて用ゐて見たくなつて來る。

勿論、この時代は甚だ進歩した時なのであつて、融通自在な俳句を作つて見たいと云ふ必要から、斯く主観客観を交へて作るようになるのである。が、この主客兩観を交へた句のことは差向き必要が無いから、此處には述べぬ。

▲寫生と題詠

この二箇條は俳句の修業を試みる上に必要なことである。但し、こゝに俳句の修業と云つたのは既に此の道に志し、その豫備として、書籍を繙讀することも充分あり、先輩について種々敎へを受けた後のことゝ承知ありたい。

そこで

草臥て宿かる頃や藤の花　芭蕉
雉打て歸る家路の日は高し　蕪村
辻待の車置いたる雪間哉　紅葉
鶏のうしろ吹かるゝ春の風　竹冷
藪蔭や一路斜に殘る雪　小波
東雲や聲の限りを初鴉　愚佛

これ等は寫生の俳句である。大和路の旅して草臥れたる足ひきずりながら、宿をとらうとして藤の花の盛を見たと云ふ意味の芭蕉の句、彼方の山、此方の山と朝まだきから雉打ち歩いた後、意外な獲物を、意外に早く、日も未だ高い内にせしめ得て家路を指して急げる風情を述べた蕪村の句、宛然面向くべくもあらぬほど吹雪して居たのが唯た今小休みした間を、客待ちの車、辻に置きし有樣を述べた紅葉の句、その外、竹冷、小波、愚佛諸氏の句、いづれも實際、眼に觸れ耳にすることをば、彼の畫書きが鉛筆を取つて、茶碗の形から田野の風景を寫生するように、面白ろ可笑しく直ぐに十七字に咏じ試むるのは、この寫生の俳句の特色である。で、斯く實際の景色を見て寫生することは、俳句の研究上欠くべからざることである。

とは云ふものゝ、この寫生といふことにも一つ考へねばならぬことがある。それは他でも無い。初學の人は此の寫生といふことに束縛されて、兎角作句の自由を失ひ勝ちになる。即ち

第一、實際の景色に束縛される
第二、想像を逞しくすることの自由を欠いて、思ふ存分の句を作り得ない

と云ふような結果が生じて來るのである。

そこで此の弊を拒ぐことの出來るものは何かと云へば、題咏の法である。

題咏と云へば讀んで字の如く、題に依つて作句することである。云ひ換えれば題に依つて種々の光景を想像するもので、例へば梅といふ題を得たとすれば、水車場のほとりに在る梅を想像するとも、電車道路の梅を想像するとも、古墳の邊の梅、公園の梅、池邊の梅、その他菅公を連想して來るとも、支那の詩人の作つたものを想像して來るとも夫れは素より隨意である、されば梅十句若しくは梅百句等の題を設け、梅に關するあらゆる光景を想像して作句するのも、仲々面白い方法であらう若しくは、新聞雜誌の課題に應ずるのも、題咏の一つの方法であらうと思はれるのである。

されば此の題咏といふものは、寫生と云ふものに俳

老鼠堂永機翁の肖像

俳句雜話

句修業の二大道途であるといふことが出來る。それからまた、如何に寫生に巧みで有つても題咏が拙である時には、まだ完全の俳人といふことは出來ぬのである。而してまた寫生に於ける缺點を補ひ得るものは、此の題咏の特長であると云ふことが出來るのである。

とは云ふものゝ、世間には隨分題咏の害を云ふものがある。即ち題咏の害のみを見て云々する人々が無いでは無いが、これは至つて淺薄な考ばかりで題咏を見る人々であつて、決して俳句の題咏は題咏といふ文字で連想さるゝように遊戲的のものでは無いのであつて、運吟に陷るを避ける上から云つても、想像の材料を豐富ならしめることの出來る點から云つても、俳句の題咏といふことは、仲々便宜に富める方法と云ふべきである。

今一つ此處に云ふべきことは、前に寫生の句として掲げた俳句は、必ずしも寫生の句と限られて居ないことであつて、題詠の句としても前に掲げたような句は、決して得られない譯は無いのである。次に諸子が俳句を翫味する一助に供する爲め少しばかり古今人の俳句を掲げて置かう。

元日や草の戸越しの麥畠　召波
紙鳶買ふて子心ぞ憂雨つゞき
鶯につめたき雨のわしたかな
北そらや霞て長し雁の道
古き戸に影うつりゆく燕かな
鶯の啼くやきのふの今時分　樗良
山里や家根へ來て鳴く雉の聲
暮るゝ日や庭の隅より梅の影
旅人の見て行く門の柳かな
油斷して花になりたる櫻哉
元日や一輪咲きし鉢の梅　萩朗
大聲や御慶申すと壁隣　烏黒

切凪や落ちて儚なき水の上　斷夢郎
鶯の松を繞りて高音かな　紅葉
燒跡を雨にさまよふ燕哉　美清

▲老鼠堂永機

蕪村の高弟として名高い其角から七世の流れを汲んで、當時俳壇の老將軍と目されたる老鼠堂永機は八十二歳の高齢を以つて一月十日を以つて沒した。死なば秋の辭世を筐に十千萬堂紅葉を失つた我が俳壇は、こゝにまた此の老將軍を失ふたことである。

喜々悲々一條戲
昨日晴今日雨
煙消え灰消えて終に物もなし

これは生前に認めて定めて置いた辭世だと云ふことである。序が好いから、一寸こゝに書き記した。猫ほ同翁の肖像は前の頁に木版にして掲げてある。

旅行之友

朝鮮視察談

深野春星

▲緒言

僕は今を去る八年前、日清戰役の終り頃、父母と共に島も通はぬと云ふ、玄海灘を經て朝鮮釜山に渡つた、其の時僕は丁度十歳であつた、其の間日本で兼ねて見ぬ珍らしき事物を見聞し、且つ本年避暑休暇を利用し、仁川、京城、木浦、馬山等を旅行して、朝鮮に就て少々研究する所があつた、ソコデ我が知り得たる事物を、我が親愛なる會員諸君に物語らうと、かくは朝鮮視察談と名けた譯である、殊に今や、平和の聲は將に去らんとして、劍を拔いて起つの秋は來らんとする今日に於て、彼の朝鮮國に關する智識を得るは最も必要であらうと考へる。

さて、何から話そうか……抑も朝鮮國たるや、日本とは僅かに一葦の海峽を隔てゐるのみであるから、天氣晴朗なる日には對馬山頂からこれを眺むれば、雲烟縹緲の裡に望むことが出來る、それに我國の歷史上、其の他に密接なる關係を有して居るとのことさへ、諸君の記臆に止まつて居れば、其で十分であるから、先づ釜山港のことから、御話し致して、段々歩を進めて、朝鮮の風俗、敎育、古蹟場、等のことに及ぶ樣にしよう。

▲釜山港

先づ試みに朝鮮中に、日本人の最も多く居留して商業の盛大なる處は、何所かと問ふたらば、何人も一齊に異口同音に、釜山港であると云ふであらう。この釜山港は、三面山を以て圍まれ、南方は絶影島と云ふ周圍凡そ七里程の島と向き合ふて、大なる港を形造つて居る。概して朝鮮は山には木なく、石あるのみで山は寂然たるにも似ず、釜山港の中央には老松蓊蔚たる龍頭山がある、之れが居留民即ち我が同胞に對し、如何に幸福を與へるか知れぬ、實に天の賜と云はなければならぬのである。人口は凡そ壹万二千人余、其の盛大は驚くべき事である。最も繁盛なる町は本町辨天町西町幸町等で、辨天町は日本人相互の商業が盛んで、其の他は朝鮮人と取引が盛んで、人馬織るが如しである。

龍頭山の中央にある壯大なる建物、之が我が國領事館で其他居留地役所警察署銀行諸會社など、完備の域に達して居る。

軍備としては、慶大なる兵營を設け、本年からは一大隊の軍隊を駐劄せしめて不時の變に備へてある。敎育はと云ふと今度四万圓の資を投じ壯大驚くべき學校を新築し、敎員二十五名、生徒千貳百人、即ち一割の割である、電燈は市内を不夜城と化せしめ、電話も完備して居る盛況、始めて航海するもの、誰しも一驚を喫せぬものはない。風俗は日本内地に比し十分贅澤を極めて居るとせねばならぬ。新開社は西町にあつて、朝鮮時は一般の人の目に付く所である。

報を發行して居る。

其の沿革を云へば今を去る百參拾年頃から、彼我の交通を此所で始め、居留地の如きも以前は古館と云ふ、今の居留地を離る、半里許りの處であつたが、船舶其他の不便の爲めに今日の所に移轉したとの事である。

本港と日本との距離は直航すれば、馬關から八十浬で即ち十四時間で達し、對馬へ寄港し十六時間を費し、博多からは十八時間で達し得られるのである。即ち本夜乘船すれば、翌朝何の困難もなく愉快に到達することが出來る。貨金僅かに四圓である。

▲風俗

こゝに少し風俗談を試みよう、玆に事新らしく喋々する必要もないが、全体朝鮮國は昔日では東洋の文明國で御座ると、自から稱し、他も之を許して居つたのも似す、今は其の面影さへなくなつて、すべての方面に於いて衰頽した。第一、民家の如きも頗る狹隘で、之を一口に形容したら、我國の乞食小屋である、とでも云はうか、勿論室内ではわれ等の如き五尺に滿たないものでも、直立する事が出來ぬ。しかるにこの様な家に住んで居る男女は中々健全で其色は飽まで黑く、恰かも銅像の様である。風呂とてもないから一生入浴することが出來ぬ、たゞ夏時海か川などに行つて身體を清むる位で、御本人様は、至つて平氣の平左で、自分は自然天然を利用して居ると云はん許りの顏付で居るのは笑止千萬である。

食物は日本人の中等以下位で、大に異つて居る所からして、韓人（朝鮮人を韓人と云ふ）に接すると、一種云ふべからざる臭氣が紛々として鼻を衝くのである。若しも朝鮮人に慣れない人をして此等の土人に對し對話せしめたならば、一分間も經ぬ内に、其人は「アナ堪へ難な」の一聲を殘して逃げ去るであらう。諸君も必ず其等の人々の一人に相異ない。

サテ、普通の人は傘を持たない、否無いのである。故に雨沛然として降つて來たらば、ソレハ大變！　老を問はず、若を論ぜず、男も女も、彼方の橋下、此方の物影に之を避けようとし、右往左往に馳せ廻り大混雜！　一種の喜劇が演ぜられるのである。

衣服は通例金布で恰かも洋服の樣である。之に面白い話がある。日本人の勞働者も、隨分貧乏の方であるが、韓國は一般の生活の程度が低い、其勞働者に到つては話にはならん、其金布の白服は炎熱纖を溶かす夏も、白雪皚々の冬日も彼等が用ひ、甚だしい事には、着換一枚も持たぬものが澤山あつて、決して珍らしくないのである。例へて之を申せば、或一人の主人が近頃一向見えぬので其の隣人が、其の妻君に安否を問ふと、妻君答へて曰く「近頃は天氣が惡くつて、先日衣服の洗濯をなすも乾かす、爲めに數日寢床に引籠りて出づると能はず……」と、而して彼等は平々然として之を語たり、平氣にして之を聞く、ナント滑稽の至りでは無いか。

彼等が病氣に罹れば如何であらう。勿論文明的の醫師は居らない

普通の病氣を醫する飮醫者でさへ、數々として曉天の星斗を見るが如しであるから、我國より輸入する賣藥を神か佛かの樣に有難く渴望して居る。其内にはかの有名なる天印（大阪の人骨問題で有名なる）さへもあるとの事、實以て淺間敷いではないか。其の上、裏はむさ苦しきこと故、彼等は室に居るにたへ兼ね、山野を跋渉す、青天井なる天地を臥床とし、猫か犬かの樣に寢轉び、冬は室の下で焚火をなして暖を貪り、衞生に害あるも顧みず、いと愉快げに、丁度日本人などが、ストーブの前にでも座して居るがのようにに放談高笑、傍若無人がと疑はるゝ有樣で。彼等の頭には、愛國心の、名譽心の、と云ふ事は更にない。實だ働けば飮食に飽き世を渡るを常とし、貯蓄とてもなく、其の日暮しであるから、不時の難に遇へば人の力を仰がねばならぬと云ふ淺間敷い有樣!!!　とは云ふものゝ、並に一つの賞すべき事がある、即ち禮義が宜く行はれ長者を尊ぶが、重ぜらるゝ一事である。例へば、父母兄弟の前では許しを受けねば、座に就く事が出來ぬとか、甲乙が爭を始めて居る時に、老人が仲裁すれば、此等は一言も云はずして其の爭を止めるのである、其の他血族結婚、同性結婚等が嚴禁せられ父母が死した時は、三年間大なる笠を着けて弔意を表して居る等の點に到つては實に感服の外はない。

次に云ふべきは結婚者と未結婚者との間に權力の差があることで爲めに知らずく、早婚の弊に陷るのは、彼の國の爲めに、慨かはしい次第である。

朝鮮視察談

人の壽命

市野虎溪

人生五十、七十は古來稀なりだ人の命の儚なさを朝露の其れに譬ふるなぞは、一口に詩的形容だと貶されぬ哩とは、くしやだらけの手に數珠を繰操つて、水洟垂らした爺さんの言ふことで、棍棒を提げて廣場へ立たうといふ少年の夢にも入るべきことではなからう。なんだ、五十年や百年、生き伸びたからつて生き縮んだからつて善いではないか。人間といふものは何も肉躰ばかりの主人ぢやない、どえらい事を遺つ附けて身後の美名に史上を照すはこれ無窮の壽命を保つといふものだ、男子快心の事茲に在りだ、孔丘も朝に道を聞かば夕に死んでも可いと言つて居る、君餘まり悄乎したなふな壽命が縮るよといふが有爲少年の氣焰だらう。

とはいふものゝ人間の願には誰も一樣に刻印が捺さつて居る、其れは美人の愛嬌ばくろといふ樣な有難いものではなく、忌ま〳〵しい死といふスタンプだ。僕は今生きて居る、生きて居るものが死ぬる、何だか僕には非論理的で、非哲學的の理窟の樣にも聞えるが、まあ是れは事實らしい。アダム、イブの時代から未だ死に損なつたものゝ唯の一人もないのが何よりの證據だ。如此考へて來ると、誰でも急に命が惜くなつて、死にたくなくなつて、誰が死んだ彼れが九死一生だ、なぞといふ話を聞いてさへ餘り心持が善くもないだらう。

今に死んだからつて悔みはないなぞといふ男に僕は時折出逢ふこともあるが、これは「否君なぞは長命しますよ」と言はれたい謎か、若くは三田式の瘠我慢だらうと僕は信じて居る。どうして、生きて居るものが生命が惜くないなぞといふ變的な事があつて溜るものか、生存の慾は我々の性慾だから、其樣なことは腹が減つてもひもじうない

といふまりもつと大きな虛僞だ。この慾は何も年の老少や貧富に由つて差別のあらう筈がない、年寄の死にたいと處女の尼になりたいとは虛僞の骨頂としてあるのはさすがに穿つて居るぢやないかこの消息は近來年寄を有難かることが大變流行つて來て、彼處に百幾歳のお爺さんがあるから召ばうの何處に百才のお媼さんがあるから行つて見やうのといふので、中には年齡を僞つてお目出度連を擔がうといふ山師が現はれたといふのでも合點が參らう。

だから、無病長命の法、一步進んで不老不死といふ樣な先人未發の秘法でも僕の掌中に在らば、先づ將來日本の運命を背負つて立つ少年諸君に薦めたい、又諸君も餘り厭な顏をしないであらう、が、不幸にして秦の始皇帝以來人間が心膽を鍊つて考へて居るこの靈藥の發明は、今後幾世期の後とあるから、百年や二百年生き延びた分には間に合はない。其れならば、我々は五十年七十年で以

て滿足して、其の間に出來得るだけの活動と快樂を盡して心靜かに墓に潛るべきであらうか、まあこれも善い分別だ、が僕は別に少々考へがある。

或る生理學者は斯樣なことを言つて居る、人間の身躰の組織は、充分の攝生と保護をさへ加へれば、三百年は生命を保續すべく出來て居ると、是れが果して事實として證明される時が來るであらうが、僕は思ふ、三百年や五百年人間の生存するに何の不思議もなからうと。試みに考へて見給へ人の生存といふのは新陳代謝の作用を反覆することだ。今十の滋養を取つて其の八分を消耗すればよし二分殘るこれは吾人の筋となり肉となり骨となつて殘るものだ。で、この作用が能く秩序的調和的に進行していつたならば、精神と身躰を消費して了つてゼロになるといふことがあらう筈がなし。

否々三百年五百年處ぢやない、死といふ現象を絕對的になくなして了ふ時が來らぬとも限らぬ。

左樣、病氣といふ厄介物はある、文明の進歩と共に善い藥物やら器械やら療法やらが年々に發明されるが、又病魔の方でも敗けずに出沒變化の秘術を盡して、成丈け地獄を繁昌させようと圖つて居るらしい。譬へば一方に生きてる同士で生存の競爭が行はれて居ると、此方では生死の競爭といふのがすさまじい勢でやつて居る。とやすれば生存軍が色めきわたつて甚だ危なげに見えることがある。これでは折角の三百年説も少々覺束なくなつて來たやうだ、が又々落膽したものではない。

病魔、何が恐いことがある、凡そ招かずにのこ〳〵やつて來る奴は、露西亞兵の外にあらう筈がない、病氣は素因やら誘因やらの招待狀があるから來るのだ。謂はゞ病氣は不養生者が納める租稅だ、否科料だ、罰金だ。なに、黴菌がある、黴菌がなにしに恐からう。黴菌があるから病氣などは與し易いといふものだ、何等の原因もなくて突然偶然病氣が發つてこそ始めて危險千萬だが、黴菌の爲に病氣が起るなら、其の黴菌を殺しさへすれば善い。其れがむつかしいのだと、それも左樣だ、が、六十幾元素がラヂウムの發見で一元素にならうといふ今日では、黴菌の數が百の千のといふのは甚だ幼稚な考へだ。今一層藥物學と病理學とが進歩してくると、一服萬病といふ藥品が發明されて、其の効力に由つてあらゆる黴菌實は唯一の黴菌を撲滅させ得るに相違ない。若し斯樣な時代ならば、胃癌の紅葉も肺患の高山も尚百歳の壽を保ち得たであつたらう。

併し僕は柄にもない生理學や病理學の話をして諸君の笑草にならうといふのではない、こんな話を山鳥の尾の長々しく饒舌つたつて、人間の壽命が一分一厘伸びもせねば縮みもせまい。だから如此なのんきな研究は世間の學者に任せて置いて、僕は別に我が家の茶飯を諸君に薦めやう。

五十年は五十年として置いて善いぢやないか、何もちつとやそつと、まけろの引けのといふには

當らないが、其れは百年も千年も生きて惡いことはない、至極結構な仕合だが、人間の壽命も大概程度がある、又人間の生存慾も程度がなければならぬ。十百年生きたつて、七度人間に生れ變つたつて、豚の如に飮むと食ふとで能事了ると來た日には生命の尊とい點は露ほどもない。人間の生命が大切なは、爲すべき仕事が多く殘つて居るからで無爲無能で暮すなら生と死と些の相違もないではないか。否々生命といふのは活動の又の名であるから、活動せぬ人は生きて居るといふより化石した人木乃伊になつた人といふのが適當だ。

だから我々が焦心苦慮すべき處は、何うしたら長く生きられやうかといふのではなく、何うしたら善く生きられるだらうといふのでなければならぬ。又何うしたらば三百年の壽命が保たれやうかといふのではなく、何うしたら五十年で三百年の事業を爲し得られやうかといふに在る。併し世間の事は何事に依らず目的通り理想通りには行かぬものだ。自分は隨分世の爲、國の爲、人道の爲に貢獻する積りの大勇猛心でやらうとしても、社會の境遇やら、自己の天分やらが許さぬことが多い。又人間の壽命も、やくざな、無能な奴が短くて、有爲なえら物が長くて呉れゝば誠に結構だが、なか〳〵左樣は造化爺といふ人間屋が卸して呉れぬ。又善惡の應報なぞといふことが事實ならば、仁者は壽ながしの筆法でゆけさうなものだが、これすらさう正直にばかりはゆかぬ。此樣な工合だから、嗚呼天道は是か非かなぞといふ悲しい音が少年の口からさへ洩れ出すのであらう。

が、人生を悲觀だの樂觀だのと言つて禪僧顏をする手合は、大變ものがわかつた樣で、實は沒分曉漢だ、何も自分を外にして世間に悲しい事も樂しい事もあつたものぢやない。いや〳〵此方の態度次第で世の中は樂しくもなれば悲しくもなる、有躰に言はば、快苦といふのは活動に伴ふ條件であつて、波動の一昂一低も、丁度コンドのかも

も滊車の動搖も皆運動から生ずる必然の狀態であると同樣だ。我々は苦樂觀などといふ淺薄な理窟に耳を貸さないで、其の以上に出なければならぬ其の以上に出るといふのは、苦も樂も感じない木食上人の樣になれといふのではない、苦樂を生存上の波動と見て、溺れぬ樣沈まぬ樣に巧みに乘り越える事だ。人は安心をすれば死ぬともいふが、世の中を苦にしてあたら生命を縮めるものもあり又棒にふつたものさへある。人間の壽命は身躰の健否に由つて長短のあるは必定だが、精神の强弱に由つて伸縮することも忘れてはならぬ。誰かが言つた、勝つ〳〵と思へば勝ち、負ける〳〵と思へば負けるものだとこれを茲へ持つ來ると死ぬ〳〵と思へば死に生きる〳〵と思へば生きると言ふことが出來やう。

かう述べてくると、僕の說は精神的長命の法とでも言ひさうだが、如何に生きやう〳〵と思つても不幸短命の時は何うなさる、未だ修業時代準備時代に火が消えて了つたら何うなさる、尤もこれも千に一萬に一ならば又しも、隨分これが世間に數が多いと來てはいやでも悲觀を唱へなければならではないか。御尤も〳〵これも確かに一顧の價値がある、僕はこれに對つては下の如く說明して見やうと思ふ。

人間が社會に生れて來て死ぬまでの間を譬へて見やうならば提灯行列の樣なものだ。或は不注意な爲に風に吹き消されたものもあり、或は蠟燭の心に傷み處がありて自滅したものもあり、中には蠟燭の全く燃え盡きておのづからにて消ゆるもあらう。一樣に蠟燭なれどうす暗くて一身をすら照さぬ者もあるに、一方は光耀赫々電氣燈の樣なのもある。提灯の光は或は明或は滅、或は粲然或は暗淡、千差萬別であるが、一度は必らず燃え盡くるか消えるかの時は來るのである。我々はこの蠟燭の消えぬ中に務め勵み、其天職を盡しつゝあるといふ點に自己の安心を求めねばならぬのだ。

湘南之春

村羊生

《一》夢の色

思へば一年の昔なり。去年正月伯母を奉じて相州伊勢原に遊び、見馴れぬ田舍の春珍らしく、『あのな、鬼があつてな、桃太郎さんが桃から生れてな、鐵の棒で抑へて寶物を山程な……』と、從兄には二男の鈴夫といふが、わが膝を本陣としての桃太郎さん物語にも厭き果てし五日の朝、板戶の江山堂病院を辭し、平塚までは車にて、そこよりは期せし列車には二時間も間あるといふに、ないよ、日頃鍊えし健脚をためすも一興と、金時山の麓よりさしのぞく芙蓉の面影に惹られて、さんざ時雨の松風も、旅の我が身にはふれしからましなど、馬入河の渡場にかゝりもは丸時過ぐる頃なりき。

追分自慢の渡守が、銀鈴のやうな美音に水棹はさつと流れて、輝いては白玉の珠簾とも、練絹の流水を一文字に、ゆら〳〵と浮ぶ渡舟の舷に、袂かざしてふりさけ見れば、松原一里の里近く、ほの〴〵の川霧を馬入の鐵橋に、おぼろけに霞みいでし芙蓉の峯を仰いで、薄氷の汀を朝炊の煙低く這ふ渡小屋のはね釣瓶のもとに、我れは再遊を心に誓ひ、藤澤の驛より橫須賀に向へりき。

あり し哉。月は月を追ふてめぐりぬ。而も塵事は限りなくわれを捕へて落花の春もくれたけに、月のおとづれ雁の、しば鳴く秋の野も更けて、われは猶ほ想を果すことなくして止みしが、恰かも今玆一月、懷まづわれに幸ある二日間を、やはか今を措いてはと、着のみ着のまゝ帽子を眼深、頸巻ぐるりと外套に身をつゝんで、高が一夜の旅路なれば、一本の鉛筆、一冊の雜記帳、孤枕黯然としてわれは品川驛にむかひぬ。

正に明治三十七年春王正月四日の朝だき。

（二一）鎌倉道

曉の霜を踏んで、飛び乘りしは品川發の二番といふのに、うす霞の海面を、七砲臺邊波おだやかに觀音岬の燈臺かけて、白帆三四ゆめの如くかゝれるを見る。不景氣なればの乘客は至つて尠く、いづれの列車も膝を交ふるに及ばず。停車場にて求めし讀賣新聞の一面より四面まで、實さがしの讀者もかくまでは精讀にも厭きて、開けゆく武藏野の原とほく、秩父の山々に一年の昔を語る。

美しく晴れたる空に、懐かしき富士はまづ莞爾として我れを迎へたり。大船より橫須賀線に乘り換への途にして、計らず是れも湘南の春色にわとがれてとのみ、言葉すくなの久々なる優さしき友の手を握りつ。旅にはあるべき道づれを得たるに勇みて引きかへすやうに鎌倉に下りて、停車場より江の嶋に向かふ。

雲なき空を風はいづこへともなく吹き來りて、過がに眞向きにては身を切らるゝ許りの冷めたさを胃してゆく。さはタリスマス以來卒業式の裝束のたゞならず忙がはしさに、此の日頃を一時二時までも夜更かしたるが仇にて、風を惱む薄墨の眼鏡の人、屢〻手巾を眉にかざして行きなやみたるまたなき哀れさなりし哉。

鎌倉にて中食をしたゝむ。こゝは去年の夏やすみ師の君に伴はれて見盡したりと友のいふに、我れも橫須賀の歸りに略ぼ得知りたれば、鶴が岡の八幡宮も、長谷の大佛殿も素通りにして、愈〻腰越の鼻を超ゆれば我入道の橋あり。茅屋三四山により、流れに沿ふて立ち並べり。簇多き丘つゞき、村童村娘の小唄かもしろく、遠近に鷄の聲ものどかなり。

春はこゝにも——瑞雲のくまなくたちわたる軒端〳〵を、かたちばかりの松飾りに、わが世の春はみちわたれり。

（二二）音無川

電車馬車の行き交ひに慊焉たりし身には、のどかなる田舍路の風情の上なくうれしく懐かしく、語りては歩みぬ、歩みては語りぬ。山の麓を川に添ひて、道は村かげを、森かげを、折れてめぐりて、めぐりて折れて、物珍らしげに見送る里人の間を、ゆくりなく音無川の畔にいづ。

海は遠く稻村ケ崎かけて由井ケ濱に開けたり。仰き見れば鎌倉山の顚昔ながらに松風の音して、白水さやかに麓をめぐり音無川の流となる。水清く流れ深く、底干も知れずたゝえたる淵のわたりを落葉堆く埋めたり。霞のゆらぎか、風滿山の昔を吹いて、枯れし蘆荻のざは〳〵とあへぐ毎に、音無川のながれはむせぶが如く微妙なる響きを傳へつゝ。

人やわれや、相顧みて一語なく、何とはなしの思に久時を佇めり。

（二四）由井ケ濱

千本松原小松原、松葉の多き砂原を、道は海に添ひて外國人の別莊の籬にちかく、折れて開けてとある懸崖のはとりに出づれば、目的す江の島は鮮かに双眸に映じ來れり。

宣教師の家なるべし、崖に臨みて西洋風の一と構わり。渴ける者よ、來りて生ける生命の水を飲めよの立札ありて、廣からぬ一間にはビラトの前に立ちたまふ基督の御姿など掲げたるを、笑ましげに仰き見れば鎌倉山の顚昔ながらに松風の音して、白水さやかに麓をめぐり音無川の流となる。水清く流れ深く、底干も知れずたゝえたる淵のわたりを落葉堆く埋めたり。霞のゆらぎか、風滿山の昔を吹いて、枯れし蘆荻のざは〳〵とあへぐ毎に、音無川のながれはむせぶが如く微妙なる響きを傳へつゝ。

人やわれや、相顧みて一語なく、何とはなしの思に久時を佇めり。

（二四）由井ケ濱

千本松原小松原、松葉の多き砂原を、道は海に添ひて外國人の別莊の籬にちかく、折れて開けて

鮮かに双眸に映じ來れり。

宣教師の家なるべし、崖に臨みて西洋風の一と構わり。渴ける者よ、來りて生ける生命の水を飲めよの立札ありて、廣からぬ一間にはビラトの前に立ちたまふ基督の御姿など掲げたるを、笑ましげに仰き見れば鎌倉山の顚昔ながらに松風の音して、白水さやかに麓をめぐり音無川の流となる。水清く流れ深く、底干も知れずたゝえたる淵のわたりを落葉堆く埋めたり。霞のゆらぎか、風滿山の昔を吹いて、枯れし蘆荻のざは〳〵とあへぐ毎に、音無川のながれはむせぶが如く微妙なる響きを傳へつゝ。

人やわれや、相顧みて一語なく、何とはなしの思に久時を佇めり。

（二四）由井ケ濱

千本松原小松原、松葉の多き砂原を、道は海に添ひて外國人の別莊の籬にちかく、折れて開けて

風に激して白浪はたえず磯邊を洗へり。龍の宮居の管弦の響きとも、底の底より湧くとばかり、深碧の波の音は、時として黑き巖のはとりに白虹の彩をかけぬ。

枯れ葦の露やこぼれし行違川、流れは潮と相搏つて、雪と散りてはさつとわかれ、わかれわかれ

てはまた華やかに相爭へり。

（一五）江の島

行合橋をわたれば間もなく片瀬の村に入る、橋の袂に顧りみて、疲れたまはずやと打ち笑へば、いゝえ大丈夫よと八文半の靴とんと踏む。

道祖神の祭りと見えて、あらずもかなの三弦の音に酒のみかはす家あまたあり。漁村の淫風いづこもかはらずなど耳を塞いで、片瀬川の岸を左に風琴閣の前を砂路づたい。行く人來る人、思ひ思ひの風俗も興あり。

風情ある假橋を、右に豆相の山々を凌いで、雲に聳ゆる富士が峰の雪をながめ、左には、繪にしたやうな七里ケ濱、由井ケ濱、遠くは三浦半島を水烟模糊の間に打ちながめてゆく。江の島につきしは三時過ぐる頃なりき、讃岐屋といふに旅裝を解く。

室は三階の奥ふかく、清楚閑靜、一面山を負ふて三面海に開く。他には絶えて客とてもなき欄干に、湯あがりの心地よさを久時景に對す。湘南一帶の風光宛として名匠の斧のごとし。御夕飯前に御參詣遊ばしてはとの女中の勸めに打ちつれて出でたつ。

惠比壽屋、岩本樓など甍を並べたる細道を、一路登りつくす三十六段、晝猶ほくらく生ひ茂る老樹の道を、上がり下がりに落葉を踏んで、金龜樓の前より辨天の社殿を眺め、何とかかんとかあるわ〳〵の御社は一向に御免を蒙り、右に左に山道のうねりくねり、おようなさいまし、御覽なさいまし、御掛けなさいまし、名物の壺燒をめしあがりてお出なさいましと煩く呼びかくる道傍の貝細工や茶亭の前を、ぬける樣にして富士見亭の脇より磴を下りぬ。

（一六）夕の富士

巖は高く海に聳へたり。聳にし巖に浪はいくたびとなく吹雪の如く碎けたり。マルタよりはマリア、詩集よりは刺繍の方がとはゝ笑みたる友の、

野の百合を好みに縫ひし手絹を二つに折りて、やゝ平かなる巖に倚りぬ。

暮色はまづ東よりせまりて、落日をかざる西の一帶磨ける黃金の如く輝けり。天に風和ぎて海に浪なく、うすぐろき海の果てを豆相の山々墨繪のやうなる顚高く、永遠に造化の不朽をはこる八面玲瓏の芙蓉の峰は、儼々然として雲のとばりは天そゝれり。

山と空、空と山とを隔てゝ濃き紫紺の雲の帷は丈をはさんで更に空と空とを劃れり。雲は綿の如く柔かき光の彩に、處によりて眼さむるばかり華やかにいろどられたり。

空は刻々に變じぬ。光は光りを追ふて進みぬ。やゝに濃く、やゝに華やかに、やはか絢爛燃ゆるが如き紅の色は天の緒琴のあやのごと、澎湃然として滿天を覆ふよと見れば、ばかせる雲足まづ燦として燃ゆ、紅を薰じたる金光は赫燿として九天に閃きわたりぬ。——富士足柄の山といふ山、峯といふ峯、皆綵然として紅に燃えはじめたり。

——滿山鳴をしづめて、天地一新六根淸淨、野も山も、森も林も、巖も海も、物といふものいふもの一として燃へざるはなく、人もわれもかくてしばらくは焰のうちに薰ぜしが、やがて夕の色せまるに隨つて次第〳〵にうすくあはく、あはくうすく、うすれうすれて白玉の富士まづ橙に紫に、紫紺に藍色に、見る〳〵光の彩の一色ごとにうすれゆきて、茫々たる夜色は萬象にみちわたると共に、一樣に黑ずんだる海のおもてを、櫓聲かすかに、歎乃はのかに相傳ふ。

（一七）月の海

黃昏の路の光りを辿りて宿にかへれば、途に迎の者灯ともして我等をまてり。

爐を圍んでしばらくを昔に語る。やがて晩餐の膳も了りて、盡きせぬ眺めの欄干によれば、暮れ果てたる海面を片瀬の村ついやき、暗を縫ひ山に添ひて電車の相往來するを見るのみ。

欄に近く椅子をひいて、相對して海にむかへり詩の面影はアリマタヤのヨセフよりは、寧ろ基督の十字架を負はされしクレネのシモンにこそ見るべけれと、われの輕く『我が家の歴史』を搏てる時、恰かも、やゝに白みそめし鎌倉山のあたり、星の光りの心うすれしと思へば、十七日の月あざやかに山の端を出でたり、見る〳〵よは〳〵しき光は海の上を流れて、さながらに金蛇明鏡の上を走るとばかり、する〳〵と潮の流れに黄金の光、白き眞砂の磯より迅りて龍のあぎとの巖に音もなく碎けたり。碎けたる時、島の松が枝に讃美の歌響いて、海に金鱗の漣さら〳〵とさゝめきわたりぬ。

秒——而して分——。光りは洽く天地にひろごりぬ。れのゴからなる混沌の、さは神と人とを此の世にわかちしごと、近さより遠く、遠さより近く、きはひては物みなの姿も明らかに、枯葦しげる鎌倉山の裳裾白く、壽永の昔もかくやありけん七里ヶ濱由井ヶ濱、片瀬の里もおぼろげに。落を高く、神の鐫りにし橋の袂か、あゝ黒ずんだる森かげを、片瀬川のながれ靜かに、豆相の山々ゆめの如く見えそめたり。

月は松の梢を縫ひて光り愈〻明らかに、海には黄金の流れ湧きいでゝ、稻村ヶ崎の霞づたひ、ひろごる浪の末とはみ、逗子の濱もほのかに、沖とはく白帆の影もあらはれたり。思ふ、此の波、此の海のよする所、死なば共にと武雄が病める浪子の腕を抱いて泣きし、不動祠畔の其の夕にもかよはずや。

此の夜われは、遠からず都の月花に背くべき友と、幾夜の夢にかよひし湘南の月の海に、夜ふくるまで語りつくしぬ。過ぎしを語りてわれに涙あり。今を語りて友はひそかに唇をかみぬ。かくて吾等は神につける光をとはして何とはなしに、前途の光明にはゝ笑めり。

月の海のごと我が心の靜かなりしを記す。

(八) 曙の富士

東雲の光にさむれば、有明の燈いとかすか也。穩やかなる友の夢路を破ぶらんことの、あまりにも心無かるべきを憚りて、獨り靜かに、扉を排して西の欄による。

曙の富士！

如何に尊さ、美妙なる彼の女の姿よ。莊嚴といはんか、神祕といはんか、われはあらゆる地上の渴仰頌榮の文字を聯ぬるも、到底神々しき彼の女の面影をだに寫すべからざるを思ふ也。

海に波なく、プロシア藍の空の色。空と水、水と空とのけはひをうす紫の霞は幻の如く立てこめたり。海も陸も、たゞ一樣にはのじろくかすみわたれる間を、片瀬川の川口のあたりいさましき水棹の響を聞く。

やゝにさめゆく豆相の山々を傳へば、幾百年を經し松の老木、十丈の絕壁を海にたれたる梢に、殘月の影しろく、白銀の光りは深碧の海に一線はるかに流れたり。白帆にくゆる烏帽子岩のほとり千古の雪の姿尊く、さめたる曙の富士はやゝ紫に霞みそめたり。

われは瞑目して神の臺前に跪けり。

(九) 片瀬川

歸らなむ、さらば！

全く起きいでしは九時過ぎなりき。十時に朝餉をすまして江の島を辭す。

日暖かに、そよふく風だになければ海は油をなしたやう。淺瀨の橋の下を、武者ぶり華々しき紅蟹の、のそり〳〵と這ひあるくさへ興あり、濱風に曝されたる漁師の三々五々、長き繩を各〻の腰に纏ひて網を引くさま、呑氣も是の位にならば、成程七十五日生き延びる事請合なり。

橋づたひ、砂濱づたひ。細く片瀬川の流れに沿ひて、道なき道を辿りゆけば片瀬の村にいづ。同じく湘南にあこがるゝ人なるべし兩人づれの、立襟ハイカラの制服姿に引きそひて、白きショール

に身を包みし古代紫の袴穿きたる人。羽織の縞は黄八丈なりしとおぼゆ。睫ましげに語りつゝけて江の島の方へ去りぬ。

態ざと電車には乘らず、藤澤街道をぶらり〳〵とゆく。話題は靈魂問題より嗜好問題にうつり、音樂なき家庭の無趣味に論及せる時友の氣燄あたるべくもあらざりき。

森のかげ、松の梢、麥三寸の畑つゞきを片瀬川の水音きこえて、富士は茫藹としていづこまでもわれ等を送れり。

十二時四十五分藤澤發、歸京の途に上る。

さらば！

——明治三十七年一十一日——

兄弟姉妹にお願ひがあります。どうぞ『蟲籠』欄に面白い材料を澤山御寄送を願ひます。原稿は葉書で、匿名でもかまひませんから 毎號掲載の体裁に倣つて、諸君が本統に見た事、聞いた事で、そうして短くつて而白いのをお選び下さいまし。原稿は東京牛込早稻田鶴巻町二一三、小生あて〳〵願ひます。

（村半生）

蟲籠

二四

時子

（八）愛ちやん

愛といふ宗教女學校に通へるがありき。尋常一年生、滿七才なり。殿瑠なる基督教徒の家庭にそだてられて、あはせて日曜學校の優等生なりし。

ある日學校で、束髪の先生にこゝ〳〵して、

『お愛なんあなたどんな所が一番怖いの？』

愛ちやん餘程困つたといふ風にもぢ〳〵せるが、

『……厠にゆく時……』

『左樣。晩に？』

『いゝえ、お晝も……』

おほ……小さきお友達は皆笑ひぬ。先生も意外の顛かたむけて、『まあお晝も——なぜ？』

愛ちやんは可愛い、顔を眞紅にして、

『でも、でも、こゝにも神樣が見ていらしやるから……』

あとは聞えず。青葉がくれに幼稚園の唱歌の聲。

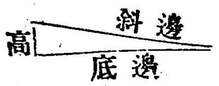
數學片々

H. K.

數學の問題や定理の講釋は已に學校の課業として諸子は殆ど食傷せらるゝ程であらうと思ふ、そこで偶にはアッサリとして間接に數學に關する話をして見よう。

勾配

勾配とは斜邊が水平線に對する傾きを云ふもので其の度り方は色々あれども、通常勾配といへば直角三角形の直角二邊の比即ち一邊を底邊にし之を1と定め他の一邊を高さとして其の長さを表はしたるものである。算術書によると斜邊を1と定めて高さを表はすものとしてあるものあれども、そは誤りである



諸子は鐵道線路に沿ふて諸處に二つの腕木を有する勾配標の建て居るを見らるゝであらふあれは線路勾配の變り目を機關師に示すもので腕木の上方に向へるは上りを意味し、下方に向へるは下りを意味し、直角に出て居るは高低なく水平なることを示す。此の時は LEVEL 即ちレベルと書てある、而して上り或は下りには 1/50 の如き文字が書てあるのは勾配の度を示すものであつて、これは五十分の一と讀むのである例へば水平線の長さ五十哩あれば、斜面の一方は他の一方より一哩高いのである。そこで勾配の率は分數の値の大なるだけ勾配は急となる譯である。我國の鐵道の規則にては鐵道の勾配は四十分の一より急にすることは出來ぬことになつて居る。四十分の一の勾配を有する鐵道も隨分あるが東海道の御殿場附近、日鐵の日光驛附近、關西の關附近及び關ヶ原等は著明の四十分の一なる勾配を有する地である。尤も碓氷峠の如きは四十分の一どころではないけれども、これはアプト式であるから別である。